特214
558

平田了山

鬪運讀本

木村書房

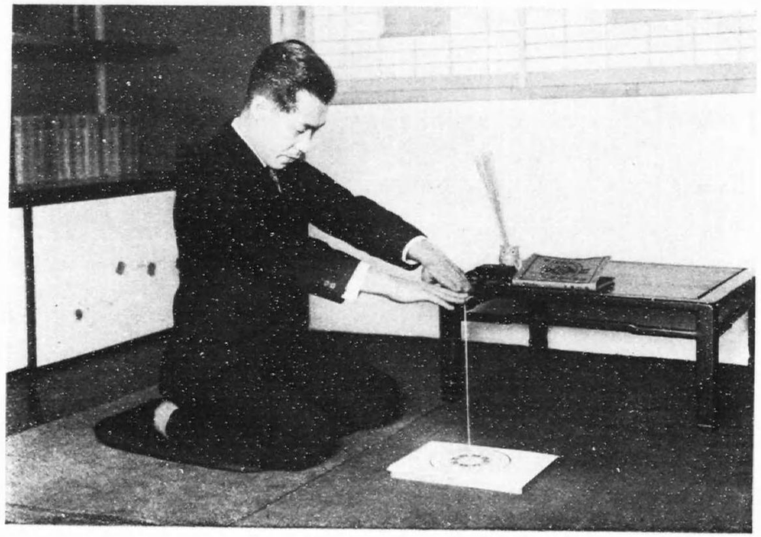
始

特214
558

平田了山著

鬪運讀本

木村書房



て め 定を吸呼て立を捧示に心中の盤易
。處るすこんさ離を手るたれ重や今

序

平田了山

私は實にあらゆる物に迷ひ拔きました。しかし結局は迷ふ丈では生きて行かれない事が判然してきました。その決心の契機を與へてくれたのが鬪運術でありました。私自身は、科學的に根據の無いものは如何にしても人に發表する事が出來ないのでありますが、同時に科學的に明かであると云ふ丈では何としても物足りないのでありました。卽ち科學的に明かに證明が與へられた上に、體驗的に更に明かに、私らの生命の生成に役立つものを求めたのであります。そして與へられたのが此の鬪運術でありました。鬪運術に於てはしかし科學的說明の方に傾いて、實際的方法に就いては、頗る簡單にしか述べず、又何よりも遺憾な事には、中心となるべき「正名」と「易」とに就いて、何ら徹底的に示す餘裕がありませんでした。其後の實驗と研究は、しかし、遂に、「正名」と「易」とに就いて、又其の學的根據の證明方法に就いて、私に確信を與へて吳れました。そこで本書が生れる事になつたのであります。

本書にはだから、「正名」と「易」とに就いて出來る丈詳しく明確に、その具體的方法を書

きました。又何よりも讀者の實際的體驗に役立つやうに、「新選名盤」と「易盤」を考案して之を附しましたから、讀者は本書を精讀されるならば、必ず「正名」と「易」との體驗が出來る筈であります。しかし私は讀者に賣卜者になつて頂くために本書を書いたのではありません。本書の意圖は寧ろ其の反對です。大日本帝國の國民として眞に生きる生命の力を得て頂きたいために、本書は書かれたのです。此は生命の本源を目醒し、生命の力を呼び醒す光でなければならないのです。私らの生活表現と生活意志を具體的に調整し力づける方法を、此書はしるしてゐるのです。最も迷信的と誤解されてゐる問題を、最も眞面目に取扱つたのです。勿論之を生かすか、殺すかは讀者自身の決定される問題ではありますが、たとへ何萬人の人が否定したり無視したりしましても、眞理は遂に眞理であります。眞理には眞理の力があります。泥の中に投げ込まれてゐても、光あるものは必ず心ある人によつて見出だされるでせう。

殊に最近は俗惡低級な迷信的言表をした書が續出して、却つて國民を迷はしてゐます。それは科學的と云ひながら、寸毫の學的說明がないのです、勿論體驗的事實は貴重でありませうが、矢張合理的證明がなければ本氣に信ずる事が出來ず、信ずる事が出來なければ、本統の意味の利用が出來る筈がありません。東洋の生んだ最も尊い學問と方法が、「迷信」と

云ふ言葉のもとに捨てゝ顧みられなかつたり、又は本統に「迷信的」にのみ信じられたりするのは何と言つても遺憾です。此の書は、此の意味で、迷信的でない鬪運の具體的方法を東洋古來の「易」と「正名」とを中心として說べたものであります。本書によつて讀者は先づ「姓名」や其他の固定的な言葉を數の辯證と音の辯證とによつて分析判斷されて、實驗的に、又理論的によくその眞理が理解されたならば、直ちに自己の姓名や其の他一切の言表に應用して、卽刻鬪運の生活に入つて頂きたい。しかし法律的に姓名を變へたり自覺なしに無理な事をするのをすゝめるのではありません。只自己の通名、雅號によつて自己の姓名表現、及びその他の言表或は文字表現を正して行けば宜しいのです。又、易も在來の易のやうに筮竹や算木の難しい方法をとらないで、本書に附した易盤によつて、最も合理的に、正確に、しかも子供にでもできるやうな簡單な方法で易斷して、自已に關した事、又は國家に關した事を斷じて、理論的に、又體驗的にその眞理が確信出來ましたならば、更に進んで、易の眞義を反覆考究して、眞に國民としての自覺と人間としての生命の充實とを理想として、眞理を宣揚傳道する運動に參加して頂きたいのです。

本書の成立は稻葉交咸、飯田天涯、林充胤、中山禮民、柴田南海、三宅正雄等の諸氏及び熊崎健翁氏の御好意によつて助けられた點が多く、此等諸先輩の意を本書が明かにして

をれば更に幸であります。又選名盤の選定編輯には大東愛知氏の力に據る處が多く、之も感謝致します。願くば本書によつて、「迷信」と「正信」との區別が明かにされ、易と正名との眞義が少しでも世の人々に悟られん事を。

（昭和七年一月二十三日）

闘運讀本（目次）

第一章　正名の意義

一　緒……一
二　正名と人格……三
三　正名と精神……六

第二章　言表の辯證

一　數の辯證……一九
一……二三
二……二三
三……二三
四……二三
五……二三
六……二三
七……二三
八……二三
九……二三
十……二三

十一……二二
十二……二三
十三……二四
十四……二四
十五……二四
十六……二四
十七……二五
十八……二五
十九……二五
二十……二五
廿一……二六
廿二……二六
廿三……二六
廿四……二七
廿五……二七
廿六……二七
廿七……二七
廿八……二八
廿九……二八
三十……二八
廿一……二九
廿二……二九
廿三……二九
廿四……三〇
廿五……三〇
廿六……三〇
廿七……三〇
廿八……三一
廿九……三一
四十……三一
四十一……三一
四十二……三一
四十三……三一
四十四……三一
四十五……三二
四十六……三二
四十七……三二
四十八……三四
四十九……三四
五十……三四

五十一……三四
五十二……三五
五十三……三五
五十四……三五
五十五……三六
五十六……三六
五十七……三六
五十八……三七
五十九……三七
六十……三七
六十一……三七
六十二……三八
六十三……三八
六十四……三八
六十五……三八
六十六……三九
六十七……三九
六十八……三九
六十九……四〇
七十……四〇
七十一……四〇
七十二……四一
七十三……四一
七十四……四一
七十五……四一
七十六……四一
七十七……四一
七十八……四一
七十九……四一
八十……四一
八十一……四二

二　音の辯證……四五

ア……四五
イ……四五
ウ……四五
エ……四五

オ……四六
カ……四六
キ……四六
ク……四六
ケ……四六
コ……四六
サ……四六
シ……四六
ス……四七
セ……四七
ソ……四七
タ……四七
チ……四七
ツ……四七
テ……四八
ト……四八
ナ……四八
ニ……四八
ヌ……四八
ネ……四八
ノ……四八
ハ……四八
ヒ……四八
フ……四八
ヘ……四八
ホ……四八
マ……四八
ミ……四八
ム……四八
メ……四八
モ……四八
ヤ……四八
イ……四八
ユ……四八
エ……四八
ヨ……四八
ラ……四八
リ……四八
ル……四八
レ……四八

ロ……四九
ワ……四九
キ……四九
ウ……四九
エ……四九
ラ……四九
三　文字と意味……四九
格の對比表　第三格が一又は二の場合……六一
同　三又は四の場合……六一
同　五又は六の場合……六二
同　七又は八の場合……六四
同　九又は十の場合……六六
音の對比表……六八
第三章　易の辯證
一　易斷法……九五
二　易の構成……一〇〇
三　易解釋……一〇六

内卦(乾)の部

乾爲天……一〇八
澤天夬……一一九
火天大有……一二九
雷天大壯……一四一
風天小畜……一五四
水天需……一六七
山天大畜……一八〇
地天泰……一九二
内卦(兌)の部
天澤履……二〇六
兌爲澤……二一八
火澤睽……二二八
雷澤歸妹……二四〇
風澤中孚……二五四
水澤節……二六四

山澤損……二八二
地澤臨……二九二
内卦(離)の部
天火同人……三〇一
澤火革……三一二
離爲火……三二六
雷火豐……三四〇
風火家人……三五四
水火既濟……三六八
山火賁……三八〇
地火明夷……三九二
内卦(震)の部
天雷无妄……四〇五
澤雷隨……四一八
火雷噬嗑……四三一
震爲雷……四四〇

風雷益……一八五
水雷屯……一二三
山雷頤……一三六
地雷復……一五〇
内卦(巽)の部
天風姤……一八九
澤風大過……一二六
火風鼎……一〇二
雷風恒……一六三
巽爲風……二一六
水風井……一九八
山風蠱……一四〇
地風升……一九三
内卦(坎)の部
天水訟……一二九
澤水困……一九五

火水未濟……二三九
雷水解……一八二
風水渙……二〇〇
坎爲水……一六〇
山水蒙……一二五
地水師……一二一
内卦(艮)の部
天山遯……一六九
澤山咸……一九五
火山旅……二一四
雷山小過……二三六
風山漸……二〇八
水山蹇……一八〇
艮爲山……一〇六
地山謙……一二五
内卦(坤)の部

天地否 ☰☷……一八〇
澤地萃 ☱☷……一八一
火地晉 ☲☷……一八四
雷地豫 ☳☷……一八六
風地觀 ☴☷……一八四
水地比 ☵☷……一八三
山地剝 ☶☷……一八八
坤爲地 ☷☷……一一〇
四易文獻……二二一
附錄
易盤
新選名表
變卦一覽表

闘運讀本

第一章　正名の意義

平田了山

一　緒

迷信とは何ぞやと云ふ問題に對して、正確に答へるためには、私らは自らが先づ迷信を離れなければなりません。「先づ疑へ」と云ふ事は、眞の學徒の常に有する標語であります。私らは、在來の迷信的事項を疑ひ盡すと共に、自ら知らざる事を全て迷信なりと斷じ去る獨斷を大いに疑ひたいのであります。

此意味に於て私は從來科學的根據の有無を疑はれた鍼灸の效果を更に疑ひ直して、新に皇方醫學としての心療術を創設すると共に、日夜、患者に接しての實驗の結果、從來迷信なりとせられた、姓名、家相、方鑑、人相、手相、推命等及び易斷に就いての、獨斷的迷信呼ばりを疑はざるを得なくなつたのです。そして辯證法の科學に於ける應用としての立

場から觀察すると、大なる眞理の存する事が證せられましたので、先づ鬪運の立場から、直接大衆の要求する處の、正名と眞の易斷との學理的に最も簡易正確な方法を示して行きたいと思ひます。私は先づ正名の問題の解説から始めたいと思ひます。

皮膚を整へる事が、進んで筋肉、骨格、内臓、腦髓を强健にする門戸であるに對して、姓名の平衡を得るやうにする事が、進んで宅相、方相、心相等を整へる契機となるのであります。そして心身が平衡を得て來れば、人相、手相、骨相、指紋、音相等も盡く變化して來るのであります。

而して、これら、身心兩面から與へる刺戟を受け容れる中心點は、即ち、信仰の世界であります。信無き處、健康も幸福も單なる外見の飾となり、何の意義も無いのであります。しかし乍ら反對に、信仰があれば、かゝる身心の修養は不要だと稱へる人があるならば、それこそ信仰の何たるかを知らない人であります。肉體との正反の對立を綜合した生命活動の本然の姿こそ純信であります。ホイツトマンは「肉體にして精神に非ずんば、精神とはそも何ぞや。」と叫びましたが、私は「肉體に信仰宿らずんば信仰にあらず。」「感覺に信仰宿らずんば信仰に非ず。」と斷言致します。

肉身の體驗を離れ、感覺の透過を經ずして、何處に信仰を求めませうや。信仰の世界は架空夢幻の世界ではないのであります。正反なきところに合はないのです。

熱鍼や、指壓や、觸指による皮膚刺戟療法としての心療は、此意味に於て、在來の精神療法を止揚しました。

私は更に進んで、精神の方面の刺戟として、一種の精神療法としての、宅相、姓名等の暗示の心理學的研究の一端に、舊著、「鬪運術」に於ても觸れました。併しその後、林氏や熊崎氏の説を實驗し、自己の方法上の誤りを訂正し、綜合的に、選名の規準と、その科學的意味とを明かにしましたので、此處に、この眞理を、皇方醫學及び大東新易の體系中の一部として發表し、有緣の士に、即刻御實驗を願ふものであります。

二　正名と人格

私らが一概に運命と稱するものゝ内には、先天的運命と後天的運命と、この兩者を綜合した中心的運命たる意志的、戰鬪的、創造的運命があります。先天的運命とは、自己出生前の環境、自己が祖先、父母より受けたる遺傳、素質でありまして、その分析には推命術が役立ちます。後天的運命とは出生後の環境、教育等でありまして、私らの意志は、たえ

ず、この先天、後天の兩運命の影響の下にありますが、意志の特質は、その戰鬪的創造力にあります。卽ち意志それ自身が、先天運や、後天運を支配し綜合し統一する力を持つてゐる點にあるのであります。

運は元來軍を進めるの意を有し、その中心は常に、創造的、戰鬪的意志にあります。人は總べてこの意志を持つて生れて來たのであります。それは先天的のものであると共に後天的でありまして、常にこの兩者を統合醇化する力であります。佛敎も基督敎もかゝる運命を否定はしないのであります。輪廻說や、攝理說は皆この運命に關する思想であります。

私らの信仰、生命の信仰はかゝる戰鬪的意志の活躍につれて、燃えて來るものであります。運の問題に觸れずして信仰を論ずる事は出來ないのであります。

さて意志的、中心的運命は、常に其自身としては働かず、たえず先天的運命と後天的運命とを止揚して働くものであります。故に佛敎に於ても、「南無阿彌陀佛」の稱號を唱へ、「南無妙法蓮華經」を稱し、基督敎に於ては、いやしくも祈る時、「基督の名」によつて祈らざる事は無いのであります。基督の名によつて祈る時、基督の內容が顯れるのであつて、「名の如きは符號である。基督の名によらうと、石塊の名によらうと同じだ。」と考へる人があるならばその人は遂に緣無き衆生であります。

昔から「武士は名こそ惜けれ」と詠じ、名を重んじ、名を尊んだのは、我が大日本帝國の尊ぶべき傳統であります。

見よ。動物、植物、天地、自然の一切に名のある事を。名なきものは存在しないのであります。私らは神や靈や目に見えぬ實在にも勿論名を與へるのであります。老子の所謂「無名」も亦一の名であります。畢竟、意識のある處名稱存せざる事なく、名稱存する處には何らかの本質が存在するのであります。フツサールは此意味に於て、言表(Ausdruck)の意味を哲學的に探究し、彼の所謂現象學(Phänomenologie)を發表したのであります。

名を正す事は、實に本質を正す事であります。「名は實の賓也。」とは古語でありますが、正言、正字の裏には、必ず正意を含むものであります。殊に、完成したる象形文字を用ゐる皇文に於きましては、實に明かに此の事が言へるのであります。

名は、肉體に於ける皮膚の如く、尊貴なる精神を包む外皮でありまして、精神の破れは直ちに名に反應し、名の破れは直ちに精神の破壞を誘導するのであります。

皮膚を心療する事が最も簡易にして最も有效なる治療法たる如く、名を正し、名を淸める事が、最も簡にして、最も有效なる闘運の術であります。

殊に一切の文字言表中、姓名は其人の人格を顯すものでありますから、最も大切なる意

味を持つてゐます。姓名を正す事、此は最も有效なる一種の精神療法であります。

しかし乍ら、信仰の中心なることの忘るべからざるは言ふ迄もなく、一方肉體の中心を護る事も忘れてはなりません。唯姓名を改めると云ふ如きでは無意義です。

姓名が自己全人格の表現なる事を信じて、これを正し、而して正されたる姓名を確信をもつて、全力を擧げて、出來る丈廣く、出來る丈徹底的に、使用せねばなりません。

しからば姓名を正すとは如何なる事を指すかと云ふ事に就いては、之を次に明かに致しませう。

三　正名と精神

姓名には、音調と劃數との二表現形式がありまして、その二表現形式を綜合したものが姓名の意味の表現形式であります。姓名に限らず、總べての言葉には、この事實が共通致します。この表現形式を整へる時、姓名其他の文字表現の中心が出來るのです。

勿論、姓名が良くなつたが故に、幸運が來るのではありません。自己身心の中心を定めんがための最も良い手段としてのみ、かゝる整正が許されるのであります。姓名丈變へれば萬事良くなると考へれば、それは迷信です。生きんとする强烈なる精神なき處、千百の姓名改善も遂に何の效果も與へないのです。

姓名を好正して、自己運命の好轉に資せんとする人は、今一度、眞の幸運とは何ぞやと云ふ事を良く反省する必要があります。幸運とは努力奮鬪の信仰生命を正とし、物質的環境の整調開拓に於て身體の健康を反として綜合すべきものでありまして、決して、單なる名聲や、外見的成功をもつて、幸福は綜合出來ないのであります。純眞なる倫理的動機に發せざるもの、健全なる健康、肉身の中心を得る事を顧みざるものには、眞個の表現過程、開運過程は顯はれて來ないのであります。

かの卜を賣り、占を賣り、鑑定を賣るに際し、若し、道義的立場と、肉體鍛錬の立場とを離れて之を爲す限り、その賣る事も亦失敗であり、罪惡であります。「賣る事」が必ずしも惡いと云ふのではありませんが、「賣り方」が惡いと申すのであります。正當なる勞銀は之を要求し、又之を與へなければなりませんが、唯運命の好轉を謀るやうな大事業を卒爾としてなせば、禍は直ちに其身に還つて來るのであります。

故に、姓名の選擇改正の如きは、道義的、信仰的運動の反作用としての肉體的生命的運動を認め、それらの綜合運動として、むしろ精神療法として之を行ふべきもので、姓名判

斷や、選名丈を、切り離してなす事は不徹底であります。卽ち、昔から、寺に入つたり、出家すれば、俗名を棄て、新生の名を得る意味にて、新な名を得ましたやうに、新生活に入るためにこそ、姓名を變へるべきで、漫然たる、而して決心なき改名は無意義です。又理由を知らず、意味を知らず、唯漠然と改名する如きは、全く不可です。

充分なる理由と自覺と確信とをもつた改名のみが、充分なる偉力を發揮するのであります。而して、その正名の意味を、努力精進の鐵の如き信仰の內に熔しこんで、徹底的に正名を宣揚し、働かせて、始めて、その正名の義が報ひられるのであります。世の中には姓名判斷家等に改名して貰つて、何らその名の意義を捕へる事も無く、漫然と使用してゐる人がありますが、それでは何の意味もありません。

身を精神界、信仰界に投じ、傳道の使徒となり、身心を修養鍛錬して、中心を得た人間となつて大に自他のために働き、皇法を世界に宣揚する決心の下にそれにふさはしき選名をなすべきです。その構成劃數、その音韻、その意味の總べてが綜合された如き、良き名を求め、內容外觀共に調和せねばなりません。かくてこそ名は實を助け、精神は益々其の名を擧げ、遂に其名は竹帛に垂るゝに到るのであります。同時に精神も亦その名と共に永生を得るのであります。

生命と精神とは正名と共に不朽不滅であります。大日本帝國の存する限り、祖先の姓名の存するかぎり、無數の精靈は我帝國の山河に滿ちてゐるのであります。

思へば德を永遠に生命づける名の力こそ偉大であります。見よ、滔々たる世俗の人々は自ら其名を汚し、祖先の名を辱め、行爲に表現に、實に亂暴狼藉を極めてゐます。

孔子、禮を定むるの意も、內容を護り、內容を發展させるための、表現形式尊重の精神に出でたものであります。名こそ禮の中心であります。名正しくて身調ひ、身調つて家整ひ、家整つて國治り、國治つて、天安ずる事は正しく理の當然であります。

現代人は、我大日本帝國を呼ぶに日本をもつてし、あたかも人を呼び棄てる如くにしてゐます。大日本帝國なる言表は、大であり、帝國である事の表現でありまして、大と帝國と云ふ自覺を捨てゝは、單に日本丈では存在し得ない暗示が、既に文字に丈でも表れてゐるのであります。これら、常人のもつて極めて小問題と感ずる事の內に、實に國家の存亡を決する重大事が、ひそんでゐるのであります。一億の同胞が、等しく、「大日本帝國國民」と自覺し、この文字を用ゐる事と、日本、日本と呼び棄て、用ゐ棄てる事とは、その間、實に驚くべき、相違が現れて來るのです。これらの事も、世の教育者、宗教家等が毫も、姓名表現や、文字表現の意義を反省せず、自ら名を汚し、遂に國家の名迄不知不識汚

すに到つた一例であります。

大日本帝國なる言表と文字とは、劃數、字義、音韻共に最大吉祥の文字でありまして、大日本帝國國民は、あらゆる文書、言表に盡くこの言葉を用ゐ、不知不識の内に、國民の眞の自覺心を強めねばなりません。自己の姓名も此際斷然檢討し、良名は、「自分の名は良し」との自覺を持ち、惡名は卽刻改めて、各々信仰更生の生活に入らねばなりません。寸刻も躊躇してはなりません。

凡そ運命に關し、大事を決行せんとする時、進路に迷ふ時、決心し難き時は、先づ、先驗辯證たる易斷によつて進路を定め、神明に祈り、自らは身體の中心を決して、所謂緊褌一番、丹田に全力を統一調節して、事をなすべきであります。

しかし、神明に感じて、事を決せんとするには、平素充分に、自己の中心を養はねばなりません。自己の中心を肉體の方面から養ふの道は、「心療」であります。自己の中心を精神的自覺の方面から養ふの道は、卽ち「正名」であります。名を正して始めて、家や、方相を正す事が出來易くなるのです。

名を正した效果は、その人の精神に對し、而して精神を通して、肉體に對し、肉體を通して、萬般の事象に、直ちに現れて來ます、俗に所謂「改名は三年にして效あり」と云ふのは、最も惡い場合を指すのであつて、その人が捨身になつて、生活を更新する意氣でやるならば、名を正した瞬間から、既にその神效が顯れてゐるのです。

まして他に對して使用される毎に、正しい名の暗示は、全的に響いて參ります。而して遂には、其人の有する先天的運命を根本的に調整し、完全なる人格の完成に働くのであります。

先天的運命を科學的に分析する方法は、推命術であります。しかし推命の結果は、唯、先天運の決定に止つて、後天運、及び其人の意志的創造的運命の指導には直接役立たないのであります。人相や骨相や手相、指紋等の分析も同樣であります。後天的運命を改造し、先天的運命とそれとを、意志的創造の立場に於て、調整綜合統一する出發點となるものは、卽ち、正名と心療であります。而して正名と心療とに先立つ先驗的辯證法が卽ち易斷であり、易斷と、修養努力とに先立つ立場が卽ち純なる信仰であります。基督が架上に倒れた時、果して彼は運命に倒れたのでせうか。否々彼こそ最も幸福なる人間でありました。千載の下、無數の人々が、今尙彼の名によつて祈るのは、全く彼が、信仰の中心に生き拔いたからです。彼は勿論自己の運命をよく知つてゐたのです。彼がゲツセマネで、「神よ願くば此苦杯を取り去り給へ。」と祈つた事はよく此間の消息を語つてゐます。彼はユダ

の背反をも豫知し、自己の不幸をも知つてゐました。しかも毅然として難に赴いたのは、卽ち形式的成功を棄てゝ、萬世の名を守つたからであります。

孔子は易を知り、易を正し、而も身は不遇の中に死んだと思ふ人があるかも知れません。しかし乍ら孔子や顏回の徒は、肘を曲げて枕とし、天を仰いで、無限の幸福に居たのであります。

ソクラテスは、人相家に、「色慾の權化のやうな人相だ。」と云はれて、心からそれに同感しました。しかも彼は申しました。「私の心は色慾で一杯だ。私は唯意志の力で抑へてゐる丈だ。」と。嗚呼、彼が、逃れ得る獄屋の扉を自ら閉ぢ、悠然として死地に赴く過程をあの「クリトン」に讀む時、而して、救はれんとする機會を、堂々と自ら破つて、毒杯を呑んで死んだ過程をしめすあの「ソクラテスの辯明」を讀む時、運命を通觀しつゝ、しかも、千載の芳名のために、死を選んだ動機を考へて、これこそ鬪運の聖者である事を感ずるのであります。

「萬金惜からず、唯名を惜む」のは、唯に我大日本帝國の祖先のみではありません。外國の人々の內にも、名を惜んで、節に死し、義に發して、名を淸くした人は、如何に多いか解らないのであります。

正名の道は此處に徹する大道であつて、かの浮雲の如き財物を目的とするものではありません。

基督の名によつて祈らぬ人も、南無阿彌陀佛を稱へぬ人も、南無妙法蓮華經を唱へぬ人も、自己の姓名丈は何億遍となく、稱へ唱へられるのであります、それが正意、正調、正象を有する時は、自他に對する驚く可き暗示となり、生命を搖り動かすのであります。

私らは、聖者、烈士の行動に感激し、その足跡を追はうとするとき、種々なる宿緣によつて、その念願を妨げられるのです。そして再たび三度び、墮落の淵に陷るのです。

この迷執を逃れて、安心立命するために、宗教家こそ、巧みに、人間の生命活動規定の中心としての言表を捕へたのです。こゝに基督の名による祈、彌陀の稱名、南無妙法蓮華經等の題目が出來たのです。しかし如何に熱烈なる宗教人も矢張、これに併行して、自己の姓名を無意識に稱へてゐるのです。そして又、大日本帝國國民としては、何れも皆、天皇陛下の御名によつて、大日本帝國の萬歲を稱へるのであります。

こゝに宗教人たると否とを問はず、一切の生活者の姓名規定の正が要求されるのです。

正名の暗示によつて、私らは無意識の裡に墮落から救はれ、無意識に、身心の中心を得て、自然と信仰生活を强めて行くのです。そして基督の名によつて祈る事や、稱名、念佛

等の正義も自然に判然解つて來るやうになるのであります。

或人はしかし、自分は最早老年だから正名の要はないと考へられるかも知れません。しかし姓名は、一生丈のものではなく、永遠無窮に殘るものであり、且つ法を聽き、道に從ふに、遲過ると云ふ事は無いのであります。ことに老年になれば、それ丈人に知られ盡してゐます故、正名の效果は實に卽座に顯れるのです。

釋尊の涅槃に入る時、婆羅門の一僧侶は、はせ參じて最後の法を聽き、思ひ殘す事なく釋尊に先つて死んだのであります。正名の一悟もその眞意を知れば、正しくその刹那に天地の開ける思ひがすることでありませう。

しかし乍ら一般人にとつては、正名には普通痛烈なる苦痛を伴ひます。過去への執着、迷信と云はれることへの恐怖、種々なる宣傳上の一時的不便、習慣に慣れないための矛盾感、これらによつて惱まされるのです。

けれ共、大死一番、決然として、更生の新生活に入る時は、闇暝の中より光明が顯れ、迷の內から却つて大悟が湧いて來るのであります。

喜びは卽座に起つて、日と共に增大し、精神は日々强まつて、身體も從つて健康となり、何よりも自己の正名に對して、働き、努力し、精進し、肉慾の世界を離れて、精神生活に

入り易くなつて來るのであります。

故に重ねて申します。姓名を正すの道に入るには、先づ精神生活に入る決心を要するのです。勿論正名によつて精神生活に進む度は增されるのですが、最初にも最小限度に於ても、精神生活を念願する熱意を必要とするのです。

姓名を變へて、金が出來ますやうにと云ふ樣な態度では、私らは正名の效果をば期待出來ないのです。勿論、正名によつて、經濟狀態も良くなります。しかしそれは飽く迄副效果です。中心は正名によつて私らの精神生活が、加速度的に進展するといふ點にあるのです。正名はこのための努力の車にさした油です。いくら油をさしても、動かす意志が無ければ駄目です。動かす意思が强ければ强い程、油の效果は顯れて來るのです。

「俺はこんな良い姓名だ。俺はこんな正しい名だ。」といふ自覺がぴーんと響くために身心全體が、ちやんと中心を得て來るやうにならねば不可です。

かうなれば正名の效果は驚く程强く作用します。更に進んで、その正名に適ふやうに、どん〳〵仕事をして、社會的に働き出せば、この正名の響は萬人に響いて行きます。これこそ正しく、正名の靈動と云ふべきでせう。

我大日本帝國は、昔から、「言靈の幸ふ國」と云つて、言表の靈的意味が認められ、智仁

勇兼備の三十一數の響を愛して、和歌の傳統を保つてゐます。言葉に宿る靈、文字に宿る靈は、私らの内心の、靈性の顯現度に相應じて、總べての人々に響いて行くのであります。名は一つの無弦の琴線であります。正名はその整調です。びーんびーんと響いて行く正名の響は、遂には地に感じ、天に感じ、宇宙の中心に感じて行くのであります。正之によつて守られ、義之によつて發し、遂に名は竹帛に垂れるのであります。名の德も亦大なるものではありませんか。

しかるに從來の姓名判斷と稱するものを見ますと、何故に姓名が運命を支配する中心であるか、何故に劃數に善惡があるか、何故に姓名に格があるか、何故に格の對比に善惡があるかと云ふ事に就いての、科學的說明や道義的根據の委曲を盡す事が無いのであります。これでは正名を弄ぶと言はれても仕方がありません。而して色々な姓名判斷の流があつて、人々は其の選擇に迷ひ、遂に、却つて、原姓名よりも惡い姓名に改める人すらあります。これではまことに困るのでありますが、私自身も實は、その迷つた一人でありました。しかし幸ひ、多數患者に就いての實驗と、辯證法的に數理を考察した結果と、林充胤氏、熊崎健翁氏等の御親切なる指示とにより、幾度も反省考究體驗を重ねて、次に述ぶる如き數理上の證明を發見し、格の對比についての綜合的觀察を加へ、正名に於ける意味の

尊重を力說し、更に音調、劃數、意味の間にある辯證過程を明かにしました。但し、次に述ぶる各項の内、天、地、人の三格、外格總格の取り方に於て、名は、第一格、第二格、第三格、第四格、第五格と變つてゐますけれども、その取り方は、熊崎健翁氏が、其著書中に發表された考へ方でありまして、永遠に熊崎氏の發見として殘るべきものであります。その引用に就きまして、熊崎氏は好意ある御手紙を下さつて、其旨を明記する時は、眞理宣揚のため、喜んで許す旨を傳へられたのでありまして、此點は厚く讀者と共に感謝したいのであります。

又現行の劃數を正とし、草書等の劃數を反とする如き綜合的考へ方についての指示は、林充胤氏（來蘇堂内）に負ふ處多く、更に、康熙辭典等を原由とする劃數の算定を綜合的中心に考へる考へ方は、此亦熊崎健翁氏の著書に示す處の說に指示されたものである事を明記して共に感謝致します。

數の有する意味象徵の記述に當つて、右二氏及び多くの先輩の指示に俟つは勿論でありまして、厚く感謝致します。從來私自身の考へ方の不徹底のため此等諸先輩の指示に服する事の出來なかつたのみならず、あへて反對的言辭を用ゐたのは全く從來の著書には何ら科學的說明がなく、且私自身の實驗の足らなかつたためでありました。しかし實驗により、

又辯證的證明の完成によつて、此等の疑點が晴れましたので、此處に、易と正名の精神的意義を高調して本書を出す事になつたのであります。願くば讀者は著者の意を體して、正名し得ない人は、その姓名の缺陷を反省して、ソクラテスの如く意志によつて、又祈によつて補つて行つて下さい。すると、自然に正名の時が與へられるでありませう。又直ちに正名し得る幸福者は、その正名をして無意義ならしめぬやうに、斷然精神生活に躍入して、大日本帝國のため、世界の總べての人のために努力奮鬪の生活を始められん事を念願します。又正名の問題に先立つ易を却つて後章に論じたのは、全く讀者の鬪運への實行を先づ願ふからです。

第二章　言表の辯證

一　數の辯證

私は此處に、數の辯證法的意味を證明しやうと思ひます。といふのは　數の辯證法的意味が、鬪運術の根本をなしてゐるからであります。

辯證法は西洋に於てはアリストテレスの時代から考へられ、ヘーゲルに到つて唯心論的に完成し、マルクスに於て唯物論的に發展した基本的の考へ方でありまして、形式論理學における歸納法と演繹法とを綜合した綜合的の考へ方であり、その基本の型が正反合（卽ち These, Antithese, Synthese）にあらはされてゐる事は、餘りにも知られてゐます。しかしこの辯證法を「數」及び自然現象に、一つ一つあてはめて行く仕事は、却つて東洋の先人によつて完成されたのであります。易學や數理の說がそれでありました。

易は數理を基にすると云ふ人がありますが、それでは說明が足りません。易の數理には辯證法が先行してゐるのであります。辯證其自身の辯證を正とし數理の辯證を反として、

それを象の辯證に綜合したものが、易の理であります。

又易の理に從つて占斷する際の態度としては、天(神、靈)を正とし、數を反として、判斷によつて象に綜合するのであります。而して象に就いても天象、地象、人象が各々正、反、合を形作つてゐまして、且又天象それ自體についても辯證がなされ、地象、人象共に同樣であります。

天象の數理は十(幹)(五の倍數)を根基とし、地象の數は十二(枝)(六の倍數)之が根基となり、而して人象に於て、始めて中心を得た數、九數がその根基となり、中心を除けば四の倍數となつてゐます。その理由は、一二三四五六七八九十の基數の內、一、三、五、七、九は正の數、で天に當りその中心は五數であり、二、四、六、八、十は反の數で、その中心は六數であつて、五、及六を各々陰陽に別てば、各、十及び十二になるからであります。更に、天數地數の總和は五十五でありまして、その內から一本を大極として取れば、五十四になります。これを天地人の三つに三等分しますと十八數を得ます。卽ち十八數は人數でありまして、これは、天數地數の綜合から得た數ですから、二分して九の人數の基數を得ます。この九から大極として一數(五)を引き去ると八數を得ます。これらの數が天地人象の數理辯證の基になつてゐるのですが、象を中心に數をあてはめて辯證する方法に先立つて、數其自身の連續的發展を中心に象へ辯證する立場があります。その立場の方を先づ先に說明して直ちに正名への適用を考へませう。

〔一〕數は正の數です。象にあてはめると萬事萬物の基元となり、最先の吉祥數といふことになります。所謂自己の分限を超えての、成功、健全、富貴の暗示となります。

〔二〕は正は二、反は一で中心が無いために、混沌たる未定數として、象は、獨立の氣力無く進退の自由を失つて內外波瀾を生じ、常に不安動搖の心が起り、疾病、遭難の意となり、破滅、薄弱、分離の暗示があります。

〔三〕は三が正、反は中心をとつて二分されて一、從つて合も亦一で、象に辯證すれば、陰陽抱合、萬物形成確立の象となります。卽ち吉兆慶福のしるしです。成功發達、智識達成、頭領となつて自然の幸福を享け、大事大業を完成し、名望、名譽、福祉があつて至大の幸福を暗示します。

〔四〕は四が正、反は中心なくして二分されて二、合は中心なくして二分されて一、となり、しかも正反合の一形式を揃へつゝ中心なきまゝ合に於て二分された儘に終るをもつて最惡の數となり、象は破壞、不具、滅亡となり、獨立の力を失ひ、辛苦困難の暗示があり、放逸、破滅、逆難の響があります。

〔五〕は、五が正、反は中心があつて二分されて二、合は中心なくして二分されて一となり、四と異つて、眞中の反で中心を得てゐますから、象は陰陽交感し、和合、完全、偉大なる成功の象となり、精神の敏活、身體の健全、福富繁榮の暗示があり、ことに中年によく、圓滿、尊榮無比の暗示を持つてゐます。

〔六〕は、六が正、反は中心なくして、二分されて三、合は中心があつて二分されて一となつて終ります。從つて象としては、天德地祥を兼備し、慶福豐大、萬寶集る形となります。

〔七〕は、七が正、反は中心があつて二分されて三、合も亦中心があつて二分されて一、從つてすべてに中心がありますから、獨立、獨歩、權威の象となるのですが、剛情の響が起り易い暗示があります。

〔八〕は、八が正、反は中心なくして二分されて四、合も中心なくして二分されて二、反も亦二分されて中心がなくて一となりますので、總べて中心がないまゝ辯證發展しますから、非常に働きの強い數となつて、いかなる障害をも突破してつき進み、千辛萬苦を排して目的を貫徹し、名實を守つて忍耐し、遂に成功する數となります。

〔九〕は、九が正で、反は中心があつて四、合は中心がなくて二、反は中心がなくて一、となりますから、始めは一時的に利を得、功を得ても、遂に逆運、貧苦、遭難の暗示が強まり、孤獨、寂寞、凶禍の象となります。

〔十〕は、十が正で反は中心がなくて五、合は中心があつて二分されて二となり、合も亦中心がなくて二分されて一となります。中頃一時、功を立てますが、遂に氣力を失ひ、不如意、障害、失敗、孤獨の暗示があります。

〔十一〕は、十一を正とすれば、反は中心をもつて二分されて五、合も中心をもつて、二合されて二、反は中心なくして二分されて一となりまして、陰陽新に來つて天賦の幸福を享ける象となり、萬事順序良く發達し、穩健、着實に發展する暗示があります。これは、正反合とも中心を得てゐますから、最後の反で分れてゐることも差支へありません。

〔十二〕は、十二を正とすれば、反は中心なくして二分されて六、合も中心なくして二分されて三、反は中心をとつて二分されて一となりまして、最後の中心も反の時の中心ですから、概して、無理をして勉めて、却つて失敗する象となり、孤獨、失敗、逆境、病弱、遭難、困難の暗示となります。

以下同樣に正反合を繰り返し、二分してそのたびに、奇數があるたびに中心をとり、偶數ならば中心をとらずして進んで行けば宜しい。中心があるときは（中）、中心なきときは

(分)と書して、辯證形式のみを示しませう。

〔十三〕 十三(正)、(反)(中)六、(合)(分)三、(反)(中)一。

從つて此の數は、中心と、分離が交互に來る數となり、忍從事に當つて、巧みに難事を切り拔け、大功を奏し富貴、幸福に到る象となり、智慧に充ちた暗示となります。西洋で十三を凶數とするのは全くの迷信です。基督の弟子の數が十三だといふかも知れませんが、基督を入れゝば、十四の集團です。十四こそ惡いのです。

〔十四〕 十四(正)、(反)(分)七、(合)(中)三、(反)(中)一。

この數は、最初の反で中心を得てゐないため、吉却つて凶となり、功あつて顯れず、煩悶孤獨の暗示となるのです。

〔十五〕 十五(正)、(反)(中)七、(合)(中)三、(反)(中)一。

この數は、十二と異つて、最初の反で中心を得てゐますから、最大の好運、福壽圓滿の象となるのです。順和、溫良等の暗示があり、從つて上より愛され、德望が高く、大業に成功し、富貴、榮譽を得る暗示を有してゐます。

〔十六〕 十六(正)、(反)(分)八、(合)(分)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

この數は、最後が合で分れてゐますから、八に比べて幾分弱い象ですが、最初から最後

迄ずつと分れてゐますから、雅量があつて、人望を集め、人が服從し、富榮發達、大志大業をする象となるのであります。又凶から吉に還る象となるのです。

〔十七〕 十七(正)、(反)(中)八、(合)(分)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

此數は、最初の反で中心を得てゐて、最後の合が(分)のために、剛の象がありますが、愼む時は、その剛を調節して意志堅確、萬難突破の氣力の暗示となります。しかし剛を働かし過ぎると必ず厄難に遇ふ象となるのであります。

〔十八〕 十八(正)、(反)(分)九、(合)(中)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

此數は、反分、合中、反分を繰り返してゐますから、鐵石心と發達運を併有したやうな象となり、志望を達するに萬難を破り、智謀、權力によつて、名利を得る暗示があるのですが、もし(合)(中)の剛を守り過ぎると、非難、遭難の危險を暗示されて來ます。

〔十九〕 十九(正)、(反)(中)九、(合)(分)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

此數は、後の(三)は皆分ですから、一面、智能活動の象がありますが、最初の(反)に(中)があるため、內外不和、困難、辛慘、病弱、刑罰等の暗示が響いて來ます。

〔二十〕 二十(正)、(反)(分)十、(合)(分)五、(反)(中)二、(合)(分)一。

此數は最初の反合が分で、二度目の反が中心を得て、最後の合で復分れてゐますから、

大變破壞的な象となるのであります。災難、凶禍、逆運の暗示となり、進退窮まる暗示ともなります。

〔二十一〕 二十一(正)、(反)(中)十、(合)(分)五、(反)(中)二、(合)(分)一。

此數は、(中)、(分)、(中)、(分) と順序よく變化し、ことに反で中を得てゐますから、萬事成形、確定の姿となり、獨立、權威の象となります。そして頭領、長上、尊敬、富貴等の暗示となり、又、名譽尊榮の暗示となります。但し強い強い頭領の形ですから、女性にはいけません。

〔二十二〕 二十二(正)、(反)(分)十一、(合)(中)五、(反)(中)二、(合)(分)一。

此數は、最初の反によつて、既に分裂せるものを、後で、(合)(反)に於て強ひて(中)を得しかも、又最後の合で分れてゐますから、不如意、挫折の象となり、薄弱、困難、無氣力、病弱、孤獨、危難の暗示となります。

〔二十三〕 二十三(正)、(反)(中)十一、(合)(中)五、(反)(中)二、(合)(分)一。

此數は、ずつと中が續いてゐるので偉大な隆昌、權威の象でありますが、最後の合で、分れてゐますので、進み過ぎ、感情鋭敏の暗示を含みます。從つて、婦人には強すぎますが、男性にとつては、強大な暗示があります。

〔二十四〕 二十四(正)、(反)(分)十二、(合)(分)六、(反)(分)三、(合)(中)一。

此數は、最初は分がつゞいて、經路の困難を暗示しますが、最後の(合)(中)が強く働いて、無一物中から大功を生じ、才略、智謀によつて、大功を奏し、資財も次第に後になる程蓄積されて、晩年になる程良い暗示が働きます。

〔二十五〕 二十五(正)、(反)(中)十二、(合)(分)六、(反)(分)三、(合)(中)一。

中程に(分)が續く爲に、稍々一方に偏する象が出來ますけれど、最初の反に、(中)があるため、又最後に(合)(中)があるために、資性英敏、貴重な才能を有する暗示を生じ、中程の(分)の惡暗示をのぞくため、過剛驕慢をつゝしみますならば、凶變じて吉となる象であります。他人との平和が第一と心掛けるべき數です。

〔二十六〕 二十六(正)、(反)(分)十三、(合)(中)六、(反)(分)三、(合)(中)一。

此數も、最初の(反)が(分)であるために、波瀾、變怪の暗示を有しますが、中程と最後の(合)(中)によつて、英才、俠氣、俠情の暗示を生じ、更に、(反)(分)(合)(中)の繰り返しにより、大波瀾、大變動の暗示が、極めて明かに出てゐますので、萬一、自省を失へば、亡產破家の象となります。所謂英雄暗示數の一であります。

〔二十七〕 二十七(正)、(反)(中)十三、(合)(中)六、(反)(中)三、(合)(中)一。

此數は、最初は(中)の連續によつて、中年頃迄の智謀、努力、順調を暗示しますが、後に(反)(中)によつて、中絶、半途斷絶の象となり、刑罰、遭難、孤獨の暗示となります。もし之にたへて、一段と奮勵、自省すれば、最後の(合)(中)が生かされます。總じて、自我心強く、非難の象となつてゐます。

〔二十八〕　二十八(正)、(反)(分)十四、(合)(分)八、(反)(分)四、(合)(分)二、(反)(分)一・

此數は全部(分)ですが、八數が、最後が(合)(分)であるのと異つて、最後が(反)(分)となつてゐるために遭難、非難、誹謗の暗示を強く伴ひ、厄難、傷害の象があり、禍亂、爭論、逆難、刑罰の暗示多く、又波瀾變動の暗示があります。

〔二十九〕　二十九(正)、(反)(中)十四、(合)(分)八、(反)(分)四、(合)(分)二、(反)(分)一・

此數は、二十八と異り、最初の反に中があるため、智謀に秀で、奏功、受福の象があり、活動的の象ですが、後に(分)が續き、殊に最後が(反)(分)であるため、一面不平、不足、荒亡、猜疑の暗示を伴ひますから。自己の智謀に任せて妄進することを慎むべき數です。婦人にはそれ故あまりよくない數です。

〔三十〕　三十(正)、(反)(分)十五、(合)(中)七、(反)(中)三、(合)(中)一・

此數は、終に(中)が續いてゐますが、最初の(反)(分)が強く働きますから、投機的、山師的暗示が頗る強い數です。もし最初の(反)(分)の暗示に反省注意し、他運との配合が良ければ、大成功の象となり、惡ければ、大失敗の象となります。即ち孤獨、失意等の暗示を有します。

〔三十一〕　三十一(正)、(反)(中)十五、(合)(中)七、(反)(中)三、(合)(中)一・

この數は、全部中を得たる上、最後の(中)が(合)ですから、智仁勇具全の好象でありまして、意志の堅固、千挫萬難に屈せず、確實の地歩を固めて、大志、大業をなす暗示となり、更に衆人を統率して名譽、繁榮、富貴、幸福を致す暗示があります。

〔三十二〕　三十二(正)、(反)(分)十六、(合)(分)八、(反)(分)四、(合)(分)二、(反)(分)一・

この數は二十二と異つて、最後は(反)で分れてゐますから、非常に働の強い意味と共に、僥倖多望の暗示があり、上長の引立厚く時を得て非當な成功をする暗示があります。更に溫良、隆昌、繁榮の至上の幸福暗示があります(大日本帝國の總劃數)。

〔三十三〕　三十三(正)、(反(中)十六、(合)(分)八、(反)(分)四、(合)(分)二、(反)(分)一・

この數は、最初の反に(中)があつて、あとは三十二と同樣ですから、鳳鸞相會ひ、成形確立、權威智謀、盛運隆昌、剛毅果斷の最吉祥の象ですが、最初の(中)がしつかりしてゐない場合、或は最初の中があまり剛毅果斷に過ぎた場合、後の反は總べて倫落暗黑極衰破

壞の作用として働いて來ます。此點を注意しないと不可です。ですから輕々に此數を用ひてはいけません(中華民國の總劃數は之に當ります。但し、サを六劃と採る)。

〔三十四〕 三十四(正)、(反)(分)十七、(合)(中)八、(反)(分)四、(合)(分)二、(反)(分)一。

この數は、最初の(反)も最後の(反)も分ですから、破壞、亂離、內外波瀾、齟齬、慘憺の象となるのであります。刑傷、發狂、業禍の暗示、破家亡身の暗示となります。

〔三十五〕 三十五(正)、(反)(中)十七、(合)(中)八、(反)(分)四、(合)(分)二、(反)(分)一。

この數は、(中)はすべて、始にあつて、溫良和順の象とはなつてゐますが、(後)が皆分れてゐるため、不徹底、無勢力、無膽略の暗示が強く、氣力を振つて(分)中に(中)を得る事につとめる必要がある數です。

〔三十六〕 三十六(正)、(反)(分)十八、(合)(分)九、(反)(中)四、(合)(分)二、(反)(分)一。

この數は、眞中の反で(中)あるのみにて、殘りは總べて(分)なるのみならず、最後の(反)で分れてゐますから、所謂英雄運の暗示となり、波瀾重疊、浮沈萬態の象です。俠氣、俠情に富み、己れを捨てゝ他に盡す暗示をも有して來ますが、自分自身は、波瀾、變動、極衰、倫落の象があるのです。

〔三十七〕 三十七(正)、(反)(中)十八、(合)(分)九、(反)(中)四、(合)(分)二、(反)(分)一。

此數は、(反)(中)が二つつづき、獨立、生行、權威、忠實の象がありまして、又、物事通達、和暢、熱誠、天賦の大幸福を受け、終生富榮の暗示があります。しかし、最初の(反)(中)が働き過ぎると、孤立の暗示が出て來ます。

〔三十八〕 三十八(正)、(反)(分)十九、(合)(中)九、(反)(中)四、(合)(分)二、(反)(分)一。

此數は、中程の(合)(中)によつて、大志、大業を遂げる暗示もありますが、後の(合)(分)によつて、頭領の才なく衆信を得難く、平凡、薄弱、無力の象が加はつてゐます。但文藝技藝方面には宜しい。

〔三十九〕 三十九(正)、(反)(中)十九、(合)(中)九、(反)(中)四、(合)(分)二、(反)(分)一。

此數は、(反)(中)、(合)(中)、(反)(中)の形勢によつて、禍變一變して、平福に還る象となり、權威、長壽、富裕の暗示、才謀、德澤兼備の象ですが、後の(合)(分)(反)(分)によつて、最大貴重の運命の裏に最極悲慘の惡象を藏してゐる形であります。

〔四十〕 四十(正)、(反)(分)二十、(合)(分)十、(反)(分)五、(合)(中)二、(反)(分)一。

此數は、後の(合)(中)によつて、智謀に富み、膽力ある好暗示を含んでゐますが、先の(合)(分)によつて、不遜の象となり、最初と最後の(反)(分)により、非難、攻擊、波瀾、浮沈の象と變じ、投機、山氣、刑傷、病弱の暗示を含みます。守成を要する數です。

〔四十一〕　四十一(正)、(反)(中)二十、(合)(分)十、(反)(分)五、(合)(中)二、(反)(分)一。

此數は、最初の反中により純陽獨素の吉象を含み、後の(合)(中)によつて膽力、才謀、健全、有德等の暗示を生じ、後の二つの(反)(分)は、その中にある、(合)(中)に統率されて有德、和順の象となり、大志大業貫徹の象を形成してゐます。

〔四十二〕　四十二(正)、(反)(分)二十一、(合)(中)十、(反)(分)五、(合)(中)二、(反)(分)一。

此數は、(反)(分)、(合)(中)、(反)(分)、(合)(中)の繰り返しですから、博達、多方面の象でありますが、同時に(反)中に(中)が一つもありませんから、薄弱、不如意、寂寞、悲哀、散逸、失意の暗示を含みます。一意專心一事に全力を集中すべき數です。

〔四十三〕　四十三(正)、(反)(中)二十一、(合)(中)十、(反)(分)五、(合)(中)二、(反)(分)一。

此數は後に、(合)(中)、(反)(分)、(合)(中)、(反)(分)の繰り返しがあるため、散逸、散財、薄弱、散漫、外面の虛飾、內實の困苦、外見の幸福、內實の困苦の暗示があります。但し最初の(反)(中)が共に働いて、才能智達の意があります。要するに意力の確定を缺き、表に成つて裏に破れる象であります。

〔四十四〕　四十四(正)、(反)(分)二十二、(合)(分)十一、(反)(中)五、(合)(中)二、(反)(分)一。

此數は、最初の(反)(分)、(合)(分)によつて、破家、亡身、悲痛、慘憺、破壞、亂離、失意、煩悶、病苦、遭難の象となりますが、若し最初の(反)(分)、(合)(分)を突破して節を守るときは、後の(反)(中)、(合)(中)の働が出て參ります。古來、節婦、孝子、怪傑、偉人等の姓名に此數を持つ者があります。

〔四十五〕　四十五(正)、(反)(中)二十二、(合)(分)十一、(反)(中)五、(合)(中)二、(反)(分)一。

此數は、最初の(反)(中)、(合)(分)、(反)(中)、(合)(中)の組合せによつて順風に帆を擧げたやうな象とあの深い經綸、大いなる智謀、大志、大業の貫徹、萬難千苦に打ち勝つての成功の意が現はれてゐますが、最後の(反)(分)によつて他運が惡ければ遭難の暗示が含まれてゐます。

〔四十六〕　四十六(正)、(反)(分)二十三、(合)(中)十一、(反)(中)五、(合)(中)二、(反)(分)一。

此數の中程は、(合)(中)(反)(中)(合)(中)の大幸福暗示がありますが、最初と最後の(反)(分)の働きによつて、宛も、寶を載せて船を割るやうな象となり、困難、千苦、破財、病身、刑罰等の暗示となります。しかし最初の(反)(分)を愼み、最後の(反)(分)を戒めるならば、大難の後、大成功を得る事を暗示します。

〔四十七〕　四十七(正)、(反)(中)二十三、(合)(中)十一、(反)(中)五、(合)(中)二、(反)(分)一。

(中)がづつとつづきますのみならず、最後の(反)(分)も最初の(反)(中)と相調節して害な

く、幸福吉兆の象となり、天賦の幸福を受け、協力して大事を成就し、進むも退くも幸運をうる暗示があります。

〔四十八〕 四十八(正)、(反)(分)二十四、(合)(分)十二、(反)(分)六、(合)(分)三、(反)(中)一、(合)一。

此數は(分)が續いて、しかも最後の反は(中)を得てゐますから、智謀に滿ちると共に、德望を有し、堅剛なると共に英邁であり、才能あると共に榮達を得る象であります。

〔四十九〕 四十九(正)、(反)(中)二十四、(合)(分)十二、(反)(分)六、(合)(分)三、(反)(中)一、(合)一。

此數は、最初(反)(中)があり、最後に亦(反)(中)を得て、(合)一に達してゐますが、內にはさまれたものは盡く(分)ですから、吉となれば、大吉となり、凶となれば大凶となる象があります。通常人にとつては、普通凶となつて、損失、災害、危難の暗示を含むものと見て宜しい。

〔五十〕 五十(正)、(反)(分)二十五、(合)(中)十二、(反)(分)六、(合)(分)三、(反)(中)一、(合)一。

此數は、最初の(反)(分)の凶暗示と、最後の(反)(中)の好暗示が、內の(合)(中)、(合)(分)と相對し、一衰一盛の象となり、又、最後の(反)(中)が破れる時は、晩年の徹底的失敗を暗示します。卽ち進んで一度大業を成就し、富盛を得ても、再び破家滅亡に陷るやうな數です。

〔五十一〕 五十一(正)、(反)(中)二十五、(合)(中)十二、(反)(分)六、(合)(分)三、(反)(中)一、(合)一。

此數は、最初の(反)(中)、(合)(中)により、一度は必ず盛運隆昌、名利共に達する象を形成してゐますが、最後の(反)(中)の前の(合)(分)の凶暗示によつて、晩年の衰運、困難、困苦を暗示してゐます。

〔五十二〕 五十二(正)、(反)(分)二十六、(合)(分)十三、(反)(中)六、(合)(分)三、(反)(中)一。

此數は、最初は(反)(分)でありますが、後は、(合)(分)、(反)(中)、(合)(分)、(反)(中)の連續ですから、一躍して伸びんとする象となり、精力の强大、無から有を生ずる暗示があり、先見の明があり、達眼、達識、難事を破り、功名利達する象であります。

〔五十三〕 五十三(正)、(反)(中)二十六、(合)(分)十三、(反)(中)六、(合)(分)三、(反)(中)一。

(反)(中)、(合)(分)、(反)(中)、(合)(分)、(反)(中)の連續ですから、大變幸運の象のやうですが、最初も最後も(反)(中)となつてゐるため、折角の幸運が內で腐敗し、前半は良くても後半が惡いか、或は前半惡くて後半が良いか、何れにしても危險な數暗示になつてゐます。

〔五十四〕 五十四(正)、(反)(分)二十七、(合)(中)十三、(反)(中)六、(合)(分)三、(反)(中)一。

此數は、最初の(反)(分)、後の(合)(分)が働いて、大凶惡の象となり、辛慘、不和、損失、憂苦、破家、亡身、刑罰、孤獨の暗示となります。但、初の(合)(中)、(反)(中)が働いて、前

半の幸福を暗示する事もあります。

〔五十五〕　五十五(正)、(反)(中)二十七、(合)(中)十三、(反)(中)六、(合)(分)三、(反)(中)一。

此數は、前數と反對に最初の(反)が(中)を得てゐるため、表面には極盛、繁盛の象があらはれますが、後の(合)が(分)になつてゐるのが働いて、內實的には、災害續出して、苦難、病弱、別離、亡產の暗示があらはれます。これに耐へ、これを越えて、最後の(反)(中)に迄漕ぎつければ、萬難を突破して成功の象となる事もあります。

〔五十六〕　五十六(正)、(反)(分)二十八、(合)(分)二十四、(反)(分)十二、(合)(分)六、(反)(分)三、(合)(中)一。

最初の(反)(分)に始つて(分)を繰り返して八數の變化に似てゐるやうですが、八數と異つて、最後が(反)(中)になつてゐないで、(合)(中)になつてゐるために、八數とは反對の意となつて、實行力なく、進取の心なく、損失、亡身、厄災の象となり、殊に晩年凶なる暗示となつてゐます。

〔五十七〕　五十七(正)、(反)(中)二十八、(合)(分)十四、(反)(分)七、(合)(中)三、(反)(中)一。

此數は前數と反對に、終が(反)(中)となつて、反中に(中)を得てゐるため、天賦の幸福を受けて富榮に到る象でありますが、中程の(合)(分)、(反)(分)の暗示によつて、中途に大難に

遇ふ象を含みます。この時大死一番すれば、萬事意の如くなつて吉祥繁榮を得る象であります。

〔五十八〕　五十八(正)、(反)(分)二十九、(合)(中)十四、(反)(分)七、(合)(中)三、(反)(中)一。

最初の(反)(分)の影響によつて、最後の(合)(中)、(反)(中)と續く好運暗示も容易に顯れず、失敗、厄難を經、浮沈、消長を經て後富榮を極める象でありまして、所謂晩年幸福運の暗示數。

〔五十九〕　五十九(正)、(反)(中)二十九、(合)(中)十四、(反)(分)七、(合)(中)三、(反)(中)一。

此數は、最初の(反)(中)の後、續いて(合)(中)あらはれ、後復、(合)(中)、(反)(中)があらはれますが、眞中が(反)(分)でありますから、忍耐心なく、勇氣なく、意氣なく、損失、厄難、亡產、失意の象であります。

〔六十〕　六十(正)、(反)(分)三十、(合)(分)十五、(反)(中)七、(合)(中)三、(反)(中)一。

此數は最初の(反)が(分)ですから、後の(中)も働くに餘地なく、晦冥暗黑の象となり、無謀、無策、失意、苦惱、刑罰、殺傷の暗示となります。

〔六十一〕　六十一(正)、(反)(中)三十、(合)(分)十五、(反)(中)七、(合)(中)三、(反)(中)一。

此數は、最初の(反)(中)によつて名利全く、繁榮富貴の吉象でありますが、後に(中)が連

續してゐますから、傲慢不遜の暗示が出て參ります。外見を飾つて內容が虛となつたり、內部に爭が起きたりする暗示ともなりますから、和順を守り、德を修めて、注意をして、一生の吉祥を守らねばなりません。

〔六十二〕 六十二(正)、(反)(分)三十一、(合)(中)十五、(反)(中)七、(合)(中)三、(反)(中)一。

此數は、最初の(反)(分)に加へて、後には(中)が連續してゐますから、內外の不和の象となり、志望は達し難く、勢力は漸次衰退する暗示を含み、不時の災難、病難の暗示です。

〔六十三〕 六十三(正)、(反)(中)三十一、(合)(中)十五、(反)(中)七、(合)(中)三、(反)(中)一。

此數は、最初の(反)が(中)を得てゐるため、後の(中)の連續が皆良い暗示となつて、萬物成長し、四通八達の吉祥となります。目的の成就、憂患の絕無、富榮を永く傳へる最良暗示數です。

〔六十四〕 六十四(正)、(反)(分)三十二、(合)(分)十六、(反)(分)八、(合)(分)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

此數は、全部が(分)であつて、しかも三回辯證を繰り返してゐるために、浮沈、破壞、滅離の凶象となり、災難、離散、病難の暗示を含みます。

〔六十五〕 六十五(正)、(反)(中)三十二、(合)(分)十六、(反)(分)八、(合)(分)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

此數は、最初の(反)で(中)を得てゐる爲に、(合)(分)、(反)(分)、(合)(分)、(反)(分)を繰り返し、最後の(分)が(合)で分れてゐるのが却つて天長、地久、無事、平安の象となり、隆昌、長命、福祿の吉祥暗示を含んでゐます。

〔六十六〕 六十六(正)、(反)(分)三十三、(合)(中)十六、(反)(分)八、(合)(分)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

此數は、最初の(反)が(分)ですから、次に(合)(中)があらはれても却つて進退の不自由、內外不和、艱難、損害、厄災の象となり、惡暗示數となつてゐます。

〔六十七〕 六十七(正)、(反)(中)三十三、(合)(中)十六、(反)(分)八、(合)(分)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

此數は、最初の(反)(中)、(合)(中)の力によつて、長上の助けを受ける象となり、後の(分)の連續によつて物事通達の暗示を生じ、天賦の安寧に乘じて、發展し富榮に到る數象です。

〔六十八〕 六十八(正)、(反)(分)三十四、(合)(分)十七、(反)(中)八、(合)(分)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

此數は、最初の(反)が(分)ですけれど、(反)(分)、(合)(分)の後を受けて(反)(中)を得、後が

すべて通達してゐますから、智慮周密、志操堅固の暗示となり、最初は勤勉力行、後には發展向上の象となり、或は最初は發明、工夫に努力し、後衆信を得て願望を達し、名實共に完きを得る象となります。

〔六十九〕 六十九(正)、(反)(中)三十四、(合)(分)十七、(反)(中)八、(合)(分)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

此數は、最初は(反)(中)(合)(分)をつづけて後(反)(分)、(合)(分)で弱められ、(反)(中)(合)(分)で好暗示を得たのが、(反)(分)(合)(分)で消されるやうな形で、窮迫、塞閉、逆境、病災、不安、動搖、痛苦の象となります。

〔七十〕 七十(正)、(反)(分)三十五、(合)(中)十七、(反)(中)八、(合)(分)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

此數は、最初の(反)(分)の後に、(中)が二つつづき、更に(分)連續のため、險惡、亡滅、慘澹、憂苦、空虛、寂莫、殺傷、離散の象となつてゐます。

〔七十一〕 七十一(正)、(反)(中)三十五、(合)(中)十七、(反)(中)八、(合)(分)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

此數は、最初の(反)は(中)を得て大變宜しいが、(中)が三つづいて、後の(分)の三連續と相對立してゐるため、最初よく後惡く、外見良くて、內實惡く、希望あるも貫徹の力なく吉凶相半ばする象となります。

〔七十二〕 七十二(正)、(反)(分)三十六、(合)(分)十八、(反)(分)九、(合)(中)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

此數は、最初(反)(分)であつて、後に(合)(中)が出で、最後は(反)(分)、(合)(分)の連續ですから、前半は、(反)(分)、(合)(分)、(反)(分)の働を受けて幸福ですが、後半は陰雲によつて幸運の月が蔽はれて窮迫の象となつてゐます。又外見吉、內實凶の暗示數となります。

〔七十三〕 七十三(正)、(反)(中)三十六、(合)(分)十八、(反)(分)九、(合)(中)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

最初の(反)は(中)を得、(分)つづいて、更に(合)(中)を得てゐますから、志操高邁の象はありますが、全體の形勢は、(中)(分)(分)、(中)(分)(分)の對立となつて、貫徹力の薄弱の暗示がありますから、勢に乘じて中程の(中)を破らぬやうにして、自省につとめるならば、晩年平安に到る暗示數です。

〔七十四〕 七十四(正)、(反)(分)三十七、(合)(中)十八、(反)(分)九、(合)(中)四、(反)(分)二、(合)(分)一、

(反)(分)、(合)(中)の繰り返しによつて、迷妄、無智、無能の象となると共に、不時の災厄、辛苦、逆境、不幸の暗示があります。

〔七十五〕　七十五(正)、(反)(中)三十七、(合)(中)十八、(反)(分)九、(合)(中)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

此數は、最初に(反)(中)を得てゐるために、自然富榮の吉象になつてゐますが、後の(合)(中)、(反)(分)、(合)(中)、(反)(分)の對立によつて、矢張齟齬、失敗の象を含んでゐます。後の動搖、迷妄を退いて守れば幸福を保つ數暗示があります。

〔七十六〕　七十六(正)、(反)(分)三十八、(合)(分)十九、(反)(中)九、(合)(中)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

此數は、最初の(反)(分)に(合)(分)つづくため、內外不和、離散、破產、亡身、病弱の暗示を含みます。

〔七十七〕　七十七(正)、(反)(中)三十八、(合)(分)十九、(反)(中)九、(合)(中)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

此數は、最初の(反)(中)、(合)(分)と後の(合)(中)、(反)(分)の對立、及び中程の(反)(中)、(合)(中)の連續との構成關係によつて、前半宜ければ、後半惡く、後半良ければ、前半惡いといふやうな象ですが、他運が良ければ、その調節を得て幸慶に到る數であります。

〔七十八〕　七十八(正)、(反)(分)三十九、(合)(中)十九、(反)(中)九、(合)(中)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

中程(中)の續くは、吉象ですが、最初の(反)(分)と後の(分)の連續は强く凶象として働き、前には成功して、後に失敗する象となりますが、他運との組み合せによつて吉祥となります。

〔七十九〕　七十九(正)、(反)(中)三十九、(合)(中)十九、(反)(中)九、(合)(中)四、(反)(分)二、(合)(分)一。

最初(中)がつづいて後に(反)(分)(合)(分)になつてゐますから、不伸の象となり、精神發展せず、節操なく、實行力なく、非難攻擊の象となります。

〔八十〕　八十(正)、(反)(分)四十、(合)(分)二十、(反)(分)十、(合)(分)五、(反)(中)二、(合)(分)一。

此數は、最初に(反)(分)があつて、(分)が續き、後には(中)が一つ出てゐます。卽ちづつと辛慘がつづき、困難、病弱、短命の暗示となつてゐますが、早く退いて身を守り、自省して待てば、晩年は(反)(中)、(合)(分)の暗示によつて安心立命を得る事もあるわけです。

〔八十一〕　八十一(正)、(反)(中)四十、(合)(分)二十、(反)(分)十、(合)(分)五、(反)(中)二、(合)

(分)一。

此數は、最初の(反)に(中)を得、(分)を三回重ねて、更に(反)(中)、(合)(分)を得る數で、幸慶、吉祥、隆福の象で、尊貴富榮の暗示數で、一數の暗示に還元してゐます。この數は(正)(反)、(合)(反)、(合)(反)を三回、即ち(正)(反)(合)と繰り返して後(合)(分)一を得た形象で、正しく連續數の辯證過程は一巡終つて、復元の一數に還つた形になつてゐます。從つて、八十一以上の數は、皆八十を引き去つた殘數をもつて辯證して行けば宜しい。八十二は二、八十三は三の數象と同樣と考へて宜しい。

以上、八十一數迄の數理辯證によつて、古來傳へられ、現代に於ても尙用ゐられてゐる數のあらはす意味は、全く辯證的に其の意味が明かにされ得るものであつて、決して單なる迷信ではないのであります。但し、數其物には意味はありませんが、その發展の樣式が、人事における盛衰と相應じてゐる點が、象として辯證綜合されて判斷されてゐるのであります。

姓名の劃數において含まれてゐる數の働きも、一の神祕不可解な暗示ではなくて、正確に辯證し得る、科學的、心理的暗示なのであります。しからば此等數の有する暗示の力を無視する事は鬪運術の立場から見て、どうしても出來ません。私らは此等の數の有する意

味を活用して鬪運の武器とせねばなりません。

二　音の辯證

數を正とすれば、音は文字表現に於ける反であります。この音韻表現の辯證的證明を次にしめしませう。音の表現の基本は、あかさたなはまやらわの五十音に於て示されますが、この順序が矢張、正反合反合反合反合反となつてゐます。又あいうえをが、同じく縱に正反合反合となつてゐますから、其の組合せによつて、辯證的意味を明かにします。

[ア]は(正)中の(正)ですから、主權、決斷、實踐躬行、果敢勇決の象となります。所謂顯出の表象であります。

[イ]は(正)中の(反)で活動の始りですが、半面には、不測の災危の暗示を含みます。

[ウ]は正中の(合)で、安んずる暗示がありますが、更に(反)にうつらねばその働があらはれず、活氣なく決斷鈍き暗示となることがあります。

[エ]は、ウの(合)が(反)となる音ですから、一度集つて復分れ、伸展、育成の暗示がありますが、同時に反に過ぐれば孤獨薄弱の意を後に含んで來ます。

［オ］は、最後の（合）ですから、結ぶの象ですが、結び過ぎると頑固、薄情となります。

［カ］は（反）中の（正）で、光輝、名譽、聲聞の暗示となりますが、過ぎると、人望を失ふ暗示を含みます。

［キ］は（反）中の（反）で、勢は強いのですが分裂して、友なき象となり、精力絶倫であると共に、一面孤獨の象となります。

［ク］は、（反）中の（合）で、分れたものを定着する象となります。上位の惠澤を受ける暗示もあります。

［ケ］は、クの（合）が（反）となつて分れる音ですから、消了、終末の象となり、希望達成の暗示でありますが、分れ過ぎると終に極まつて陰慘となります。

［コ］は、（反）中最後の（合）ですから、細微で、少さくまとまる義となり、膽力乏しく、大局的には常住動搖の象となります。小事には纏りよく大事を破る象です。

［サ］は、（合）中の（正）で、剛强の象で、發展の意强く、止る事の出來ぬ象ですが、（合）の作用によつて終に人望を集め衆を率いる象であります。

［シ］は、（合）中の（反）で、（合）の作用强きため、締めくくる象になりますが、同時に（反）の作用が内部に働いて、内的の亂れ、家内の平和を破る事、孤獨、不遇の暗示が働いて來ます。

［ス］は、（合）中の（合）ですから、總べてのものを中に綜合し集める象となります。しかし（合）に（合）が重なつて、集め過ぎ、後が空しくなく暗示があります。從つて薄弱、孤獨、失敗等の暗示を含んでゐます。

［セ］は、（合）中の（合）に續いておこる（反）ですから、勢强く、熱情にはしり、權威高く、壓迫力がありますが、同時に反撥力が强くて雅量に乏しい暗示となります。

［ソ］は、セに續く（合）ですから、從順、出世の象となりますが、終局の合ですから獨立し難い暗示を含みます。

［タ］は、（反）中の（正）で、亂れたものを正し、治める意はありますが、（反）の作用により尙鬪爭の象を含みつつ、溫良に歸し、安易を求め、或程度迄發達して止る暗示になります。

［チ］は、（反）中の（反）ですが、カの場合とは違つて一度（合）を經た（反）ですから、勤勉、忠實、智謀の象となり、百折不撓最後の勝者となる象であります。

［ツ］は、チに續く（合）ですが、タ行（反）の作用によつて、剛氣、自我の念强く、萬難を排すると共によく綜合處理せんとする象ですが、剛に過ぎると難を得る象です。

〔テ〕は、タ行(反)中の最後の(反)で進取の氣象強く、萬難を排して、萬事を整理する象ですが、一面、(反)が働き過ぎると虚榮に傾き、不用意になる象となります。

〔ト〕は、タ行(反)中の最後の(合)ですから、奮闘の餘力の衰へた象であります。消極的に纏めやうとする象です。

〔ナ〕は、五番目の(合)であるナ行中の第一(正)格ですから、推發の意強く、用意の周到の象となりますが、(合)中の(正)ですから、あまりにすべてを集め、且つ自分丈表面に出でんとするため、他に對して疑深い象ともなります。

〔ニ〕ナ行中の(反)で、(合)に附して始めて表れる象となり、目上に從つて、事をなすべき象であります。一面忍耐強く、物に厭きず、責任を重んじて發展活動する象ともなりますが、(反)を働かせすぎると頑迷に陷ります。

〔ヌ〕ナ行(合)中の(合)、總べてが集り終つて、歇み終る象。窮極の暗示となり、孤獨、貧困、怠惰の象となります。

〔ネ〕(合)中の(合)に續く(反)で、一度は鎭まりおさまつてゐても時を得て發する象、故に始めは發達の力なく、目下のものと提携の暗示があります。

〔ノ〕は、ナ行(合)中最後の(合)で、(合)極つて伸び擴がらんとする象であります。溫良

で、雅量が大きく、毀譽に動かず泰然たる象ですが、反面には人の難を一身に受ける象。

〔ハ〕は、六番目に位するハ行(反)中の(正)で、發延の象であり、活氣に富み、積極的で、智謀、才略があり、名譽地位を得る象があります。

〔ヒ〕は、ハ行中の(反)で、ハよりも更に強く、貫徹、明達の象であります。功名榮達、福祿享有の暗示があります。しかし自我に發する時は頑固の傾が出ますが、困難を破つて勝利を得る象。

〔フ〕は、ハ行中の第三位で(合)ですから、(反)中の強い(合)となつて、進行、活潑の象となると共に統一、決斷の力を加へますが、(反)の働を(合)で抑へるために、理想が實行を妨げる暗示を伴ひます。

〔ヘ〕は、ハ行中の第四位で(反)で、ヒの(反)程の力はなく、進まんとしながら、稍遲れる意を生じますが、前半多少の困苦に耐へるならば後半に於て通達する象。

〔ホ〕は、ハ行中の最後に位して、(反)中の(合)ですから、外面は頗る沈着ですが、反の働によつて發明心に富み、發の象となります。又(合)の作用によつて物を集める意を含み、一方義理人情を忘れる暗示を含みます。

〔マ〕は、七行目に位して、(合)の行ですが、マはその(合)中の初(正)で、固め集める象

となり、人心の收攬、德望の暗示となり、又萬事中心となる意が顯れます。

〔ミ〕は、マ行中の初(反)で、(合)の作用によつて一旦纏り、(反)によつて復破れる象となります。よつて無定の象といひます。

〔ム〕は、(合)中の(合)で、壓定の象となり、人の下について働くによく、上位に立つは不可の象。女には宜しい。

〔メ〕は、(合)中の(反)で、第四位にありますから、纏つたものが散じ、發し、擴がる意があつて、初始の象となりますが、事にあたつては(反)の作用があらはれて、勇氣と活動力とによつて功名榮達する暗示があります。

〔ヤ〕は、八行目に位して、(反)の行ですが、ヤはその内の(正)ですから、英敏、智略の象となると共に、反の發を正に止め過ると頑固の意となり、權威を弄して不和を起す暗示を含むことになります。

〔イ〕は、(反)中の(反)で、ア行のイに比べて、發音強くすべく、又(反)の作用強く、良くなれば明敏、利達に進み、惡くなれば、非難を誘發する象となります。

〔ユ〕は、(反)中の(合)で、震起の象中哀愁があり、智謀の内に術數を含む象です。難を忍べば最後の勝を得る音。

〔エ〕は、ア行のエと異つて、(反)中の(合)ですから、發音はエより強くします。從つてエよりは(反)の意強く、分裂、發展の強い象で、強過ぎると遭難の象となります。

〔ヨ〕は、ヤ行(反)中最後の(合)ですから、顯の象となり、(合)の働によつて集つて更に顯れる象となり、卽ち人望を得て、頭領となる事に努める暗示があります。たゞし、(合)が働きすぎると我慢、怠惰の暗示となります。

〔ラ〕は、最後の(合)の行中の(正)です。丁度九數暗示に對する音ですから、自己の本心を隱し、總べてを自分に集めんとして却つて後に人望を失ひ、信用を失ふ象であります。ですから中程迄は名利共に行はれ、晩年衰へる象となります。

〔リ〕は、ラ行(合)中の(反)で、集つたものを散じて、終始悲哀の象で、遭難の意を含み、一徹となつて人に疎んぜられる象です。

〔ル〕は、ラ行(合)中の(合)で、且第三位にあるため、納入の象となり、從順、溫情の暗示となり、又消極、因循、姑息の反面がありますが、受愛の意がありますから、上位の引立によつて、成功する象です。

〔レ〕は、ラ行(合)中の最終の(反)ですから、物事の結末を能くする才能の象であると共に、自己の主張を貫き通さうとする暗示ともなりますから、一面心意の狹隘、嫉妬の象と

もなります。從つて頭領としての暗示に缺けてゐます。

［ロ］は、ラ行最後の（合）で、知識廣く、見聞豐富等の象となりますから、人の上位に立つて尊敬を受ける意が出ますが、最初は（反）が働き過ぎて上長との別離の意を含む事もあります。

［ワ］は、最後の（反）の行中の初（正）ですから、全て、物を締る象となり、人の上位に立つ暗示と共に、自我の念を通さうとする意を含みます。但し物を集める暗示を強く伴ひます。

［キ］は、イと異つて、最後の（反）中の（反）となつて、發音最も強く、發達、活動の意最も強く、危難の暗示を内に含む度もイより強くなります。

［ヴ］も同樣に、ア行のウより（反）の意味が強くなり、發音も高いのです。

［エ］も同樣、ア行のエ、ヤ行のエよりも（反）の意が強まります。

［ヲ］も同樣、ア行のオより（反）の意が強まります。

以上の他濁音は、意味が弱くなり、拗音は意味が強くなり、ンがつけば矢張意味が強くなるのであります。

而して、**アカサタナハマヤラワ**の順序は何によつて定めたかと言へば、これは發音の際

の口の開閉の順序に從つて並べたので、正反の順序もそれに從つたのでありまして、何れの點より見るも科學的に合理的に考へられるので、音に意味ありとする考方も決して迷信では無いのであります。唯從來之に對する正當な證明が無かつただけであります。

三　文字と意味

以上で、文字表現の正作用としての文字劃數の基となる數の暗示分析と、文字表現の反作用である音調の基となる五十音の分析を終りましたが、この正反の二作用を綜合したものが、卽ち文字の意味となつて顯れるのであります。故に文字の正しい意味を分析するには、その數暗示と音暗示の兩面から研究せねばなりません。故に、選名等の場合に於ても意味を先にして、數と音を後にするならば容易に良名を選べないのですが、數と音を定めておいてから、調べると、期せずして良い意味の名が得られるのであります。之は著者も度々實驗した事でありますが、唯漠然と良い名を求めて苦しむ時は、二日たつても三日たつても解決がつかないのですが、數と音を定めると奇蹟的にぴつたりと事情にあてはまる良名を得るのであります。

しかし、考へて見ると之は當然のことで、正反のない處に合の綜合は起らないのですから、どうしても正から始めて反、而して合の順序に物事は考へねばなりません。

但し、意味なんかどうでも良いといふのでなく、勿論、意味が一番大切なのです。意味のない處に姓名はありません。無意味の選名が、無用のものである事は云ふ迄もありません。唯、意味の根底には、數と音の辯證的根據が必要である事を吳々も注意したいのであります。卽ち意味が良ければ數とか音は何んでも良いと考へるのは、人間の意識的方面をのみつよく見て、蔭にかくれた無意識的作用の却つて大なる根底的の力を忘れる結果になるのであります。

そして如何に良い意味に綜合された姓名も、その人にして一度鬪運的態度を失へば、最早何の役にも立たないのです。何となれば、鬪運的態度、鬪運の精神こそ、正であつて、選名、改名の如きはその反であつて、鬪運的精神の正と、改名の如き反作用の綜合によつて、始めて眞個の運命改轉の事實があらはれるからであります。正なく反なき處に合はありません。正のみあるも、反のみあるも亦合はあらはれないのであります。

改名しても幸福にならぬと云ふ人は、先づ自己の鬪運精神の有無を顧みなさい。いくら努力しても開運せぬと思ふ人は、反としての選名、改名の如き、事に卽した方面の忘却に就いて反省なさい。さすれば運命を支配する眞道は極めて明瞭に貴方の眼前にあらはれるであります。あらゆる方面に徹底的に辯證的態度を徹底して下さい。次に私らは、姓名に於ける劃數の對比、音韻の對比、意味の對比の問題に遷りませう。先づ、姓名の構成を見ますに、例へば、平田了山と云ふ姓名について言へば、この姓名を構成するものは、平田と云ふ姓と了山といふ名である事が分析されます。平田と云ふ姓は、十劃よりなり、了山といふ名は五劃より成つてゐますから、上には十と云ふ數の暗示が響き、名には五の數の暗示が響いてゐます。更にこの(平田)を(正)とし(了山)を(反)とすれば、この(正)(反)を綜合するものは、(田)と(了)との結合であつて、こゝには七劃の七の數が響いて來ます。更に(田了)を正として(反)を求めるとそれは、(平)(山)の結合、卽ち八劃の八數の暗示となります。而して最後にこの(正)(反)を綜合するものは(平)(田)(了)(山)の總劃數十五劃の十五の數の響であります。これで平田了山と云ふ姓名に就いての數の辯證を終つたことになります。

そこで姓の劃數を第一格、名の劃數を第二格、姓と名の結合部の劃數を第三格、姓と名の外部構成の劃數を第四格、姓と名の全部の劃數を第五格と定めますと、說明に大變便利になつて參ります。但し、この辯證的考方や說明の仕方、格の命名は私自身の考に從ひましたが、採り方自身は熊崎健翁氏の規定に據つてゐる事を明言しておきます。

尙、姓が一字の場合には、第四格は、上に一劃あるものとして採ります。名の場合は下に一劃あるものとして採ります。例へば、星一と云ふやうな姓名では、(一)星一(一)と置いて採ります。これは第四格をとるときの他、第一格、第二格にも適用します。この理由は、既に、第三格として採つたものを(合)と見る以上、(反)が全然無いと云ふ事は姓名の不成立を來します。しかも姓名が存在する以上、所謂「存在の理由」によつて、たとへ顯れてゐなくとも、上下に一劃づつの伏字、隱字があるものと考へねば、辯證が成立しないからであります。但、第三格、第五格には關係がありません。

又、「平田內藏吉」といふ風に、名が三字の時は第四格は、(平)と(藏吉)の三字の劃數で採ります。姓が三字で例へば「小宮山昌紀」と云ふ時は第四格は、(小宮)と(紀)の三字で採ります。姓も名も三字の時は、上下の四字の劃數で採ります。四字五字の時も同樣で、第三格に、姓と名の中に位する一字づつを結合した殘りは總べて第四格に入れてしまひます。尙第三格は五格中の中心になつてゐますし、第五格は最後の綜合格ですからこの二つを最も重んじます。

次に劃數の算定法ですが、之には三つの方法があります。第一に、正として考ふべきは語源と文字構成の原理から定める文字の劃數で、之が略字を用ゐてゐるやうでは根本から間違つてゐます。次に反として考へるべきは、實際使用してゐる劃數です。そしてそれを綜合したものが藝術的要素や實用的要求から崩された草書體或は略字體です。始から略字や草書體で考へるのは辯證の正道ではありません。ローマ字の場合も同樣で、例へばAを正とすればaが反で、更に崩されて實用化された字が合です。假名の場合も同樣です。それで、正に當る劃數で先づ判斷してから、反の劃數を考へ、合の場合を考慮に入れて選名すべきです。正の場合の劃數算定は附錄の「新選名盤」によつて下さい。

さて、第一、第二、第三、第四、第五の各格が定まりましたならば、その各の格の數と音の暗示を調べて、その姓名言表の善惡良否を決するのでありまして、その內に一つでも惡い暗示があれば、それは冥々の內にその人に對して絕えず、惡い暗示を與へてゐる事になるのであります。

心理學者の實驗によれば、死刑囚に、二升の血が出れば、人間は死ぬものである事を良く說明しておいて、目かくしをして、指に針をさし、水をぽとぽと滴下して指から血の落ちる錯覺を起さして、段々に暗示をあたへて、二升になつたと叫ぶと同時に、その囚人が死んだと云ふ事が報告されてゐます。かゝる意識的暗示よりも更に、强烈なのは無意識的暗示で、滿潮の時の出產、引潮の時の死亡、婦人の月經と月の盈虛との關係などは、自然

のあたへる無意識的暗示に、如何に人間が敏感であるかの證據でありまして、姓名の如き、自他共に、無意識に、一つ一つその意味音調等を分析考慮しないで使用するもの程、却つてその暗示力は強烈深刻であるのでありまして。意識的暗示は意志の力で拂ひのけられますが、無意識的暗示は知らぬ間に驚くべき力となつて、心身に喰ひ込んでくるのであります。

而して、かゝる暗示が、姓名の有する意味に先立つて、劃數や音韻から與へられることは、頗る根據のある事でありまして、その受ける順序は、第一格、第二格、第三格、第四格、第五格の順に働きます。年月の關係も、この順で變化しますが、鬪運術の立場から申せば、何年何月に如何なる事があると云ふが如き鑑定に屬する事は飽く迄第二義の事で、自己の姓名の長所短所をよく知り、短所があれば卽刻改名して、それを用ゐて、その暗示を強烈に受ければ、たちまちその日から幸福が湧くやうに辯證されるので、暗示感受力の強い人、卽ち純な、信念の強い人程、その效果は顯面であります。姓名なんか何の力もない。姓名に運命を改める如き力はないと主張する人の姓名が、實に惡い暗示に滿ちてゐるのを見て苦笑した事がありますが、その人はその顏を見ても實に陰慘で、まことに嫌な氣分にさせられてしまひました。總て自己に信念のない人程、鬪運的の力を故意に抹殺し、徒らに世を白眼視し、自分には何の益もない他の惡口を、實に下品な口調をもつて宣傳して自分は毫も眞理に對して素直に從ふと云ふ風がないものであります。著者も亦その風に染み乍ら、却つて他のかゝる傾向の人に極度の憤慨を感じたのでありましたが、今運命改轉の道を證し、信仰の力を體驗する時、これら世を毒し、人を毒しつゝある人が、先づ第一に自らを毒して、自然の大なる道に於て、滅亡制裁を受けつゝある事實を直感して憤慨の心は無くなつて只憐む如き心情が湧き起つて參ります。又著者は往時、未だ信仰の生活と運命の原理を知らなかつた頃、千萬の富を有する人々の冷酷な違約によつて破滅に陷らんとした時、燃え上る怒を感じ、復讐を誓つた事がありましたが、今靜かに其人の姓名や、其他の事項を分析して、冷酷なる其人の前途の危きを知つて復讐の心は消へ果てゝ、ひたすらその人に誤なく、又眞に運命の道を信仰の道に辯證して、外見のみではなく、內實に幸福な生活に入られん事を祈つてゐるのであります。

すべて怒や、悲は、大なる自然の事實を靜觀せず、眼前の情勢に身心の中心を失ふ事から起るのでありまして、一度、姓名の中心を通じて客觀的に、身心の中心を通じて內面的に、總べての事象の中心を捕へます時には、怒も悲も、消へはてゝ、寂然不動の本態に接する事が出來るでありませう。

さて、姓名の各々の格の意味が一通り分りましたならば、次には、その各々の格の對比

を考へなければなりません。

數の對比の根本形式は、

正	1：2
反	3：3
合	5：6
反	7：8
合	9：10

であります。卽ち一と二との對比を正とし、三と四との對比を反とし、五と六との對比を合とし、七と八との對比を反とし、九と十との對比を合とします時には、此處に、正反合反合の五對比を得ます。そしてこの形式が格の對比の正位であります。

これを基準として、

第一格(正)と第二格(反)の對比、第一格(正)と第三格(合)の對比、

第二格(反)と第三格(合)との對比、第三格(合)と第四格(反)との對比、

第四格(反)と第五格(合)との對比、第五格(合)と第三格(合)との對比、

等の自然であるか不自然であるかを辯證的に檢する事が出來ます。熊崎氏の著書にもその一部の解說が出てゐますから、此處に更にそれを綜合敷衍して、考へてみませう(矢張辯證的に證明しました)。

(最強)

第一格(正)	活動	第三格(合)	根底	第二格(反)
一…二(正)	(正)に對する(正)にして順調の活動成功の象。	一…二(正)	(正)に對する(反)中の(正)ですから基礎安泰であります。	一…二(正)
三…四(反)	(反)に對する(正)で、發展活動の意强く、目的達成速き象。	一…二(正)	最初の(反)中の(反)に對して正がある故、陰陽和して安泰の象。	三…四(反)
五…五(合)	(合)中の(正)に對する(合)で、纏り過ぎて努力なく希望達成遲き象。	一…二(正)	(反)中の(合)に對する(正)で、平安で、磐石の上にあるやうに堅固の象。	五…六(合)
七…八(反)	最後の(反)に對する(正)ですから、(反)の働は(正)を抑壓して、不伸不滿の象。	一…二(正)	(反)の働が强くなつて、(正)を壓し、例へば目下より上を壓する象となり不安の暗示。	七…八(反)
九…十(合)	(正)に對する最後の(合)ですから發展、變化の象を含んで萬事順調の象。正の働(合)より强き故に吉。	一…二(正)	(合)の働は(正)に勝つ故に、一時順調に伸展するやうに見えて、後流亡の象。	九…十(合)

第一格(正)	活動	第三格(合)	根底	第二格(反)
一…二(正)	(合)(反)に對する正ですから、(反)の强を受けて、上位よりの惠によつて順調に發展の象。	三…四(反)	强(反)に對する正で、目下の支持によつて基礎の堅固になる象。	一…二(正)
三…四(反)	(反)に對する(反)で、同僚相助ける象となつて支障がない象。	三…四(反)	强(反)に對する(反)ですから、一時は盛んでも後に分裂薄弱となる象。	三…四(反)
五…六(合)	(合)に對する强い(反)ですから、希望を達し、物事遂行活動の象ですが、數理によつて吉凶は定まります。	三…四(反)	强(合)に對する(反)ですから、基礎堅實ですが、第一格にも(三、四)の反が重なれば、(反)にすぎて凶。	五…六(合)
七…八(反)	雙方共强い(反)となつてゐるため、分離、破壞、不成功の象。	三…四(反)	强(反)に對する(反)ですから、過勞、過激になつて破れる象。	七…八(反)
九…十(合)	(合)(反)に對する(合)ですから、活動を總て抑へ、變難、內より破れる象。	三…四(反)	强(反)に對する强(合)ですから、不安定、變事の起る象となります。	九…十(合)

(最强)

第一格(正)	活動	第三格(合)	根底	第二格(反)
一…二(正)	强(合)に對する(正)で纏り過ぎて不滿の象ですが大過はない象。	五…六(合)	强(合)の根底が(正)ですから强(合)弱(正)を壓して不安定、移動の象となります。	一…二(正)
三…四(反)	强(合)に對する(反)で、(反)は(合)の助けによつて安泰を得る象。	五…六(合)	强(合)に對する(反)中の(反)で、災害を巧に逃れ、進步發達によつて却つて安定を得る象。但、分離の象。	三…四(反)
五…六(合)	强(合)に對する(合)で、沈重、鈍重の象となりますから活動力は少いけれど、安全な象。	五…六(合)	强(合)に對する(合)で、幾分の不安はあつても大體平順の象。	五…六(合)
七…八(反)	强(合)に對する强(反)で、成功順調、目的自然に貫徹する象であります。	五…六(合)	强(合)と强(反)と相對立し、却つて雙方の力を弱める象。他の數理良ければ平衡を得て吉。	七…八(反)
九…十(合)	强(合)に對する强(合)ですから、活動困難で障害の象ですが、完成の暗示はあります。	五…六(合)	强(合)に對する强(合)で、(合)極まつて急變轉落の象を含む。	九…十(合)

(最强)

第一格(正)	活動	第三格(合)	根底	第二格(反)
一…二(正)	(合)中の(反)に對する(正)で多くは(反)の力に壓せられて、過勞、困難、不遇の象なるも(正)を保てば吉。	七…八(反)	弱(正)が強(反)に對して內容の分裂と顚覆のうれひのある象。	一…二(正)
三…四(反)	強(反)に對する(反)で活動は分離、抑壓されける象。他の數理盡くよければ稀に發展の象。	七…八(反)	(反)が強(反)に對し、發展の象あると共に過勞、過激に陷る象。	三…四(反)
五…六(合)	強(反)に對する(合)で、上位の惠を綜合して身心の健和を得る象。	七…八(反)	(合)が強(反)を調節して、境遇の安固、身心の健和、質實な成功を暗示する對比。	五…六(合)
七…八(反)	強(反)に對する強(反)で、過剛、不和、不測の災禍の象。	七…八(反)	強(反)に強(反)が對し、非難、遭難、分裂、不和の象。	七…八(反)
九…十(合)	強(反)に對する強(合)で萬事順調に發展、活動して目的達成の象。	七…八(反)	(合)中の強(反)に、強(合)が對し、內容に分裂を生じ急變を起す象。	九…十(合)

(最強)→

第一格(正)	活動	第三格(合)	根底	第二格(反)
一…二(正)	(合)中の(合)に(正)中の(正)が對し、頗る順調なると共に、纏り過ぎて孤獨の象となる。	九…十(合)	強(合)に(反)中の(正)が對し、境遇安全の如くして、遂に(反)の分離作用を受け易き象。	一…二(正)
三…四(反)	強(合)に(反)が對し、大成功の暗示であると共に、(反)が強過ぎると急禍の象となる。	九…十(合)	強(合)に對し(反)中の(反)が働き、急禍、急變の象を含む。	三…四(反)
五…六(合)	(合)中の(合)に對する(正)中の(合)で、あまりに働が無くて不遇の象。嘲を受ける象。	九…十(合)	(合)に對して(合)ですから安定の如く見えて、第二格そのものの(反)によつて自然不安に入る象を含む。	五　六(合)
七…八(反)	強(合)に對して強(反)作用し、意外の引立、先祖の惠澤を受ける象。他數との關係で(反)過強なれば凶。	九…十(合)	強(合)に對して(反)中の強(反)ですから、均衡をうれば吉ですが、一度均衡を失へば、凶。	七…八(反)
九…十(合)	強(合)中の強(合)で却つて(合)極つて荒亡流離の象を含む。	九…十(合)	強(合)に對する強(合)で一時的に大勢力を得ますが、二格の(反)の作用によつて復狐獨、病災の象を含む。	九…十(合)

(最強)→

第三格を正とし、第四格を反とし、第五格を合とする對比も同樣で、前表におきまして、第三格をおいた處に、第五格を置き、第一格のところに、第三格を置き、第三格の處に第四格を置けば宜しい。この第五格と第三格の對比は、その人の性相を示し、第五格と第四格の對比は、體質への暗示を示すものであります。此は第一格を正とし第二格を反とし第三格を合とする對比を正とすると、此の對比は反に當り、前者が主として、精神力の對比暗示であるに對し此は身體方面の對比暗示に傾きます。

以上の對比が悪ければ、姓名構成の各劃の數暗示が良くても、その良好な暗示の展開が妨げられて、不可なるのみならず、良好な數暗示を却つて悪暗示とすることもありますから、此對比に充分氣をつけて選名する事が必要であります。

以上の如く、總て、姓名、其他の文字表現には、常には、數と音と意味と、その各々の對比の中心を得ることを目的として構成するとき、そこに始めて、道義的内容と、美的意味が調和的に盛られて、何人が用ゐても氣持の良い暗示を發散し、自他共に其名を愛して、遂に名が德を助ける結果となるのであります。而してその人の精神が道義的になればなる程名の暗示は、益々其の威力を發揮してくるのです。それには如何にしても何故、數や音に色々な異つた暗示内容が生ずるか、何故、格の對比に善悪がありうるかを辯證法によつて鮮明明白に認識せねばなりません。この事がなくては、如何に人が良いと云つても現代人が之を首肯し得ないのは當然であります。

以上の格の對比を見る場合には、各々の格の劃數から、十數、卽ち數の對比の基本數を引き去つた殘りの數で對比を見ます。十數迄の數であれば、引き去るに及ばないのは言ふ迄もありません。

音の對比の、根本原則も同樣です。

音の對比の根本形式は、次頁の如くであります。

以上の諸項によつて讀者は、自ら選名と正確な判斷を科學的立場からも、信仰的立場からも、確信をもつて行へるはずであります。

只、劃數をとる上に於て、劃數判定の(正)と見るべき、語原的に見る劃數計算法上の注意を申しのべておきませう。

劃數計算の根據は文字成立の基元から考へて定めるのでありまして、文字の形成は、東西南北の方位に法り、文字の左(向つて右)を東、右(向つて左)を西、上を北、下を南として、座標を定め、それぞれの分割をなして、作られたのが、東洋象形文字であつて、西洋の文字と同樣ですけれど、象形的立場に於て、最も完備したものは、支那の漢字でありま

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
		正	反	合	反	合	反	合	反	合	反
1 正ア行	行アカサタナハマヤラワ行	和	發	和	發	和	發	和	發	和	發
2 反カ行		衰	亂	衰	亂	衰	亂	衰	亂	衰	亂
3 合サ行		和	發	和	發	和	發	和	發	和	發
4 反タ行		衰	亂	衰	亂	衰	亂	衰	亂	衰	亂
5 合ナ行		和	發	和	發	和	發	和	發	和	發
6 反ハ行		衰	亂	衰	亂	衰	亂	衰	亂	衰	亂
7 合マ行		和	發	和	發	和	發	和	發	和	發
8 反ヤ行		衰	亂	衰	亂	衰	亂	衰	亂	衰	亂
9 合ラ行		和	發	和	發	和	發	和	發	和	發
10 反ワ行		衰	亂	衰	亂	衰	亂	衰	亂	衰	亂

（この表は横の行の文字音に對する縱の行の文字音の作用を示します。）

（和は正の同類相和した形。）
（發は正合から反となつて發展する形。）
（亂は反反重なつて惑じの亂れる形。）
（衰は正合から反にかへる衰退の形。）
（強度は數の關係があてはめてありますからそれによつて定めること。）

す。しかるに我が大日本帝國に於きましては、象形を顯す漢字の特徴を充分取り入れると共に、その結合に、流動的な、假名を用ゐ、世界に比類のない綜合的、文字表現形式を整へたのでありまして、大日本帝國の文字表現形式が、世界に於ける最も優秀な形式となつてゐるのであります。單なる傳統的立場からでなく、文字表現の本來の意味から考へて、我國の文字表現形式は最も進歩したものであります。之をローマ字や、假名書にのみ改めると云ふのは、絶對に不可であります。

世界の總べての文字表現が、我國の文字表現の如く、象形文字と流動的假名の綜合形式を採るに到る事が必要であり當然であります。我國民は充分なる自覺をもつて、大日本帝國の文字表現形式をもつて、最も良き大東文化の建設とその表現に努力すべきであります。我國民が、此の自覺を失へば遂に國を辱める事になるでせう。文字表現に於て、自らその最も良きものを棄てるならば、國威は知らぬ間に傷けられてしまふでありませう。吳々も大日本帝國の文字表現が最も優秀なるものなる事を確信して下さい。

そして象形文字の形成には、東洋、特に大東の先人が、苦心慘憺して、天地の象に法り、文字形成の美的法則によつて完成したものである事を悟つて、文字の含む、眞面目な意味を充分に了解せねばなりません。只に、姓名のみならず、あらゆる言表と、文字表現を正

しくし、象形文字と假名との更に徹底的なる融合統一に努力せねばなりません。

象形文字は一點一劃、數と音とを象に總合する意味に於てのみ、人間の共通的使用物となつたので、根本的に普遍妥當性の無い文字は成立し得なかつたのであります。

而して象形文字に於ける旁、扁、冠、脚等は、長い習慣によつて略されたものがありますけれど、その成立根據に立ち還つて考察します時には、飽く迄それらの示す、象形の文字として完成した形を採つて考へて見るのが、正當でありまして、たとへば、衣は、何年經つても、衣といふ六畫の象形を離れては存立し得ない以上、六劃としての數理に辯證さるべきものでありまして、如何に習慣によつて、五劃に計算されるやうに見えても、それは反の立場に於て成立せる現象であつて、正の立場は飽く迄も衣と云ふ象形にあらねばならぬのであります。

示は示といふ象形を離れては、少く共、象形文字としての文字の精神を失ひますから、あく迄、五劃でなければ、數理の正は得られないのであります。

しかし論ずる人は、言ふでありませう。「氵は水であつて四劃であるが、象形の起原から言へば水で三劃であるはずだ。」と。しかし私らは完成した象形文字の標準は、象形文字としての發達の最後の段階なる楷書に置かねばならないと云ふ事を確言致します。何となれば、古代文字から發して辯證發展して最後に綜合されたものが楷書であることは、文字の歴史の明白に示す處でありまして、康熙辭典はその代表的集成の一つであります。略字は勿論之を本字に直して考ふべきものである事は云ふ迄もありません。我國に於て作られた字は、其の成立した劃數をもつて計算すれば宜しい。又假名は、漢字を正とし片假名を反として平假名に於て綜合されたものでありますから、平假名の劃數を標準とすべきでありますが、過渡期の現象として、片假名の劃數も、新選名盤には示しましたが、遂には平假名に統一、綜合されるべきものであります。又草書行書におきましては、その曲り日の數、筆勢の轉換をもつて數理を決すべきものでありまして、之は、書道を論ずる場合にのみ問題になります。

人は又自己の姓名を正すと共に、自己の屋號、會名、著書名、其他いやしくも文字表現をなす場合には、あらゆる機會に於て、その劃數、音調、意味の三つに綜合的の注意を致して、表現の正を致す事に全力を擧げて、もつて大日本帝國に於ける言表及び文字表現の根底を正す事を希望するものであります。

國民の總べてが正名を有し、その他あらゆる表現過程に、總べて中心を得るの道に到る時に、始めて我國の文化の正しき基が定まり、遂に世界各國に對する文化傳道が開始され得

るのであります。

迷信的な立場から姓名判斷を云爲するが如き時代は既に過ぎ去りました。文字生成の正しき意味を悟り、表現と本質との深き哲學的意味に迄徹する時には、何人も自己の姓名を正し、ひいてあらゆる表現を正して以つて闘運の精神を奮起せしめ、象と共に、國運の發展と、全世界の文化的統一運動に參與する事は大日本帝國臣民の義務であると同時に權利であります。小なる事と思ふ事が最も大なる事であります。小事に忠なる者こそ、大事に忠なる所以であります。小事より正さずして大なる闘運の道に入る事は出來ません。正名は實に闘運術の奥に到る門戸であります。門に入らずして堂を論ずる者は蓋し僞者であります。

さて、再び正名の問題に還りますが、既に、劃數、格の對比、意味の正を得終つても、闘運の精神に缺ける處があつては、所謂寶の持ちぐされであります。そこで、正名をして正名たらしめる根據、卽ち自己の精神を正す方法を定めなければなりません。これ卽ち正神であります。正神の道は卽ち易であります。易とは、日月を顯す象形文字であります。

而して、天地の運行の象は、日月の變化に觀るのが、最も明であるのであります。そこで自然の變易を意味する文字ともなり、又日月は相並んで、自然に光明を投ずるものであ

りますから、明、或は光明の意味ともなるのであります。

又、運行最も滑かなるを易として、容易の意ともなります。又占ふと意味は先驗的論理を正とし數理を反として經驗的事象に當てはめると云ふ意味であります。

正神の道としての易をもつて正名そのものの當否を斷ずると共に、一切の迷妄に當つて一刀兩斷、自己の態度を定め、一言一行躊躇する事無きに到るやうに自己を修養する方法が易斷であります。

易斷を人に立てて貰ふなどは闘運術の立場から言ふと根本的に間違つてゐます。易斷は正神のため、日々自ら行ふべきものであります。

しかるに在來の易斷方法は、易の眞精神を發揮し、正神の道に到る方法として缺けたる事を知つて、此處に新に易盤なるものを發明し、如何なる人も之によつて正神の道を得て、以て正名の效果を萬遺憾無き迄に發揮し、更に、進んで方相、宅相を定め、命理、人相を反省して、現世における最大の幸福と、永生の名を殘す大道を說明し證明せんとするのであります。

第三章　易の辯證

一　易斷法

易は辯證法的立場から出發し、數を通じて、象を定める目的をもつて、形成された道であります。易によつて事を斷ずる事に就いての理由を證明する事は、可成の用意を要する問題ではありますが、出來る丈解り易く之を證明しやうと思ひます。

先づ第一に、私らは、事象を辯證するに當つて、必ずしも意識的に辯證する事のみを眞實として、無意識的に辯證する世界のある事を忘れてはなりません。

ヘーゲルの所謂、理性的なものは總べて存在し、存在するものは總べて理性的である、と云ふ言葉を藉りるならば、辯證しうるものは總べて存在するものであり、存在するものは、總べて辯證し得るといふ事を知るのであります。

此處に、私らの意識的感覺に於て認識し難いやうに思はれる事實があるとしても、私らが、その事柄に就いて、眞に知らないとは言ひ得ない場合があるのです。

私らは、自己の內臟の活動を一つ一つ意識しないけれども、潛在的には確にこれを知つてゐるのであります。漠然としてゐるやうではありますが、實に確に之を知つてゐるのであります。私らの意識し得る世界のみが、理性的では無いのです。意識し得ない世界にも辯證規定が行はれてゐるのであります。

私らは宗教人が、靈感とか、豫言とかいふ言表に於て、普通人の感覺を超えた如き、知識を有してゐる事を聞き又信じますが、私らが普通人と稱する者と、宗教人と稱する者との間には、果して根本的な相違があるでせうか。それは見方にも據るでせうが、人間である以上、かかる根本的相違はないと考へるのが正當であります。

そこで一歩を進めて考へると、普通人も矢張、潛在的には、通常知覺を超えて、いはば靈的な知識を持つてゐるのでありますが、只特定の宗教人にはそれが反省自覺されても、一般には、存在はしてゐるが、自覺されない狀態にあるものと考へられるのであります。

少く共、ある事件に對して、自己の採り得る最も良い態度、一番正しい態度はどう云ふ風な道であるかと云ふ事は、潛意識的に私らは知つてゐる筈であります。それを判然と示さないで、迷つたり、誤つたりするのは、全く、私らの慾望が、理性を壓して、その自由なる活動を妨害してゐる場合が多いのと、動物性神經の活動と植物性神經の活動（所謂靈）

との調和が破れて、綜合的に事態を觀察し得ない場合が多いからであります。

それ故、易斷を以つて事を斷ずる場合には、先づ第一に自己の意識の内に内在する靈を信じ、その靈的狀態を正として、次に、靈に對する反としての物の世界を見るのであります。而してこの靈と物との正合を、自己の肉體、殊に内外の交通部位にあたる手を通じて、綜合して行くのが、易斷の方法であります。

靈と云ふ如き言表が、迷信的であると云ふならば、經驗的意識に對して、先驗的意識といつても宜しいし、又生理的に云ふならば、植物性神經の基元である、第三腦室の活動であると説明しても宜しい。又物と云ふのも、漠然としてゐるやうに思ふならば、此場合は、占斷に要する器具の意に解して宜しい。

但し、此場合における、靈と物とを綜合する心の作用は、辯證的、卽ち基本的判斷、綜合的判斷に據らなければならない故に、それが應ずるためには、靈も亦正しい靈でなければなりません。卽ち惡事を斷ぜんとしたり、一事に多數の事を斷じやうとしたり、何ら自他の求道の助けとならないやうな金錢問題や、遊び半分面白半分の占斷をなさんとするやうな態度をもつて强ひて發現させた植物性神經の活動は、所謂、弄ばされた靈となつて、心の辯證的活動に相應ずる事が決して無いのであります。又かかる靈は、我國に於ても、古代より認められた所謂、邪靈に屬する事となるのでありまして、決して、求道の眞士の求むべからざる靈であります。其故に易斷をなさんとするに當つては、先づ第一に靈を正す事であります。このためには、惡事を願はず、戲事を願はず、と云ふ事を第一に注意した上、善事を願ひ、道義を願ふと云ふ態度を定めて、肉體的には正坐して、卽ち、兩方の足を重ね合せたり　離したりする事なく、拇指と拇指が輕く相接するやうに坐し、又兩膝は、その先を揃へて、肩幅と等しくし、所謂、最も身體の中心を得易い處の姿勢をもつて坐し、腰はうんとつき出して、鳩尾を落し、首を正しく位させて、脊柱を正し、肩に凝なきやう力を拔き、手の各關節にも亦凝るところがないやうに注意をし、呼吸は深く靜かにして、呼息を長くし、臍下丹田(臍と恥骨の中間部と腰部の中心とを貫ねた線の中心)に滿身の氣力を流動させつつ、身體の完全な中心を定めて、悲や、苦や、迷の總べてを神佛に任せて、虛心坦懷、易斷の器具に對すべきであります。

この時には、如何なる人にも正靈の活動が顯れるのであります。勿論、眞個の宗教人でない限り、常住坐臥、かかる狀態にある事は、殆んど不可能でありませうが、或特定の時間にかかる態度を執る事は、何人にとつても可能であります。

著者は、或特定人にのみ行へて、大衆に緣なき、特殊な方法に就いて述べ、又證明をな

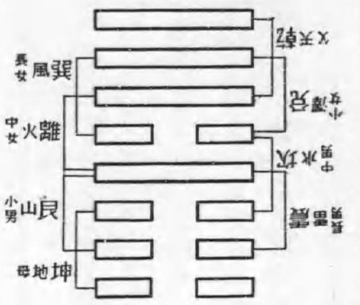
さんとするものではありません。右にのべた態度は如何なる人も執り得、又一日に一回位は必ず執らねばならぬ態度であります。人間としてかかる態度を執り得ない者は、既に病者ですから、宜しく心療して、先づかかる態度が樂に執り得るやうに試みなければなりません。

さて、かかる態度によつて、靈が發現し又正されたならば、次には物に就いて、それを正す方法を說べませう。すべて物を正すと云ふのは、物を辯證的に整へる事ですが、そのためには、辯證法其物を、物の形によつて、示すのが、一番便利です。

卽ち、易の八卦といふのは、辯證法其物が物の形を藉りて顯はされた物であります。八卦は正を表すに一の形を用ゐ、反を表すに‐‐の形を用ゐました。そして一を陽と名付け、‐‐を陰と名づけたのであります。一と‐‐の正反合の組合せは、數學的に計算して、2^3卽ち八しかありません。

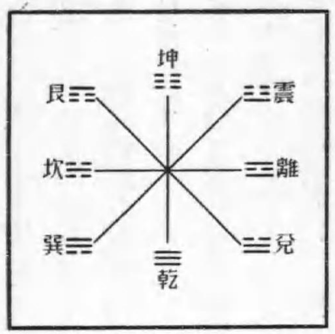
この八つの組合せは☰正正正☱反正正☲正反正☳反反正☴正正反☵反正反☶正反反☷反反反となります。これに物の形をあてはめて、順に、天、澤、火、雷、風、水、山、地と名付けます。

この八つの辯證形式自身を、更に辯證的に排列しますと次の如くなります。



（綜象圖）

更に對立關係を圖示しますと左の如くなります。象にすれば天象であります。



（失天圖）

この對立圖の取り方の原理は、一又は－を一つに數へて各對立部位の形の總數が等しいやう（九數）に並べたのでありまして、之によつて對立表は、中心を得た形となるのであります。此圖は純粹に論理的立場からのみ構成したものでありますから、昔から先天圖と云はれてゐます。

そして方位に配した對立圖である後天圖と區別してゐます。後天圖と云ふのは左の通りであります。これは象にすれば地象にあてはめたものであります。以上の二つを綜合した對立圖が、前に示した、八つの列に並べた圖でありまして、綜象圖とも云ふべき圖であります。

（後天圖）

易の辯證法は第一段に於てかく、辯證法其物を、物の形に顯しますが、そのあらはれた形への命名過程にも矢張辯證法を用ゐたのであります。卽ち、天を正とし地を反として命名したのち、それを人間に綜合して命名したのです。

乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤等の命名は天象の立場から、その形に相當する命名であり、天、澤、火、雷、風、水、山、地は地象から見た命名であり、父、少女、中女、長男、長女、中男、少男、母等の命名は人象にあてはめた命名であります。この天象、地象、人象の命名が更に、綜合發展しまして、種々樣々なる象の顯現となるのでありまして、易の方法は徹頭徹尾、辯證的發展であります。

而して、第二章に於て述べた連續數の、それ自身の象に卽した辯證的發展に對して、易は、辯證法其自身の象に卽した辯證的發展でありまして、第二章に於て述べた處の數其自身の辯證は、この易に於ける辯證法自身の辯證的發展を正とすれば、寧ろ反に當る見方であります。而して、易における先驗的な辯證に對して、同じく先驗的な辯證の立場を採りつつ、自らその反の立場に立つものでありまして、その相違は極めて明瞭であります。而して易における辯證の辯證と、第二章に述べた數の辯證とを綜合するものが、一切の經驗的辯證法でありまして、總べての術數學がそれに當るのであります。

さてかかる易をもつて事を斷ずるに當つて第一に正なる立場が、精神を正すことであつて、その反として存在するものが、右に述べた如き、形式規定でありまして、之によつて易斷の具體的方法が綜合されることになるのであります。

而して易斷の具體的方法自身も亦、辯證的に正反合の三方法を兼ね備へてゐるのであります。卽ち先づ正なる立場にあるものが、先天の圖の示す如き對比を基として、象を顯したものを用ゐて占斷するのであります。

先づ古來行はれる處の方法は、筮竹による方法であります。この場合に於ては、辯證法其れ自身はその反として數を置かねばならないのであります。

數は既に第二章に於て示したる如く一(正)二三四(反)五六七八九十(合反)となり、一：二、三：四、五：六、七：八、九：十(反1)(反2)(合3)(反4)(合5)となり、この1 2 3 4 5に到つて始めて、3に於て中心を得た數となつて納るのであります。而して、この場合、一、三、五、七、九の五數は正であり、二、四、六、八、十の數は反であります。然るに此處では先驗的な立場に於て象をかたどるのでありますから、正の數、一、三、五、七、九の數の總和、二十五を更に正反に分つて、五十として、これを、易斷の場合の基本數と定めたのであります。それで筮竹（竹を圓くけづれる棒）の數は五十とします。而して、易斷をなすに際しては、この五十數を其儘用ゐる時は、中心を得る事が出來ませんから、その內の一本は大極を象て之を取り除くのであります。しかる時は、殘數四十九は中心を得て辯證的に變化活動する事が出來るわけであります。この數の採り方に就いて支那の姚信、董遇、京房、我國の根本通明氏其他が種種樣々の說を立ててゐますが、私は敢へて之等諸先輩の說を批評する事はしません。何となれば、筮竹の數を五十とする事は、右の如く辯證法的に見て極めて明かに證明されるからであります。之に反對するならば結局辯證法の否定に終るのです。次に四十五筮說、百筮說等もありますが、五十筮說を正とすれば百筮說は反、四十五筮說はその合にあたりまして、何れもその辯證的意味さへ明かなれば用ゐられるのですが、先づ正の立場を採用するのが物の順序と云ふものです。

さてここに正の立場に於て筮竹の數は五十とすべき事が確定しましたならば、筮室を靜閑、潔淨な處に定めて、香を焚き、邪氣を拂つて、室の空氣を沈澄にして、手を洗ひ、口を漱ぎ、禊をして、前に述べた如く正坐します。向は正北を向きます。正坐には拇指を接して重ねず、膝は開いて肩幅と同じくします。所謂肩耳相望み、鼻は臍と對し、口は結び、舌は上顎を支へ、眼は必ず開いて、鼻息は綿々として微かに出入し、鵞毛を鼻孔に置いても飛ばぬ位にして、決して呼吸を止めてはなりません。此時心は世間と離れ、名譽なく、

金錢なく、空々乎として、只臍下丹田の中心を感ずる丈でなければなりません。そして恭しく、筮竹五十策の内、一策を櫝中にかへし、殘の四十九策の中程の所を大握して、全策を扇狀に開いて、高く額際に捧げ左の祝祈を捧げます。

「伏して惟みれば卦は神明に通じ、感じて斯に萬機に應ず。今某の事、未だ吉凶得失を知らず、爰に神明に質す。庶くば皇天上帝、此の誠意を容れ、此處に來格し、明かに之を告げよ。爾の泰筮常あるに藉る。」と。

かくて無念無想、只一中心の團々たる如き心境裡にはつと吾にかへる瞬間に、四十九本の筮竹がざつと兩分されるのです。左の手の方は天(正)でありまして、右の手の方は地(反)であります。それで一先づ右手の中にある策を机上に置きまして、その中から一本をとつて、之れを左手の小指と無名指との間に挾みます(これを扐にかけると申します)。この一本は、天(正)、地(反)に對する人(合)を象るものでありまして、これによつて正反合の一形式が整ふのであります。

次にこの左手の中の策を一度に四本づつ數へて行きます。四本づつ數へるのは左右で合して八數を基準にしてゐるからであります。かくして數へて行つて最後に殘つた數は、一か二か三か四となります(四で割り切つて零としては辯證出來ませんから、四本殘つた時は、四とします)(この殘りの數を奇といひます)。この殘りの數を前の小指と無名指との間に挾んだ一本の所謂扐と一緒にします。

次には、地(反)の方の策、卽ち前に机上に置いた方の策を右手に取りまして、それを左手に持ち代へまして、前と同樣に、四本づつ數へまして、先刻の殘りの奇及び扐の數に加へます(これを扐に歸すると言ひます)。この扐に歸した數は、左右の策の總計が四十九ですから當然五か九になります。これで第一變が終ります。

第二變は、この五か九かの策を四十九本から差し引いた殘りの四十本、又は、四十四本に就いて以上の變法を繰り返しますと、この度集つた數は必ず四か八であります。これが第二變であります。

次には第一變のときの殘數と第二變のときの殘數を全策、卽ち四十九本から引きまして、その殘りに就いて、同樣の手續きを繰り返しますと、そのときの殘數も必ず四か八かになります。これが第三變であります。

最後に、都合三變の殘策を、四十九本から引いた殘りに就きまして、更に之を四除しますと、その結果は六か七か八か九かになります(これは四の六、七、八、又は九倍の數だからです)。

それで、その結果が四の六倍の時は少陰と云ひ、八倍の時は老陰と云ひ、そして七倍の時は少陽と云ひ、九倍の時は老陽と申します。それで、六本の算木の一番下の爻を置きます（老陰は筮、老陽は巳、小陰は ⚋、小陽は ⚊ のしるしがついてゐます）。この場合、小陽、老陽であれば第一の算木（正）を陽とし、小陰、老陰であれば、最下の算木を陰とするのであります。

かくて順に、三變して六つの爻を得るには、三六、十八變變ずる必要があります。これを十八變法と云ひ、本筮と申します。又かくして得た卦を本卦（遇卦）と申します。

さて辯證的に言へばこの本卦の内に、老陰があれば、變じて陽となり、老陽があれば變じて陰となりうるわけですから、本卦中の老陰、老陽を變じて、所謂變卦（之卦）を得ます。この本卦と變卦を得て、判斷者は初めて完全な卦を得たのであります。そこで本卦を中心とし變卦を從として、本卦全體の辯證的判斷を試みます。即ち本卦自身を、上、下の三爻に別ち、下を正とし上を反とし、更に、六つの各爻についてそれぞれ、辯證して行きます。

此の本筮の仕方を合としますと、それに先立つ反に相當する筮法が即ち、中筮であります。中筮と云ふのは、四十九策を手に取つて、二分し、右の策を机上に置き、左の策の中の卦一を除いて殘りの數を見ます。

そして、一餘れば乾☰、二餘れば兌☱、三餘れば離☲、四餘れば震☳、五餘れば巽☴、六餘れば坎☵、七餘れば艮☶、八餘れば坤☷と云ふ事に致します。（この數の規定は先天圖に乾から左廻りに、一二三四八七六五と附して行つた數です。左廻りにとる理由は、左廻りに卦の形勢を順に變じて行つたからです。）

右のやうに六變しますと一卦を得ます。

更に、本筮（合）、中筮（反）に先立つ正に相當する筮法が略筮法であります。

之は高島嘉右衞門氏の定めた法でありまして、初めの二變化によつて本卦の上下、兩卦を得る方法であります。

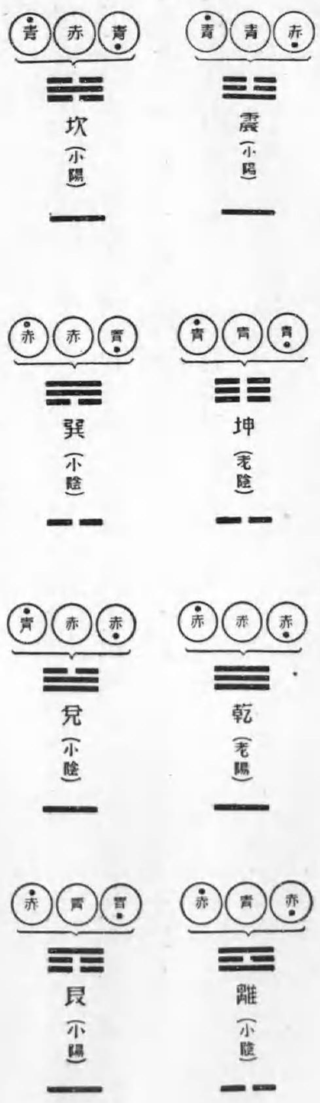
即ち、四十九本の策を二分して、左右に別ち、その右の筮竹を机上に置き、左の手の策の内から、一本をとつて、左の手の小指と無名指の間に挾み、次に左の手にとつた筮竹を右の手で、二本づつ四度づつ、數回つづけて、即ち計八本づつ段々に數へ除いて、その餘つた處の數に、前の小指の間に挾んだ一本を加へて、其の數に依つて卦を立てます（中筮と同樣の規定に從ひます）。そして本卦が出來ましたならば、次には變卦を得ます。その方法は、前の通りですが、只前には八本づつ拂つたのを、變爻の場合には、爻の數は總てで六爻ですから、二本づつ三度、六本拂ひにして、餘りの數を算へます。そして殘りの數が

一本であれば初交變であり、二本殘れば、二爻變であり、順にかく定めて、六本の滿數が殘つた時は六爻變と致します。此場合辯證の順序は常に下から始めます。

以上が筮竹を用ゐて易斷する方法でありますに數の辯證を綜合してゐる點でありまして、之は確に意味ある事であります。筮竹を用ゐる筮法の特徴は、それが嚴密注意すべきは、數を根據として、易斷する方法に先立つて、辯證の形式其儘を、象に當てはめて、易斷する方法のある事であります。

その内の反にあたるものは、眞勢中洲の定めた圓著筮法であります。これは圓著といふ十八枚の小札を用ゐて、卦を求める特別な筮法であります。此の易斷に用ゐる圓著といふ道具は厚紙又はセルロイド、或は木製の左のやうな記號の書いてある十八枚の小札です。そして表面は赤色(陽)とし、裏面は青色(陰)になつてゐます。

此の十八枚の小札を兩手の中に入れて、よく打ち振つて、手の中から一擲して疊の上に置きまして、上、五、四、三、二、初の種類を各三個宛集めて次の順序に置きます。一、字の上に・印のあるものを左端に、二、字だけで・印の無いものを中央に、三、字の下に・印のあるものを右端に置きます。すると左の如く定まります。



卽ち以上の小陽、小陰、老陽、老陰によつて陰陽を得て、初爻から漸次六爻を得て、一卦を作るのです。時間は非常に短くて、先の十八變法の本筮を得るのであります。

これにつづいて、反の立場にある方法は、卽ち、擲錢法であります。これはあらかじめ錢三錢を用意して之れを擲げた時、三面が出れば老陰(×)、三背が出れば老陽(⊟)、兩背一面の時は小陰(⚋)とし、二面一背の時は少陽(⚊)とします。それで例へば第一回に⚋、第二

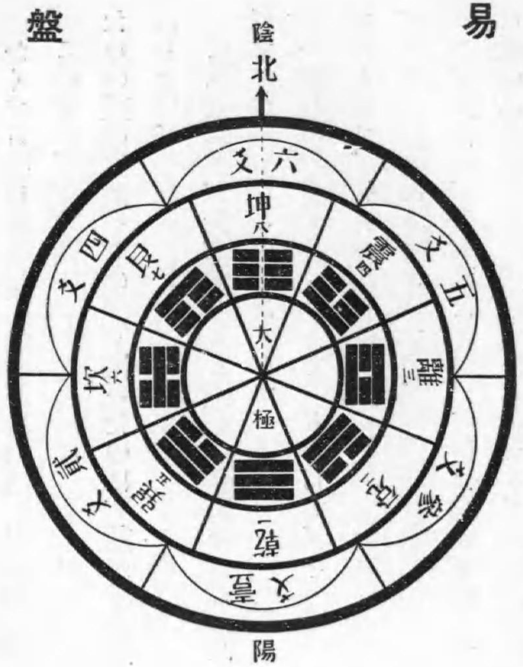
同には一、第三回には×であれば、此の三畫を連結して、☵を得まして、下卦は坎となります。次に前の如く三回投げて、第一回は⚋、次も⚋、第三回は×となつたときは、☵となつて上卦は坤となります。それで本卦は☵☷、即ち地水師となります。そして第六爻の×と第三爻の×とは共に老陰ですから、變卦はその反の陽と變じて、☲☶即ち山風蠱の卦となります（老陽のあつた場合即ち⊟の場合には、反對に陽爻が變じて陰爻となります）。

以上の反、合の方法に先立つて、正の法として、今度著者によつて發見された方法が即ち、易盤による最も簡易明快な方法であります。これは、丁度、筮竹による略筮法に呼應する方法でありますが、略筮よりも更に簡單で、しかも辯證的立場に於てはその意義が何人にも良く了解出來るやうになつてゐます。

これには先驗的辯證の圖である易の先天圖によつて易盤を作ります。

この圖の內の三圓が先天圖による配置で、外の一圓は爻の配置です。內の圓の對立劃數の總和は何處も九であり、外の圓の對立劃數の和はどこも皆七になつて、中心を定めるやうにとつてあります。卦にあてた數も對立數の和が總べて九になるやうにとります。坤の中心を北に向けて用ゐます。占者は自分自身も北を向いて用ゐます。

易盤



（先驗圖の廻り方は卦の變化の順に從ひ乾兌離等の順であり、爻の配置は、初（正）二（反）三（合）四（正）五（反）六（合）といふ風に孰れも左に廻ります。理由は、後天的には大陽の光は右から左に廻つてゐるやうに見えても先驗的には、左から右に廻つて經驗と反對だからです）（先驗的配列で占するのは、此の際の判斷は先驗的判斷だからです）。

この圓盤の中心は大極と定め、ここに一本垂直に、直なる棒（圓き竹棒が最も宜しい）を立て、正坐、開目して本筮の時と同じく心氣呼吸を丹田に流通して、北面して、盤は坤の部の中心を正北に向けて、左手の指頭を右手の指頭の上に置き、充分垂直に棒が立てられたと直覺した刹那に、兩指先を同時に上に離し、棒の最初に

倒れた處に示された卦を下卦とし、二度目に倒れて示した卦を上卦とし、三度目に棒の倒れた時に、示された數をもつて變爻とします。

かくする事によつて、最も簡單明瞭に、そして確實な卦が立つのであります。

この盤が、先天圖によつた所以は、全く先驗的な辯證をなすからであり、又變爻を得るための數の位置を圖の如く置いたのは、數が辯證的に相對立して中心（大極）を得るためであります。

これなれば、如何なる人も正しい易斷を得るのみならず、正坐澄心の易斷の態度を自ら崩す事が無くなるのであります。

一體易の判斷は最後の合でありまして、その正なる立場は、最初における神明との感應であります。既に神明との感應が直感出來れば、その易は應じたと申します。易が應ずれば判斷は自然に出來るのです。

さて最後に、先天圖によつた、先驗的立場からする正反六種の筮法を綜合した、經驗的に象のみによる易斷法を說明しませう。

かかる綜合的占斷の前に、正なる立場に於ける易斷法に據るべきは云ふ迄も無いのでありまして、正なる立場を棄てて、直ちに、合なる立場に入る事は自然に背くものである事は豫め注意しておきます。

さて、この方法の第一は（卽ち此の方法中での正なる方法は）、先づ自然現象を觀て、易の後天圖を基として、辯證發展した種々なる象を豫め定めて置きまして、それに當てはめて卦を定める方法であります。卽ち、易の後天圖を基として、自然現象に、卦を當てはめると、先づ次の如くなります。これは精神及自然現象の性質、作用、形態等から、卦に一々對應させて、定めたものでありまして、單なる聯想記述ではありません。（その詳細の證明は「大東新易」を見て下さい。）

第一、乾☰（一）剛健、大明、威嚴、廣大、昭明、尊榮、純粹、正直、盈滿、壯盛、顯貴、勇進、向上、驕奢、亢慢、苛刻、强暴、侵略。（二）團體、始源、大和、天、太陽、霰、水、氷。（三）君主、父、長者、老人、名望家、夫、男、乞食、下人。（四）頭、首、骨、肺。（五）春夏、秋九月十月頃、戌亥の年月日、東、南、西北、西北に向ふ家。（六）馬、良馬、（七）米穀、菽、大豆、午蒡、芋、蘿蔔、豆腐、團子、木果、果物。（八）高塔、大厦、樓觀。（九）金銀、玉、冠、鏡、寶珠、箱、及、帶、綿、履、袋、巾着。（十）赤色、黑色、黃色。（十一）四、九、一。

第二、兌☱（一）歡喜、柔和、親愛、好美、娛樂、厚情、感服、義、含蓄、雄辯、說明、

毀傷、憂愁、卑劣、色情、諂佞、僞善、狹量、進取、成功。(二)月、新月、星、雨、露、雪、霰。(三)少女、妾、藝妓。(四)秋、八月、酉の年月日、癸、西方。(五)口、舌、肺、頬、吐瀉する事。(六)虎、羊、馬、猿、鳴禽。(七)灌木、濡草。(八)澤地、池、井、干瀉、水邊、西向きの家。(九)金物、樂器類、鏡、扇、文書、權衡、紙筆、廢物、上に口あるもの。(十)白色。(十一)四、九、二。

第三、離☲　(一)智惠、美麗、顯著、禮儀、文明、邪智、疑惑、性急、遷延、苦味。(二)太陽、電、虹、火、霞。(三)中女、文人、學者、戰士、目、心臟、腹。(四)晴、五月、午の年月日、南。(五)雉、牛、飛鳥、螢、蟹、龜。(六)內軟外硬の木果、花樹、楓。(七)森林、乾池、宮、社、窓。(八)兵象、狩獵。(九)網。(十)赤、紅、紫。(十一)三、二、七、三角形。

第四、震☳　(一)震動、發出、才能、興起、勇敢、奮怒、成功、進步、生新、俠氣、勉强。(二)雷、電氣、地震、浮雲、聲。(三)長子、三公、壯士。(四)髮、脚、肝臟。(五)春、二月、卯の年、月、日、東。(六)龍、蛇、馬、走獸、飛鳥、蟲類、鮮肉。(七)花、竹、葦、陽木、果物、蔬菜。(八)耕作所、農地、農業。(九)鼓扇。(十)青碧。(十一)四、八、三、銳角。

第五、巽☴　(一)柔順、諂諛、疑惑、不決斷、隱伏、多慾、姦慝、爭鬪、出奔、薄情。(二)天命、命令、風、霞、氣、香氣、臭氣、酸味。(三)長女、僧尼、秀才、白皙人種。(四)股肱、膽、吐瀉。(五)夏四月、春夏の交、東南、辰巳。(六)魚、鷄、禽、蟲、蛇。(七)樹木、草、花、園、楊柳、蔬菜、果物。(八)海、川。(九)繩。(十)青、綠、白、紫。(十一)五、三、八。

第六、坎☵　(一)誠、仁慈、愛執、通達、智慧、陷險、溺、多慾、愚昧、伏藏、姦慝、窮乏、性。(二)法律、骨折る勞卦、中滿(妊娠)、聲、月、水、鹹味。(三)中男、浪人、舟人、盜人。(四)心疾、血、耳、腎臟。(五)冬、寒、北、子、壬。(六)豚、魚、狐、馬。(七)蒺藜、叢棘、海產物。(八)穴、窖、川。(九)水晶、鐵器、桎梏、弓、酒、袴、冷物、骨多き物、水中の物。(十)黑色、赤色。(十一)六。

第七、艮☶　(一)篤實、丁寧、愼守、滅亡、偏固、遲滯、狠戾、止。(二)鬼神、雲、嵐、霧、霆、甘味、土、石。(三)小男、獄吏、山中の人。(四)手、指、骨、背、鼻、胸、身體、胃、脾臟。(五)東北、丑寅。(六)虎、狗、百禽、狐、鼠。(七)山の產物。(八)山、丘、朝廷、宗廟、家宅、門、土の中の物、墳墓、城。(九)器物。(十)黃色。(十一)七、五、十。

第八、坤☷　(一)柔順、溫厚、安靜、謙讓、恭敬、貞節、順直、丁寧、儉約、貧賤、狹

少、虚耗、衰微、怯弱、怠惰、暗昧、疑惑、吝嗇、邪曲、伏藏。(二)法制、平均、聚歛、地球、月。(三)土壤、曇、霧、闇、下、空虚、甘味。(四)皇后、母、臣妻、女、老女、農夫、樂人、腹、肉、脾臓、胃。(五)秋、冬、西南。(六)牛、子母牛、牝馬、百獸。(七)五穀、藥、木、腐草、粉。(八)田野、平原地、耕作地、倉庫、村舍、貯蓄。(九)布帛。(十)黄色。(十一)八、十、五。

以上は一例でありますが、總べての自然現象は、盡く、この八卦の象として分類する事が出來ます。

例へば、姓名の易象を立てる時には、先づその姓と名の劃數を算定しておいて、姓の劃數を十で除した殘數を右の卦の内の相當するものにあてはめて、上卦とし、名の劃數を十で除した殘數を右の卦の内の相當するものにあてはめて下卦とします。そして姓名の劃數を合せたものを十二で除して、殘つたものが十一―十二であれば初爻變、一―二であれば二爻變、三―四であれば三爻變、五―六であれば四爻變、七―八であれば五爻變、九―十であれば上爻變とします。

例へば、「平田了山」に於ては、姓は十數、名は五數を得ますから、前表によつて、姓は艮又は坤ですが、平田の象を見て坤(地)の方を採ります。名は艮又は巽、震ですが、了山の象から見て艮(山)を取ります。從つて此の姓名易象は「地山謙䷎」となります。卽ち艮の山が地の下にあつて、謙遜して下位に下つた形となります。謙は德の基であり禮の始めでありますから、萬事亨通し、德明かに、功成る形であります。そして變爻は總劃數十五を十二で割つて、三を得ますから三爻變であります。卽ち「九三、勞謙す。君子終有り吉。象に曰、勞謙する君子は萬民服する也。」となり、之卦すれば坤爲地䷁となります。坤爲地の卦は、柔德の卦で、その德は順、その體は安靜であります。元亨利貞の利貞にあたります。その三爻は卽ち六三で、「章を含む、貞すべし。或は王事に從へば、成すなけれども終有り。象に曰く、章を含むは貞す可しは時を以つて發する也。或は王事に從ふは、知光大なる也。」とありまして、總べて、「平田了山」のあらはす、十五劃の總劃、五の第二格、七の第三格、八の第四格に對して相應じてゐます。又、音の對比から見ても、レウザンの對比は皆和であります。意味から申しましても、平田に山を了めた形で、大なる地が山の重きを了め背にして、之を定める意であります。又平田内藏吉となりますと姓は矢張、坤の卦になりますが、内藏吉は劃數三十數ですから、十除して十を得ますが、倉の意がありますから、矢張前表によつて、坤☷となり、平田内藏吉なる姓名の易象は、坤爲地となります。そして變爻は、總劃數四十を十二で除した殘り、卽ち四となりまして、矢張三爻變で

すから、之卦すると、「地山謙䷎」となつて平田了山の本卦と相應じます。これは卽ち、平田内藏吉と云ふ姓名が、第一格、第二格、第三格、第五格共、十及九の盈數でありまして全然虛無の數でありながら姓名五劃中の最後の反に於て、三十一劃の智仁勇の三德を備へた頭數暗示によつて、統一してゐるのと相應じ、又、内に吉を藏して現さない姓名の象意とも相應じてゐます。これは一例でありますが、總べての人の姓名の易象を立てて見ますと、皆、第二章に說べた數の暗示とぴつたり合つた、姓名の易象が出て來るのであります。在來の姓名易象の立て方の如く、劃數を八と六で除して卦を立てる方法は、易の先天圖と後天圖を混合した考方で、全て、後天的經驗的象のみによつて易を立てる時は、前表に示したやうな易の後天圖を辯證發展した象の分類にぴつたりあてて立てねば立ちません。

尙變爻の取り方の後天的配置は次の如くなつてゐます。

上	五	四	三	二	初
(九十) 九月、十月 頭、手	(七八) 七月、八月 顏	(五六) 五月、六月 胸	(三四) 三月、四月 腹	(一二) 一月、二月 腰	(十一十二) 十一月、十二月 陰、足

其他あらゆる事象に就きまして、その正反の象を定め、象のあらはれ方を、易の後天圖に依據して考察して卦を定め、又右に示した爻の圖を基として、爻を定めて行きます。其の一々の場合の證明と解說は、頗る詳細な說述を要しますから、總べて「大東新易」に讓つて、此處には、直接闘運に必要な正名の場合の易象の採り方丈を申しておきます。

次に、注意しておきたいのは、易斷によつて、物の種類を斷ずる場合には、右に示した象の表を應用します。千里眼の如き方法によらず、判斷のみで、對手の隱したものを斷ずる場合には頗る正確に出て參ります。この場合、科學的に實驗するためには。隱されたるものの、色、形、大さ、性狀、用途と云ふ風に分類して、一つ一つ卦を立てて、斷ずると初心の者も解ります。例へば私自身が實驗した例で申しますと、對手が、萬年筆を隱した場合に、その色を斷じた場合です。卦は、䷍と出ました。それで、内には黃色、外は青くて玄黃、卽ち黑みがかつてゐて靑く見えると出たわけですが、その通りの色でありました。

この方法は、易斷を迷信とする人に對して、實驗的に、その妄を開く最も良い方法ですが、勿論、不眞面目にやつてはなりません。又遊び氣分でやつてはなりません。

其他、經驗的事物による易斷方法には、右の如く形象による以外に、その象の作用の方

面からする(反)の方法があると共に、この正反の二法を綜合した、直覺による方法、卽ち宗教人の所謂豫言、靈感に當る方法がありますが、これは、易の奥に達した場合の方法でありまして、その科學的證明過程は頗る精細に亙る必要がありますから、之も「大束新易」に於て取り扱ふ問題とします。讀者は先づ易盤によつて、易斷の最も正なる方法、卽ち易の辯證的方法と數の辯證による正名丈を先づ正確に實行體驗して、何よりも鬪運術の門戸に入られん事を希望します。

この門に入るや否や、讀者の運命は其の刹那に展開して、遂に鬪運の奥に入らざるを得なくなる事は、火を睹るよりも明かであります。

次に、この意味の易斷に必要な、易の各卦とその變化の意味を細說する前に易の辯證形式と、その用語に就いて、說明しておきませう。

二　易の構成

今迄度々述べた處の、易の卦と云ふのは何かと申しますと、これは畫を重ねると云ふ意味であり、六つの畫によつて正反(陰陽)の形を表すことでありまして、正(陽)の畫を表すには一の記號を用ひ、反(陰)の畫を表すには--を用ゐます。これは易の辯證法の根本的規約です。下の三つを內卦又は下卦といひ、上の三つを外卦又は上卦と申しまして、その合せた六つの畫を六爻と申します。

この爻といふのは交るといふ意味で、畫の變化結合によつて、辯證變化が起ることになります。この爻は、卦の合に對する正であります。

又彖と云ふのは、材の意で、右の卦の意義を說明するに當つて、先づ第一に、その本質を論じその標識を與へるものといふ意です。

象は彖の反でありまして、像の意で、天地人の自然現象に卦の辯證を適用したものの意です。

かくていよいよ卦の意を明かにするに際して用ひる言葉に、吉凶悔吝といふものがあります。

吉といふのは倫理的(正)には善であり價値的(反)には利であり、心理的(合)には得の意であります。凶は、吉の反對で、惡であり、損であり、失であります。

悔といふのは、凶から悔悟して吉に赴く事を云ひます。又吝はその反對で、失錯をしてなほ過を改めないことで、漸次凶を深める事です。

その他、易には、「往く攸あるに利し。」とか「大川を渉るに利し。」とかいふ事があります。前者は進んで事をなし、志を遂げて宜しい意であり、後者は、危險を冒して大業を成就し得るといふ事であります。

さて易の辯證法は、先づ三才（天道、人道、地道）として表はされてゐます。卽ち、

反	地道	人道	天道	正
柔	‥	‥	‥	剛
反	―	‥	―	正
義	‥	‥	‥	仁
反	―	―	―	陰
正	‥	‥	‥	反
陽	―	―	―	正

又、正反の辯證が順に行はれうる形としては、

(上)六	地	‥
五	天	―
四	地	‥
三	天	―
二	地	‥
(初)一	天	―

と云ふ風に示されまして、これを陰陽の定位と申してゐます。

從つて、正反の順序を得てゐない場合は、陰陽位を得ずとして次の如く示してゐます。

―	‥	―	‥	―	‥

この場合、一（初）は天（正）、二は地（反）、三は天（正）、四は地（反）、五は天（正）、六（上）（反）は地とそれぞれ定まつた位置があるのですが、實際は、この定位を得てゐない場合が多いのであつて、この定位を得た卦は、一つ丈で、之は水火既濟の卦と云はれてゐます。

この點が西洋の辯證法と異る點で、西洋の辯證法は、正反合の發展丈を、精神的にのみ（ヘーゲル）又は物質的にのみ（マルクス）精神界、自然界に適用してゐる丈でありまして、いはば理想主義的辯證法であります。反之、東洋の辯證法の特徵は、常に、現實に卽した辯證法でありまして、正反合の理想的發展は或特定の場合の他は、當てはまらず、實際問題の多くは、辯證法の變形された形に於て存在する事を、一つ一つ、克明に證明して行くのであります。

そして自然科學の世界にも、精神科學の世界にも、文化科學の世界にも、又數學にも論理學にも之を適用して行つたのであります。

かくて、世界に比類のない辯證法の完成があつたにもかかはらず、その眞精神と正しい適用と、正しい方法は、支那に於て失はれ、却つて我國に於て正統を傳へ、且つその適用

と方法を大成したのであります。この先覺の一人に、古くは高松貝陵先生があつて、皇易の眞義を宣揚されたのであります。

しかも、西洋の自然科學偏重文明の輸入と、唯物辯證法の名の下に、偏理想的辯證法の傳播によつて、我が大日本帝國の有する眞の哲學は隱蔽された狀態にあるのであります。私は之に對して、大なる義憤を感ぜざるを得ないのであります。此處に、自然科學的立場や唯物辯證法の立場を盡く統一綜合して、一の辯證體系を完成し、「大東新易」なる名の下に、世界の人々に問はんとしてゐるのでありますが、本書は實にその尖兵であります。

さて、以上述べた陰陽の定位があるために、易に於ては、「位に當る」とか「位に當らず」と云ふやうな言表があります。これは正反がその定まつた位にあるか否かをいふものでありまして、天(陽)(正)のあるべき處に、地(陰)(反)があれば、「位に當らず」と云ひ、地のあるべきところに地があれば、之を「位に當る」といふのです。

又易には、「參天兩地」といふ言葉がありますが、これは陰陽定位圖における二と四とを兩地と云ひ、兩地を包む一、五を兩天と云ひ、三を地中の天と云つて、これが、三天兩地の意味であります。

次に易に於て、「中正」といふ事を重んじるのは、第二爻目が內卦の中、第五爻目が外卦の中で、中には中庸の至德がありますから、之を中正といふのであります。そして易中此の二爻と五爻とを特に貴重なものとするのは、反合の力の最も強く働く所であるからです。卽ち二爻と五爻が最も強い反と合の代表者なのです。中正の圖は次の通りです。

又易では、應ずるとか應じないとかいふのは、陰陽感應のことでありまして、辯證的に、正と反との作用が最も強く反應する事を云ふのであります。卽ち次の圖に於て、初と四、二と五、三と上とは、陰陽各々相應じてゐますが、若し、左の圖に於いて、第四爻目の位に陽爻があるか、初爻目に陰爻があれば、初と四とは、陽と陽、陰と陰となつて互に相應じないのです。卽ち正反の作用が感じ合はないのです。

又、易で、比といふのは親比、卽ち親しく交る義でありまして、比隣の意で、隣同志の正反が相和する事であります。それでたとへ陰陽の位には當つてゐなくても、陰爻と陽爻とが相隣合ふ時には、必ず相親比して、互に相輔けるのであります。卽ち比は陰と陽と隣り合つて、親しく交り、互に正反の辯證の形成に參與するのです。陽と陽、陰と陰とは相親比しないのは勿論です。

次に、「互卦」「約象」といふのは、どういふ事かといふと、右圖のやうに、二、三、四爻の三畫を互卦と云ひ（右圖では互卦は兌（澤）です）又三、四、五爻の三畫を約象と云ひます（右圖では約象は震（雷）です）。これは、上卦と下卦の境を中心に上下に三つづつ組合せて、上卦と下卦との聯絡關係を觀るのに必要な概念であります。

其他、易の卦中で、最も强い合の爻は五爻目である事は前に言ひましたが、この五爻目が變じて、內卦と外卦の等しくなるやうな卦（たとへば火天大有の卦（䷍）のやうな卦が變じると䷀乾爲天となります。）は、究極的合、卽ち死を意味することになるので、歸魂の卦と申します（天火同人、雷澤歸妹、澤雷隨、山風蠱、風山漸、地水師、水地比の八卦）。

又、歸魂の卦の內卦を變じたもの（例へば、火天大有䷍を變じて、䷢火地晉となつた場合）を遊魂の卦といひます。これは、反の最も强い卦ですから、迷妄、特に、靈の迷妄を意味するのです（火地晉、天水訟、雷山小過、澤風大過、山雷頤、風澤中孚、地火明夷、水天需の八卦）。

其他の純學問的記述と辯證法其物に就いての精細な論述は總べて「大東新易」に讓つて、本書は實用を主として、直ちに、易の各卦と其の爻の解義にうつります。易の卦は八卦ありますが、この八卦が更に正反正反正反と對立して六十四卦となり、その各々に、六爻づつの變化が附隨するのであります。

そして、その意味の辯證的解說にあたつても、正反合の三形式を執ります。

卽ち、その卦の意義本質を論じたものが彖（正）であり、その象への適用を說いたのが象（反）であり、彖と象を綜合して實際問題へ適用したのが占であります。

本書は、易に正しく入門せしめる目的をもつて書かれるものですから、この內、正の立場にある彖の解說を主として象を附加し、占の精神なる記述は、之を「大東新易」に讓りましたが、讀者が、自己の精神生活の進路を定め、正しい鬪運生活に入るためには、易盤を用ゐて、本書の解說によつて斷ずるのが最も良ろしいのでありまして、占を先にした易書は却つて讀者を害し、その易への正しき憧憬を崩すのでありますから、本書はあく迄鬪運

の書なる事を考へて、占を略した事の意味をよく了解せねばなりまん。

三易解釋

☰☰乾爲天　乾は天で純陽を顯し、性は至剛、德は至健、體は圓滿であります。乾は大陽、大、始、正、剛、西北、肺臟に通じ、天の德によつて、萬物が生じ、萬事が通じ、各各正位を得るのです。天は君であり、父であり、夫であり、仁であり、禮であり、義であり、智であります。君、父、夫は、仁義禮智によつてその終を全くすべく、剛健進取に過ぎて、他の柔弱を侮つてはなりません。特に貞を守るべき卦です。

この乾の元こそ最も大なる元であります。天を統べては、雲を浮べ、或は雨を施して萬物を養ひ、その形を整へるのです。この道に從ふ時人もその生命を正し、大いなる和合を保合し得るのです。

天の行くや健にして大、いつまでも止む事がありません。人間もこのやうに終生勉學して怠らなければ乾德を全くしたと云ふものです。

初九（この爻を得ましたら、一番下の ― を ⁚ に變へた卦を見、更に、その初爻を見て下さい。以下二爻、三爻、四爻、五爻、上爻共同樣。又他の卦に於ても同樣です。）

九は陽爻を表はす符號です。初九とは陽の初爻です。九二となれば陽の二爻の事です。

九三は同じく三爻で以下同樣です。一番上の爻は上九と云ひます。陰の時は、初爻を初六と云ひ、二爻を六二と云ひ、三爻を六三と云ひ、以下之に準じて、一番上は上六と云ひます。爻の意味をとくのは、卦で全體の意味を說いたので、その內の各爻が、全體に對して如何なる意味を持つか、又、占した場合に、爻が皆異りますから、その占した事の狀態を更に詳しく示すため、及び占した事の裏の意味を示す、變爻を求める基準になる處です。

さて、乾爲天の初九は、天禀の才德を有して、能く變通する人に象つてゐます。丁度龍が未だ地に潛んで、其の時を得ない形で、急いで事をなさず、時運を待てば宜しい。

九二　時運一變して、龍は愈々地上に現れる形です。丁度地の利も得てゐます。進んで目上の賢者の敎を受けて發達すべき時です。

九三　君子の才德は遂に顯れました。衆人は將に歸服せんとしてゐます。諸事に愼重な態度をとつて、晝夜勉勵すれば危地にあつても、危きを變じて平安を得ます。

九四　未だ疑つて、進退が決せず、進まんか退かんかと躊躇するかも知れないが、天に順ひ人に應じて事をなすならば、諸事進んで良ろしい。

九五　龍は遂に飛躍して天に昇りました。その惠澤は萬物に及び、人皆親しみ樂むやうになりました。全く應爻である九二の德に從つた結果です。

上九は、陽の上爻の事で、此の爻は乾の卦の極にあつて最早進むべき處がありません。龍は遂に天を突いて行く處を極め、遂に後悔する事があるに到るのです。萬事盈つれば虧ける事があるのは當然です。

用九（用九は易の六十四卦における陽の爻を用ひる際の心得を言つたもので、占筮して陽爻を得た時には、この心得を忘れてはならぬ意味）

龍とは陽の象であります。龍は、各々雲を起し雨を呼んで活躍しますから、人に於ても賢人才人が集合して事をなす際には、互に頭角を顯はして、その才を爭ひ、紛紜を釀して遂に衝突するやうな事があつてはなりません。全て順德を守つて、謹愼し、人には仕へて頭とならず、常に謙遜でなければなりません。

☷☷坤爲地　坤は乾に相對し、地であり陰であります。地の性は至つて柔で、その德は順、その體は安靜であります。坤は地球、小人、妻、西南、夏秋の間、胃腸等の意があります。地の坤は天の乾に順つて、萬物を生み生ずるものですから、乾と同樣に元いに亨り、貞であるのが利しいのですが、その貞はあく迄陰性の貞であります。事に臨んでは、君、父、夫につき順つて行けば過ち無くて濟みます。西南の象である小人の方に行かず、東北の象である君子の方に、德義の事に赴くのが宜しい。そして日を積み、年を累ねて、終始その德を易へず、一定の處に樂んで止まりながら、その終りを全うすれば、地の疆ないやうに德を傳へるでありませう。

地は又、物のうちで最も厚いもので、よく萬物を載せて、忍耐力、自然力の象であります。地はかく力强い勢を持つてゐますから、富士山でも玉石でも皆自分の上に載せて動ずる事のないやうに、求道の君子は、智愚賢不肖を悉く包容して、その重任に耐へながら、天命に從つて、其の職を守つて、その身を修めるべきであります。

初六（九が陽の符號であるに對して、六は陰を表す符號です。初六は陰の初爻の事です。）陰が始めて凝つた時は、微かで消え易い霜のやうなものですが、その陰が重なり生長すれば、堅氷のやうな確固たるものになりますから、人も始めて霜を踏む時に、豫め之を察して、將來の事を考へ恐れ愼まねばなりません。

六二　此の爻は、陰でもつて陰の位にあるのですから、その位に當つてゐます。それで地道の德を總べて備へて、正直、無邪氣で、品行方正で、常道を守り功德は甚だ廣大です。それでこの中正、方正、廣大の德によつて習はずして道に適ひ、規格に違ひません。

六三　此の爻は、才能のあるものがその才を現はさぬ形で、たとへ才能器量があつても其れを誇るやうなことがなく、つねに、その道を守つて誠實を盡し、時の來るのを待つて、一度時期が到來すれば、始めてその才を發揮し、自ら事に當つてそれを完成する事は出來なくつても、必ず後人に繼續、成就させるやうにするのです。かくて進退の時宜を失はないならば、知識光大の人となるのであります。

六四　囊の口を括るやうに、默々として隱忍自重して、その愚を守りますならば、譽れもない代りに咎めもなく、災害から遠ざかる事が出來ます。

六五　この爻の定位は、所謂天子の位で、陽爻の居るべき處です。そこでこの六五はその位に當つてゐないのです。ですから、才能があつても之を顯はさないで、よく順德を守りますならば、吉を得る事が出來るのであります。

上六　此の爻は、全陰が坤の最終に居る形で、陰の力が盛大を極め、遂に陽を凌がんとする時であります。天地の陰陽が互に戰つて、爭ふならば、甚だしい傷害を蒙り、勢極まつて始めて止む象となります。注意を要する形です。

用六　（乾の用九が陽爻を得た時の心得を說いたものであつたのに對して、この用六は、陰の爻を用ひる時の心得を說いたものであります。）

陰は人に於ては、臣であり妻でありますから、柔順貞正にして、永久にその志を變へず、大にその貞德を守るならば、その終りを全うし得るのであります。

䷧水雷屯　この卦は萬物を發育鼓動する震雷（生氣）が、凍氷凝結する坎水の下に止つて伸び難んでゐる象であります（屯の意）。

前途に危險のある象ですから、妄りに進めばその內に陷ります。正に行かんとして行く事の出來ぬ時ですから、寧ろ國に天子の命を受けて、封土を宰領する候があるやうに、代人をもつて治めさせた方が宜しい。そして自分はよくその辛苦に耐へ、受難を解脫して後始めてその志が享るのです。この卦は、乾坤の卦の次にあつて、天地の剛柔が始めて交はり、難みを生じて進み難い時の象ですが、險難の內に希望があり、奮動する生氣と陽氣は、萬物を潤澤する陰氣と相親み、相助けて、大いなる融合をなさんとしてゐるのであります。今は夜明け前の暗さです。未だ黎明の鐘のならぬ創業の時です。自分も代人も共に安らかに遊び樂しむ事は出來ませんが、經綸を盛んにして時を待つべきであります。

初九　屯は、創業艱難の時ですから、輕々しく動いてはなりません。大盤石のやうに、正しい處に坐つて動かないのが宜しいけれども、此の初爻は震の卦の主爻で、賢人の象ですから、只動かぬ儘に終るのではなく、正しい事を行ふ志があります。そして陽爻であり

ながら陰爻の下にゐるのは、貴い身をもつて賤しきに下つて謙遜してゐる象ですから、民の人望を得るのであります。

六二　この爻は、進み難み、行つては歸り、進退決せざる形であります。初九の陽爻は、後の六四の陰爻と相應じてゐるのですが、卦全體が屯、卽ち止り難む意ですから、比爻にあたるこの六二の爻に作用して來まして、一緒に綜合作用を起さうとするのです。しかし正應の婚でなければしてはいけないのですから、節を守つて、正應の爻である九五の爻に應じて行かねばなりません。これが、迷から常道に復する道であります。

六三　この爻は、丁度、鹿を追つて行く時に土地の案內人がないときは、唯林の中に無暗と踏み迷つて行く象ですから、强ひて進んで名を恥かしめ、身を亡すやうな事がないやうに注意せねばなりません。

六四　この爻は丁度、馬に乘つて進まんとしながら、進退が決しないで行き惑つてゐる形ですが、この爻は陰で、應爻にあたる初九とは位も相應じてゐますから、初九から求めるやうな狀態です。ですから斷然行を進めた方が宜しい。先方が求めると云ふのは、先方は明かに、此方の事を認め知つてゐるのです。かかる場合こそこちらの力を充分發揮する事も出來、志を遂げる事も出來るのです。

九五　この爻は、丁度、膏が一個所に固つて全體に行き亙らぬやうな形です。卽ち今こそ受難の時なのです。功はあつても賞する事が出來ず、勞はあつても報ひる事が出來ず、小事なら宜しいが、大事を處理すれば志を達し難い場合です。

上六　この爻は、丁度、馬に乘つて出かけたのは良いが、そのまま行方に迷つてしまつて、遂には寂しく悲しくなつて、泣き出してしまひ、しまひには、涙つきて血を流すに到ると云ふやうな悲慘な形ですが、悲の極まる時こそ、喜の黎明の近い時です。「冬來なば春遠からじ。」耐へて耐へて待つならば、漸く幸運の光が來りつつあります。

䷃山水蒙　この卦は、山下に水のある象です。山は上にあつても、その麓に水氣濛濛と立つて覆ひ、暗くて見る事の出來ぬ形です。しかし屯の時に侯を立てたやうに、蒙の時には教師を立てて教育に力を盡せば遂には亨るのであります。しかし師を立てても、それは、湧き上る稚い力が教育を求める誠心を受け入れて、これを教導するのですから、稚い力しかない者、卽ち童蒙の者は、丁度筮によつて神意を承る時のやうに、至誠至敬の念をもつてこの教育を受けねばなりません。又丁度筮を再三試みる時には、天は最早その意を告げないやうに、疑を抱き、誠を失つて師に對してはなりません。しかし誠心誠意師に從つて心を正し身を育てて行くならば、漸次その間に流通が起つて、險を破り易に從つて、

遂に大海に到る事が出來ます。又山に草木がよく養はれるやうに、よく養はれ終つて大をなす事が出來ます。求道の君子はこの象のやうに、行を果し遂げ、德を養ひ終つて大成を期さねばなりません。

初六　蒙昧不良の者を啓發しますには、時には刑罰を設けて、畏れさせると同時に、これに充分教育を施さねばなりません。そして惡人が、その罪を知り、過を改め、良心の芽を出して來ましたならば、桎梏の戒はこれを解いて、寛恕すべきであります。この際もし嚴格過ぎると、却つて反抗心を起させて、その惡心を激化することになります。人を刑するのは、其の人を惡むからでなく、只法を正しくするのが目的なのです。

九二　この爻には剛中の德がある形ですから、剛明中和の才德を持つてゐる象となります。そして、蒙昧な者や、曉し難い婦人を包容してよく導きます。親子兄弟の場合で言へば、よく父に仕へ、弟妹を統べて、家業を治める事が出來ます。この象は正しく、剛に過ぎず、寛に流れず、能く中和を得た形であります。

六三　此の爻は、陰柔の體であり乍ら、坎の卦の險の中にゐる形になつてゐますために、不貞の女子にたとへられます、丁度不貞の婦が、正應の夫を捨てて、近比な金のある男に從はうとしてゐるやうな形です。かかる不貞の女を娶つたら禍を見る事は必然ですから、

かかる場合には充分注意する必要があります。

六四　此の爻は、陰であつて、陰の正位にゐますが、その陰が弱く、又、六三の爻と六五の爻(共に陰)の二陰爻の間に陷つて、宛も、實意のある師友の助けがない場合、自然と道から遠ざかり自分で招いた災の困苦に耐へ得ないで、いやしい行をするやうな形です。

六五　此の爻は柔中で、五爻の尊位に居まして、下の九二の爻と應じてゐます。丁度幼主がその師を尊んで敬事してゐるやうな形です。かく柔順に師に從つてゐる場合には吉なる事は當然です。

上九　蒙を容れる事が出來ない場合には、之を譴責制裁する事も宜しいが、嚴格に過ぎると、物解りの惡い者丈に却つてその師を仇敵視するやうな事があります。ですから物解りの惡い、蒙な人を導くには、寛嚴宜しきを得るやうにして、蒙な人の心に敵慨心や反抗心を起さぬやうに、豫め禦いでおくが宜しい。

䷃水天需　需は暫く控へて待つといふ意です。この卦は、丁度坎の水氣が蒸發して天に上つてしまつたやうな狀態です。水天に凝つて雲となり、雲天に昇つて留る時は、遠からずして雨降るのは當然で、人々がその滋雨をあこがれ待つてゐる形であります。この卦の外卦は坎で、この場合は一種の險い形ですが、內卦は全陽の天ですから、剛健從容、一

寸も焦らず、固く己を守つて險難の解けるのを待つてゐる形ですから、遂に危險に陷らず、又自ら困窮する事もありません。かくて危險は自然と融けて、希望は遂に達成せられるのです。丁度、洪水が退くのを待つて、大川を渉るやうに、思つたよりもずつと容易に、大功を奏するのであります。この卦に所謂需は、天上に在る雲が、雨となるのを待つ象ですから、求道の君子はかかる形勢に際しては、悠々自適、水を飲み食を樂んで身を養ひ、或は清宴を樂んで心を養ひ、時運の來るのを待つが宜しい。

初九　外卦の坎は水であつて又險の形です。ですから、たとへば洪水のある時は、その危險から遠く離れた偏鄙の地に控へて、冒進しないやうに、心を變へず、節を曲げず、時機の到るのを待つが宜しい。

九二　この爻は、初九の爻よりも一歩危險に近づいた處で待つ形ですから、多少の危險を伴ひますから、一層冒進を愼んで終を全ふしなければなりません。但し危險をあらはす水は未だ溢れず、兩岸に溢れた儘悠々と流れてゐるといふやうな形勢です。

九三　この爻は、前二爻よりも更に坎難に接近した形で、險難が今眼前にある象であります。しかし此は自ら求めて、その危ふい處へ冒進した形なのですから、自分で愼んでその難を避ける事が出來ます。坎難の方から進んで來たのではないのです。

九四　この爻は、遂に、坎險殺傷の地に入り込んで、敵に傷けられる形ですが、自分で及ばない事を悟つて、上長の訓誨に從つて退けば、漸く危難を危れる事が出來ます。

九五　この爻は、第五爻の尊位にあるのですけれども、卦全體の象が需ですから、むしろ、自ら樂んで、時を待つべきでありますが、酒食にふけつて荒廢に傾いてはいけません。貞正を守れば始めて吉であります。

上六　この爻は、外卦の終で、最早出て行く可き處がなく、穴にでも入る他ありません。卽ち坎險の極ですが、かうなれば、最早難の去る時は却つて近いのです。この爻はだから陰の立場、受身の形で、柔順、至誠を以て事にあたれば、剛暴なものも妄りに侵す事が出來ませんから、終には吉となるのです。

☵☰天水訟（訟はうつたへで互に曲直を爭ふ事）　此の卦は外卦は天で上る形であり、內卦は水で下る形です。かくて互に相背く故に訟となるのです。訟といふ事は、各々自分の方に道理があると思つて之をするものですが、結果に於ては、却つて自分自身を辱かしめる事が往々あるのです。ですから、程々の處で、思ひ止まればよろしいが、最後迄我を張れば必ず凶であります。ですから英明中正な先輩大人にその是非得失を聽いて、速に止めるべき訟は止めるのが良く、その天理を惕れて、直に中止するが宜しい。危險があつても

いいと言つて強ひて冒進するやうな事があつてはなりません。訟は風波のある時です。愼みを破つて、大川を渉るやうな事をしたならば、溺れて失敗憂患の内に沈んでしまひます。ですから求道の君子は、事を爲すに當つては、最初の時によく事理を考察して、總べてを誤らぬやうにしなければなりません（遊魂の卦）。

初六　訟の小さいやうな事、例へば事を構へる程度の事も、不利である事を知つて、之を止めてしまへば、小さな傷害は蒙つても、却つて大局に於て、終を全うし得るのです。

九二　此の爻は陽であります。形は、初爻と次の三爻との陰を突いて、外卦の主爻を訟へる形です。しかし上を訟へるのは自然の理にもとつてゐます。そして進んで自ら患を招く事にもなるのですから、早く覺つて訴へを止めて歸るならば、連帶の人々も亦禍がなくて濟むのであります。

九三　此の爻も亦、その形は、前の九二に激されて、訟の方へ傾いてゐるのですが、その非を覺つて、再び、舊に還つた形です。けれど一時でも上に背いたために、謙讓を旨としてゐても危いのですから、飽く迄其の分を守り通し、長上の忠言に從つてゐるならば、終には吉を得る形です。

九四　此の爻も、形は、内卦の三爻と共に、上を訟へやうとしたのでありますが、その非を覺つて、訟を見合はせ、復て上の命に順ひ、訟へやうとした心を變へて、貞正に安んじましたならば、終りを全うし得るといふ形です。

九五　此の爻は、五爻の尊位にゐて、中正剛明をもつて、是非曲直を裁く形です。訟へる者にとつてはこの上もなく吉なる形です。

上九　機詐を以て強ひて訟に勝つて、尙其上に賞を貰ふやうな形ですが、始めは勝つても直ぐに取り返されてしまひます。訟によつて賞を得て、それを着飾つていくら威嚴を示さうとしても誰もそれを敬ふやうな事はありません。

☵☷地水師　地は水の潤ひによつて萬物を生育するものであります。地と水とは、元來相親むべき性質のものですが、此處では、地と水との位置が、逆になつて、水が地の下にありますから、各々正位を失つて、相背き戰爭となる形があります（師は軍の事）。

しかし、師を妄りに起してはならないので、正義道義のため已むなき場合にのみ之を起さねばなりません。又師を師ゐる者は、知仁勇を兼備した人でなければ、よく衆を帥ゐて、危險に赴き、天理の正道に從つて行く事は出來ません。かかる人が師を帥ゐて行つてこそ民も亦進んでその命に從ふのです。そこでかかる指導者は、天地の無疆であるやうに自分の德を大にし、又、大地が水を容れるやうに民意を容れ、又水の潤澤によつて地上の萬物

の生育するやうに、民を養はねばなりません。

初六　師を起して愈々危地に赴く時には、その最初に於て規律を嚴にせねばなりませんん、若し規律が弛んだならば、いかに正義の師でも、敗北しなければならなくなります。

六二　この爻は、軍陣中にあつて中道を得、度々君の寵遇を受けて命を給はり、必ず勝を奏して、民を安んじ國を康んぜんとする形です。吉にして咎なき形。

六三　この爻は陰の爻でありますが、陽の位にゐます。ですから氣力があつても才力がなく、進まんとしても應ずる者がなく、退いても守る力なく、師が破れて、多くの戰死者を車に載せて歸り、功を立てることが出來難い形です。

六四　此の爻は陰柔の形で、志弱くて敵を制し得ず、退いて却つて咎の無い形です。しかし自分で破れたのではなく、功名手柄はなくとも、過失もなく、常態を保ちうる形です。

六五　この爻は賊が來て害をなす時に、これを討つために師を起す形ですが、この爻は、五爻の尊位に居て、しかも陰の爻で柔をあらはしますから、自分で征討にはあたらず將師を用ゐ、命令を下した方が宜しい。しかもその將師には老練の適任者を選ばねばなりません。若し血氣の定まらないやうな未熟の弟子を用ゐますれば、必ず軍に破れ、死屍を輿つて歸るやうな形です。

上六　師が終つたので、國を開いて、新に諸侯を封じ、或は加增をしたり、祿を加へて、家名を興させ、その功を賞する形ですが、假令功勞があつても、小人には一時の恩賞に止め、決して高位に小人を用ゐてはなりません。小人を用ゐると必ず國を亂す因となります。

䷇水地比　比は相比ぶ象で、比べば親しみ、親しめば樂むやうになります。この卦は丁度水と地が和合する形です。しかし乍ら、親しんでよい人と惡い人とを選ぶのには豫めその人をよく觀察し、又易によつて神意を聽き、根元的な意味に於て、永久的に、貞しい人を選ばねばなりません。かくの如く人を選んで交り親しめば、自ら安んじてゐない者は、皆交りを求めて來るやうになりますが、かかる君子の居るのを知りつつ、自ら孤立に甘じ。時機を失してから、君子に交りを求めて行く者は、その道窮つて凶となります。それで昔の聖天子は地上に水のある象に則つて、水が方圓の器に應じて變化しつつ又合して一となるやうに、臣をよく選んで諸侯に建て、之を王室の藩屏として相親しむと共に、水の潤澤が地上の萬物を生育するやうに、民を養つて行き、又水の平かであるやうに法律を公平にし、そして國利民福を得たのであります。

初六　誠心をもつて交り、質朴正直で虛飾なく、其の誠意を充たす事は、恰も、酒を土器に盛るごとくであるならば、きつと、思ひの外の幸福を得る形です。

六二　交りを結ぶ際には、表面の行爲丈でせず、中心の誠をもつてして、自ら失ふやうな事がなければ、必ず吉となります。

六三　此の爻は内卦の終にあつて、陽の爻のあるべきところですが、ここには陰の爻があります。又その應爻の上爻は小人にあたりますから、小人に交を強ひられてゐる傷ましい形です。

六四　此の爻は、次の九五と陰陽親比してゐまして、五爻を王とすれば、此爻は大臣にあたる象です。しかも次の五爻(君にあたる)は陽位を得て、賢君の形ですから、この爻は、進んで賢君に從つて忠誠を竭せば吉を得る形であります。

六五　五爻は屢々云ふやうに尊位であります。この爻は、盛德の明君が、大いに親比和順の道を明かにして、寛仁よく民に親しむ象であります。しかも强ひて自分に服從させるのではなくて、去る者は之を追はず、來る者は之を拒まずと云ふ形です。かくて明君の仁德は四海に滿ちて、天下は平安で、自己に害を加へる者もなく、又民も用心警戒の氣苦勞の無い形であります。

上六　此の爻は比の卦の最後の爻であつて、常に己を是とし、人を非として孤立する形で、主を求めて得ず、進んで親しい者を得やうとしても、受け入れてくれる處がなく、遂に終を全ふし得ない形です。

䷈風天小畜　畜は貯へ養ふ意と共に止める意。此の卦は六爻の中に唯一陰があつて他の五陽を止めてゐますから、小畜と名付けたのです。(小蓄は大蓄に對し、大は陽、小は陰の義)。此の卦はかくて一時畜まる事があつても、二爻五爻は何れも陽の中位を得てゐますから、其の志行はれ、一時止まることがあつても、終には亨通するのであります。又この卦は風が天上にあるため、地の水氣昇上して雲となり雨を降らさうとしても、風のために遮られて、冷氣に遇ふ事が出來ず、雨とはなり難い形ですが、しかも遂に時が來れば、雨とならねばならぬ必然の勢を示してゐます。そこで之を人事に就いて言へば、君子が世に立つても、未だ道の世に行はれない時である事を悟つて、文を修め德を積んで、その行はれる時となるのを待つべきであります。

初九　進むに時の到つていない事を知つて、中途から引き返し、正道を守つて止まつた形です。即ち機を知り害を避け、己の身を辱しめないものですから吉の形です。

九二　既に道を過らうとした時、明友(初九)に牽かれて、進むの不可である事を覺つて、正しい處に立歸り、中正を守り、自ら度を失ふやうな事のない形で吉象です。

九三　この爻は陽爻で陽位にゐて、また内卦の終に居て、その位は中を超え、剛に過ぎ、

自ら守る事が出來ないで猛進し、忽ち次の四爻の陰に止められてゐる形です。車の心棒の外れたやうなもので動きがとれません。又人にたとへれば、夫妻が一家中で反目してゐる形ですから家を正す事が出來ません。

六四　此の爻は、陰でありながら、前の五爻の陽を一つで止めた形ですから、危險な形ですが、誠心一貫すれば、遂には傷害に遠ざかり、危懼を免れ得る形です。そしてその誠心は上（次の五爻を意味します）に通じ、上も亦之に志を合す形です。

九五　この爻は、誠心ある前の四爻をよく用ゐて、それによつて富み、上下互に誠をもつて互に富ましあふ形です。

上九　今迄の密雲は遂に雨となつて、陰陽相和して、各々、其の所を得て止まつた形です。卽ち自己の職責を終へ、その德は積んで車に載せる程、大きな恩澤となりましたが、あまりに盛大になり過ぎて、九五の尊位とどちらが尊いか解らぬ程になつたのですから、たとへ君子でも之以上進めば、凶であります。

☱☰天澤履（履は足を載せるもので、人の履み行ふ禮儀の意に通じます。）この卦は天は上の高きにあり、澤は下の低きにあつて、上下尊卑の分が正しい故に履と名付けたのであります。そして乾の剛健な老父が前に進み、兌の柔弱な少女が、その後に從ふ象であります。少女のやうな柔順な態度で、虎の尾を履むやうに畏懼して、强剛の者に對しますならば、如何に猛烈な者でも、我に害を加へる事が出來ないで、却つて我に應じて、遂に事を成就し得るのであります。またこの少女のやうに柔弱な者を從へた剛健中正な者は（第五爻が陽爻で尊位にあつて、その位が當つてゐるのでそれを指します）高位に就いて、しかも心に疚しい處が無いのは、その德が光明だからです。そこで此の履の卦が、天を上にし澤を下にして、高低上下の等位が分明でありますやうに、君子は上下尊卑の分を明かにして、民の志を定めて、各々其の分に安んずるようにすると共に、禮制を正しくすべきであります。

初九　己が性質を飾り無く其の儘に行つて間違ひの無い形です。この爻は陽であつて、陽の爻に居りますから、正しい道を守り、獨り志す處を行ふ形です。

九二　この爻は、慾や憂を離れて中正に止まり、自ら亂れず、平坦な道路を行くやうに道を履み行ふ形です。

六三　この爻は陰であり乍ら陽位に居て、志のみ剛であつても、陰柔不中正で、禍を蒙る形です。眇はいくら一生懸命見ても常人に及ばず、跛はいくら歩いて見ても常人のやうに行きません。これを忘れて、進んで事をなすのは虎の尾を踏んで、喰ひつかれるやうな

ものです。

九四　この爻は、陽爻でありながら陰位に居ますから、志は弱いけれど、才の強いために、危險の目前にある事を察して、虎の尾を履まぬやうに用心すれば、遂に志の行はれる形です。

九五　この爻は剛健中正で、五爻の尊位にあつて、決斷心強く進んで行く形ですが、剛明武威を誇つて行けば、稍もすれば猛斷し易いのですから、たとへ貞であつても厲い事に注意せねばならぬ形です。

上九　此の爻は離の卦の終にあつて、己の行つてきた跡を見て、その禍福の因つて來た原を考へ、進み過ぎの傾があれば、立ち返るやうにして進めば大いに幸慶を得る形です。

☷☰地天泰　此の卦は、天が下にあり、地が上にあつて、一見しますと上下顚倒してゐるやうでありますが、これはその作用から考へて頂きたいのです。又辯證の順序から見て下さい。天は上り、地は下り、ここに上下和合、萬物亨通してよく生育安泰を得る形なのです。ですから君子の道が行はれ、小人の道が衰へた意ともなり、又君は、天地が相交つて萬物を化育するのを輔けるやうに、民を導いて、手を引くやうにして育てねばなりません。

初九　一本の茅を拔けば根の連なる他の茅も同時に拔けるやうに、一陽が進めば他の二陽も亦之と共に進むと云つた形が、この爻の形です。又上から用ゐられて志を遂げ得る形でもあります。

九二　この爻は、荒野の細民をも包容し、泰平の世ではあつても時流に溺れず、果斷の心があり、更に遠い昔の事を忘れず、私情に捉はれず、公平にして中道を得られる、智德明大の象であります。

九三　此の爻は泰平が永く續くと倦み易くなりますが、しかも苦しみつゝも忍耐して正道を行つて、誠をもつて一貫すれば、咎なく、又禍が終つて幸を得る形です。

六四　翩々と鳥の大空を行くが如く、己を虛しふして自ら富まず、又進んで他を戒める事はありませんが、謙虛をもつて下に接し、中心に誠をもつて安泰を得る形です（外卦の三爻は皆陰であつて、下位に居るべきものが上位に行つてゐます）。

六五　此の爻は陰爻であり乍ら、五爻の尊位に居ます。これは、心を虛しふして下位の賢者を用ゐ、願ふ處を行つて、泰平を保つ形です（應爻の九二は賢人にあたり、この賢人が六五の君を輔け、また君は之に皇妹を歸がせて之に酬ひて大に吉を得るやうな形です）。

上六　此の爻は泰の卦の終にあつて、丁度泰の時が終つて、次の否に移らうとしてゐる

時であります。だから城廓が崩れて、水の渇れた濠となり、反亂が起つてゐるのに兵を用ゐる事の出來ない形です。命令が上から出ずに下々の位の低い者から出てゐるやうな形になつてゐますから、人心の離散、命令の不徹底の象です。

䷋天地否（否は塞り通ぜない意）此の卦は天が上にあり、地はその下にあるため、陽は上り陰は下つて其の作用相反く形です。國でいへば、上は下を苛酷にし、民間の疾苦を顧みず、庶民は上に順應しないといつた形です。

君子はかかる無道亂世の形勢に處しては、其の德を納め隱して小人の難を避け、利を棄てゝ爵祿を遠去からねばなりません。若し仁德が大いに現れるやうなことがあれば、庶民はかかる者を物色して爵祿を持つて來るでせうが、かかる混亂した形勢の下に爵祿を得る事は、禍を受けるのと同じであります。

初六　此の爻は、陰であり乍ら第四爻の陽と相應じて、志を君から承けつぐ意がありますが、今は否の時でありますから、貞正で自ら誡を守るならば、吉を得て亨る意があります。

六二　小人は、柔順にして上に事へると、一時は吉を得る事が出來ますが、この卦の形は小人の道がはびこつて、君子の道が塞がつてゐる形なのですから、大人君子は妄に小人の群に投じて却つて之を亂さぬやうにして、時の至るのを待たねばなりません。時が來れば自然と亨通する事が出來ます。

六三　此の爻は陰柔であつて、陽の位に居ます。そして內卦の終に居て、將に外卦陽剛の君子に接近しやうとしてゐる形ですから、その非を羞ぢ、しかも羞を包んで隱してゐる形であります。

九四　此の爻に到つて、今や否の時も漸く半を過ぎた形で、己が志が行はれ、而も、その福祉が、自分丈ではなく、ひろく他にも及ぶ形です。

九五　此の爻は陽であつて剛健であり、またその位は中正で且五爻の尊位に居るのですから、たとへ暫くは否運を止める事が出來やうとも、否の時が終つたわけではなくて細い弱い桑で、否運の屋を支へてゐるやうなものですから、復否に還らぬやう注意を要しますが、しかし大人君子は中正で尊位に坐してゐる形故如何なる困難にも打ち勝つて吉を得る形です。

上九　此の爻は陽剛の才をもつて、否の卦の終に居るのですから、よく否の閉塞を打開して、安泰亨通を得る力がある形です。

䷌天火同人（同人は人と心を合せ志を同じふして事を成す意です）この卦は乾の天を

上にし、離の火を下にし、天も上り、火も上る形ですから、互に同人的、協力的作用をなす意です。そして內卦離の一陰は、柔であつて中正を得て、更に、外卦乾の中正の陽剛と應じてゐますから、一望限りない平原を見るやうに、公明で一點の隱す處もない上に、乾の剛健をもつてよく事を行ひます。かくて火の如く明かに、天の如く健かに、そしてその位を正しくして人と心を合せて、所謂君子の正を得ます。そして總べての人がこの君子の正に倣ふやうに、人の智愚剛柔に從つて、分類したり、綜合したりして、よくその種類に從つて導くやうにせねばなりません。

初九　門を出て、廣く人と交り、公平無私な態度で人に接しましたならば咎はありません。

六二　人と心を合せ、志を同じうする卦なのですから、此の爻のやうに同族の間、仲間同志丈で交るのは、誠を吝むもので、きつと悔があります。

九三　此の爻は陽であり乍ら、比爻六二の陰爻を侵さんとしてゐる形です。しかし六二には正應の九五があるため、之に應じませんから、九三は九五を討つ形に在ります。けれど九五は尊位にあつて剛健中正ですから正面から攻められないので、兵を叢の中にしのばせて、自分は高所から展望して傍觀の樣子でゐるのですが、要するに陰謀の形ですから、事は齟齬して何時になつても兵を擧げる事が出來ず、智謀を用ゐる事が出來ず、行く處を失ふやうな形です。

九四　此の爻は陽爻であり乍ら陰の位に居るので、不正の形となり九三の爻と同じやうに、六二の陰爻を侵さうとして進んで城塀迄上つて行つた形ですが、その上攻める事は出來ないので、遂に、不正は義に勝たぬ事を悟つて、人道の常則に復つて、危く凶を轉じて吉となつたといふ形です。

九五　この爻は、九三、九四に妨げられて、應爻の六二と遇ふ事が出來ず、始は悲嘆にくれてゐた形ですが、遂に兵を用ゐて、九三、九四を伐つて、二爻の陰と相見える事が出來て後には笑つて歡ぶ形です。

上九　此の爻は、同人の卦の終です。丁度荒れ果てた地で、人と志を同じうして事を成さうとしてゐるやうなもので、自己の誠意が通ぜず、未だ志を得難い形ではありますが、爭鬪の渦中からは遠く離れて累を及ぼされない位置になつてゐるので悔はありません。

䷍火天大有（大有はその大を保つ意です。）

これは乾の天の上に離の日がある卦で、日輪天上にあつて萬物を照らし、總べてを繁榮させて、その大をなしその成を保つ形です。外卦離の一陰は尊位に居て、位も中正ですか

ら、内卦の乾天は之に相應じてゐます。故にその徳は剛健で天の如く、その象は文明で日の如く、天の時に應じて正道を行ひ、元いに亨る形です。これを人界にたとへると、君子は、天上の日が萬物を照らすやうに、公明正大に、善惡を別つて、天命に順ふやうにしなければならぬ意となります。

初九　此の爻は陽爻が陽位にゐるので、正を守つて害を退ける形ですから咎はありません。但、自分の剛正なことを驕れば却つて咎を招きます。

九二　此の爻は、五爻の尊位にある陰爻と相應じ、自分は陽で剛健ですから、大きな車に物を載せて尙餘裕綽々たる形で、重任に耐へる形です。

九三　大有の形にあつては、上の者は富を有してゐても、之を私しないで、天子に奉らねばならぬ時です。民の富は天恩の賜です。小人が之を私有して奉公の道を盡さねば害を招く形であります。

九四　此の爻は九五の尊位に次いで、自分は陽で剛健ですから、富貴權威が一身に集り、その勢は强盛ですが、驕慢に陷らないで、よく禮節を守り、光明正大の行をして咎無きを得る形です。

九五　此の爻は、尊位にあつて、しかも柔をもつて陽剛の間に居るのですから、危ふいやうに見えますけれども、心を虛しふして下位の賢人を用ゐる時は、よく人に信任され、寛容の内に威嚴が行はれて、吉となります。

上九　此の爻は、大有の卦の一番上にゐます。そして陽剛です。又尊位の上にあるのですから、丁度顧問といつた形です。だから天祐を得て福祉を有つことが出來る形です。

䷎地山謙（謙はへり下る意です）此の卦は艮の山が坤の地の下にある形で、丁度高い地位の者が謙遜して下位に下るやうな形です。しかし謙こそ徳の基であります。禮の始であります。之を妨げる者はなく、之に反く者はありません。かくて萬事亨通して後の憂もありません。その徳は愈々高く、その功は益々明かです。常に謙遜にすればする程、人は之を冒せないのです。謙は常に身を守つて終を完ふする道なのです。天が常に低いものを高くして平均をとるやうに、地も常に高いものを低くして平均をとるやうにし相共に平均作用を持つてゐますが、君子も亦、餘れるものを少いものにあたへて、政を、又行爲を平等にせねばなりません。

初六　此の爻は謙中の謙であります。例へば命に安んじて身を守る篤行の君子ですから、大川を涉るやうな危險を踏んで行ふことも謙の働によつて過失が少く、吉を保ち得る形です。

九二　此の爻は柔順で、位も中正を得てゐますから、中心的に謙讓で、その謙德は遠近に及んで、世を擧げて稱揚する形です。貞しく且吉を得た形です。

九三　此の爻は、謙の卦中唯一の陽爻でありまして、衆陰皆此に順ひ、萬民皆之に服する象であります。勿論さうなれば責任が重くて苦勞をせねばなりませんが、謙德によつて、人は皆之に服し、その終を全うして吉を得る形です。

九四　此の爻は位も正しく、謙中の善と云ふべき爻で、總べて利しい。しかし一面、柔が陰の位を得てゐるのですから、志とか才とかは弱い處がありますから、更に謙遜して能ある人に事を讓るのが宜しい。かくして始めて則に違はぬ事となるのです。

六五　此の爻は尊位に居ながら、よく謙德を旨として、左右によく謀つて事をする形ですから、衆は皆之に服して人の和を得た形です。若し之に服せぬものがあれば斷然討伐して、必ず勝ちます。

上九　この爻は、九三の爻が功を誇つて上の命を奉じないやうな場合には、六五の爻の命によつて、師を起し、應爻である九三の爻を止むなく征せなければならないといふ風な形であります。

䷏雷地豫（豫は悅び樂しむ意です）（又豫め備へる意）　この卦は震雷の作用が地の上に出てゐる象です。卽ち陽氣發動して、萬物生育し、天地に悅が滿ちた形です。又國に例へると萬民を悅樂させるためには、良い支配者を推して、民を撫育せねばなりません。かくて天下に和を得てをれば軍を起しても必ず勝ちます。更に、外卦震雷の一陽爻は剛健で、衆陰皆之に應じて、その志が行はれます。結局天地の道に從つて動いて始めて、愉悅を得るのです。天地は順を以て動いてゐます。日月の運行には誤がありません。ですから、聖人たる者は常に運用の妙を順によつて發揮して後刑罰すれば、民はよく服するのです。順なき刑には服しません。だから雷地豫の象ある時には、古代の聖王は樂を作つて德を崇め、上帝を祭つて之を奏し、祖先を崇んで之を捧げたのであります。

初六　此の爻は悅が外に溢れすぎて、分を忘れて安んずることを失ふと、志が窮つて凶となる形を示します。

六二　石上に更に限界を作つて、堅固にして動かない形です。豫の時であつても歡樂に溺れず、自ら貞しい道を守つて動かない形です。（此爻は中正の位にあります）。

六三　この爻は、不中正で、分に過ぎた富貴を得ようと羨望する形です。直にかかる過を改めないと悔があります。

九四　此の爻は、この卦中唯一の英明剛健の陽爻であります。この陽爻のお蔭で衆陰は

各々得る處があつて、悅び樂んでゐるのです。但、勢盛んな時は、疑を起し易いものですから疑を起さぬやうにせねばなりません。一本の簪によつて多くの髮の毛が括られてゐるやうに、衆陰が九四の德をしたつて集るのを括つてゐるやうな形です。志の大いに行はれる形です。

九五　此の爻は五爻の尊位にゐますが、自分は陰柔で、陽剛の九四の上に居るのは一度柔弱な君が側近の剛直な臣のため制せられて、佚遊にふける事が出來ないで苦惱してゐる形です。ですから未だ亡びなくても終を完ふし得ないおそれがあります。

上六　此の爻は陰柔であつて、豫の卦の終に居るのですから、今や豫の卦が終つてゐる形です。それで自ら非を覺つて改めるならば咎がないのです。

䷐澤雷隨（隨は隨ふ意）この卦は震の雷が兌の澤の下にある卦で、兌は季節にたとへると秋にあたり、萬物を鼓動作興させる生氣が澤中に潛む時で、陽剛の雷も時に隨つて陰柔の澤の下に下つて之に隨ふ形ですから隨と云つたのです。さて柔陰の下に陽が隨つて來れば、柔は之を悅んで、萬事好都合に亨通致します。しかし陽が貞正をもつて隨つて來、陰も亦貞正を悅ぶのでなければいけません。君子も時に隨つては潛む事がなければなりません。卽ち晝は勉勵して事に當り、夜は內に入つて樂しみ休むと云ふ風に時に從つて起居

を正しくせねばなりません。

初九　目上の權力が變るに從つて、固く守る事が大切な官でも、その守る處を變へる形ですが、變はるにしても貞正に從はねばなりません。そして人に隨ふには一方に偏せず、門を出でて廣く交を求めて、よく長短を見究めて正しい方に從つたならば、功を得る事が出來るのであります。

六二　此の爻は初九（小人卑近の者にあたる）に比親してゐる形ですが、この爻の正應は、九五の爻ですから、初九の爻に親比し過ぎると、正應の仁者を失ふ形になります。是に從つて非を失へば吉ですが、非に從へば是を失ひます。兩方共得るといふ事は出來ません。

六三　此の爻は六二の爻と反對に、大丈夫を得て、小人を失ふ形です。剛明高尙の上長に從つて、富貴功名を得る形ですが、權勢の者に從ふ時は、目下の者を顧みなくなつて、一方の立場を失ひますから、貞正を守つてゐないといけません。

九四　此の爻は陽剛であつて、九五の尊位に接近し、天下の人心を獲得して自分に隨はせて、勢が盛んで上を凌ぐ有樣です。此場合私恩を施して黨を結ぶやうな事があれば、貞正であつても凶となるのですが、常に誠意を持つて其の道を明かにして自分の功を計らな

かつたならば、誰も之を咎める者はありません。

九五　此の爻は正しく尊位に居るために、德を重んずる善人がよく自分に隨ひ、自分も亦その者に誠を盡してゐる形で吉であります。

上六　此の爻は隨の卦の最上位に居ます。卽ち柔順の德をもつて、上位に居て人に悅ばれる君子の形でありまして、尊位に居る九五は之を愛して止め、逃げるのを恐れて之を縛りつけやうとする形です。又その德の盛んであるのを用ゐて、王は之に天を祀らせるやうな仁德の最上を極めた形であります。

䷑山風蠱（蠱は穀類中の蟲の意、轉じて腐敗した內に生じた蟲が互に相食む意）此の卦は、物が腐敗して蟲を生ずるやうな場合には、必ず之を改革せねばならぬし、又それをなすには、師を起す三日前に用意を整へ、而も三日の後には功を收めてしまふ程、迅速でなければなりません。しかしかく迅速に功を收めるならば、蠱の敗壞を修理して、蟲の擾亂を復治させる事が出來ます。

君子は大いに民を賑はし、德を養つて蠱毒を振ひ落して、之を新生更生へ導かねばならないのです。蠱の時こそ大に奮ひ立たねばなりません。

初六　父の過の後を自分が引き繼いで司る形ですが、亡父の意を承いで、過は之を早速更め、更に正道を振興させるならば、亡父の咎もなく、自分も亦終には吉を得る事が出來るのであります。

九二　父が沒して母が主となり、陰柔のためにまだ弊の殘る形であつて、子がそれを諫めるべきではありますが、餘り烈しくすると却つて中道を失ひます。

九三　此の爻は蠱の積弊深く、父の蠱を正すにも小さな悔はありますが、この爻は陽剛の爻ですから、よく弊を改めて、終に咎無きを得る形です。

九四　父の蠱を（過を）改めることが出來ず、却つて其の弊害を增す形で、進んで事をやつて後悔することがあります。卽ち第四爻に至つて蠱は愈々深く、而も此の爻柔にして柔の位にゐますから、優柔不斷の形であります。

六五　父の蠱を正すのに此の爻は之を用ゐて譽のある形です。此の爻は柔中の德があつて尊位に居て、而も九二の陽と相應じ、また德を祖先に承けてよく蠱を改めることが出來る形です。

上九　この爻剛明の才があつて、外卦艮（山）の項上に居ります。これは蠱を救つて功成り名遂げて、退いて淸風高節を持してゐる形で、その德は高く、志は潔白で、後世まで手本となるやうな形です。

☷☱地澤臨（臨は希望の意。上から下に親しむ意）此の卦は坤の地が上にあつて、兌の澤が下に在つて、宛も地の底に水の浸み込むやうに、互に相臨んでゐますから臨と申します。

この卦は、初爻二爻の陽が時を得て長ずるに從つて、上の四陰爻に迫り、上の陰の爻も亦喜んで之に順つて、大いに亨通する形であります。之は又、年にすれば舊曆の十二月に相當する卦で、日毎に陽氣が加はつて來る形勢に向つてゐるのです。しかるに年を超えて翌年の舊八月になれば、卦は變じて風池觀となりますから凶となるのです。ですから此の卦の形のやうに盛運の時にも、將來の凶はあるのですから、よく愼んで貞正を守るやうにせねばなりません。君子はこの卦の象にならつて、地下に水が浸潤するやうに、德をもつて民を教育し、又地が水を容れる事無疆であるやうに、民を容れ人を容れて無限に保んじさせる覺悟がなければなりません。

初九　此の爻は、下は上の德に感じ、上は下の喜に感じ、互に相臨む形で、且此の爻は陽であつて陽の正位に居ますから、才强く志强く正しい行をする形ですから、あくまでその貞を守れば吉であります。

九二　此の爻も陽剛であつて、位は當つてゐませんが、尊位の陰爻と相應感臨してゐますから、大丈夫吉でありまして、且、將來起つて來る、此の卦の凶の暗示を未だ人運によつて良く支へてゐる形であります。

六三　此の爻は陰であつて陽の位に居まして、人に臨むのに甘言をもつてして、德をもつてしませんから、宜しくありません。けれども其の非を覺つて早く悔い改めましたならば悔無きを得るのであります。

六四　此の爻も亦陰柔でありますが位正しく、柔順の德を備へ、よく人に臨むで禮を盡し、下位の賢者に自ら下る形ですから咎がありません。

六五　この爻は人の智を用ゐて下に臨む形ですから、大君の道に適つてゐます。此の爻は陰であつて尊位に居ますから、九二の陽と陰陽相應ずる形であります。

上六　この爻は、人に臨んで情に親しく宜に厚ければ、吉であつて咎がありません。此の爻は臨の卦の外にありますが、陰であつて位が正しく、その志は內にあつて尊位に居る六五に盡す所のある形であります。

☴☴風地觀（觀は心に於て觀察する意）地上を吹く風は目に見えませんが物が觸れ動く事によつて間接に之を觀得るやうに、此の卦は、二陽が四陰の上にあつて、丁度英明の天子が天下の人心をよく觀てゐる象であります。そして天子が下を觀るには、諸侯が朝參し

て、諸事を言上するのを聽いて、それによつて知られるのでありますが、諸侯が朝參する度に、天子も誠をもつて之に接し酒を下されて、歡待されるのですが、その歡待は誠心誠意の歡待ですから、肴は添へてありません。先王は此の卦を見て、風が洽く地上に吹き渡るやうに、四方人心の向ふ處を省察して、民の風俗、心理を良く觀察して、敎を設け、政を施すやうにしたのであります。

初六　遠大の見識が無くて、童兒のやうに蒙昧な形ですから、小人には咎のない象ですが、君子にとつては卑しむべき形です。

六二　最も非禮の甚だしい窺ひ觀るやうな事をする形で、貞正を保つならば婦人には差支へありませんが、大人君子にとつては恥づべき形であります。此の爻は、陰であつて、位正しく五爻の陽と相應じ、また初六よりは一段、陽爻に接近してゐますが、未だ見識劣り、中正の大道を見る事の出來ぬ形です。

六三　自分の行や志を反省觀察して進退すれば、身を誤つたり時を失ふやうな事がなくて濟む形です。此の爻は前の六二よりも更に一段進んで、其の見識は六二の爻より稍〻優り、己を知る見識があつて道を失ふに到つてゐないのです。

六四　國の風俗敎化の良否を觀て、その政道の是非を知る形で、此の爻は陰であつて、位正しく、又尊位の五爻と隣接してゐますから、諸侯にあたり、王に賓客として好遇される形です。

九五　此の爻は中正であつて尊位に居て天子となつてゐる形故、自己の行ふ事は直ちに天下に影響します。ですから庶民の風俗を觀れば、丁度鏡を見るやうに、自分の行の是非を知ることが出來るのです。自己の生活を觀ることと、民の生活を觀る事とが一如になつてゐるのですから君子にとつては咎の無い形です。

上九　此の爻も亦陽で、觀の卦の上位に居ますから、識見尊貴で、英明の才德があつて、しかも尊位の後に居る故、天子の顧問といつた形で、君子にとつては咎がありません。但し、それが君子で無かつたら、その生活を觀て反省する場合、志が平安である事が出來ないやうな事があります。

䷔火雷噬嗑（噬嗑は嚙み合せる意）此の卦は、初爻と上爻を頤として、その間にある四つの爻の邪魔物を嚙み碎かうとしてゐるやうな形であります。之を人事にしますと刑罰によつて、果斷を以て惡を除く形となります。卽ち震雷と電光とが相合つて火を發し、その明光をもつて物を判別するやうにし、又齒を齒に合せて、嚙み碎くやうに罰を明かにし、法を正すべき形であります。

初九　枷によつて、歩行を禁ずるやうに、小人の自由を奪つて非を改めさせ、却つて大きな刑罰を免れさせるべき形です。この爻は陽であつて陽の位にありますから、妄進を戒めますならば、たとへ危ふくつても咎無き事を得るでありませう。

六二　此の爻が柔陰であるからと言つて、侮りますと柔かな肉を嚙み、自分の大切な鼻を傷けるやうに、自分の名譽を破る形です。卽ち此の爻は柔順中正でもつて、よく刑を裁きますから、誠心でもつて事を行へば、咎なきを得るのであります。

六三　小鳥をその儘乾し固めた腊肉の中にある毒を嚙んで、小吝を招く形です。卽ち此の爻は陰でもつて陽の位にゐるために一抹の不正があるのです。例へば獄を裁いた場合に、罪人が之に異議を挾むやうな事の喩であります。しかし結局は罪人が罪に服して自分は咎なきを得る形です。

六四　骨の付いた肉のやうな頑固なものを嚙み碎いて、始めてその美味を味へる如く、剛情な罪人を裁いて、心服させる形ですが、陽爻であつて陰の位にゐるために、中正を失ひ易い一面があります。充分貞正に氣をつけると利しい。

九五　乾した骨のない肉の如く、柔德があつて尊位に居りまして、獄を裁いて容易に人を心服させよく中庸を得るのですが、しかし陰でもつて陽の位にゐますから、尊位にゐ乍ら貞であつても一面危ふい點があります。しかし獄を裁くのに柔德をもつてする事は當を得てゐるのでありまして、咎なきを得る形であります。

上九　此の爻は不正の小人の形をもつて、獄の卦の極にゐるのですから、上を侮り、法を犯し、己自身が聰明でない爲に、遂に首枷にかかるやうな極刑を受けて、耳までも切られるやうな目にあふ形です。

☲☶山火賁（賁は湧き立つ、飾る等の意）此の卦は艮の山の下に離の火がある象で、山は地下の火力によつて噴出突起した意と共に、離火の美を艮が止めた形、美は止まつて飾となつた形であります。しかし文飾は眞を損ふ程度に強いのはいけないのです。そこで小しく往くところあるは利いが、あまりに度を過しては不可であります。德を明かにして善に止まるのが人道の文であります。而して萬物の生氣は常に天地宇宙の全體と交つてゐますから、如何なる變事も先づ第一に天文に感應するのであります。そこで天文をよく見て時變を察し、天時に則つて世風を變へ、天下を教化するやうにせねばなりません。君子は此の卦を見て、文飾に勉めて、小さな政は明かに處置すると共に、刑獄の事は差控へた方が宜しい。

初九　此の爻は陽であつて位正しいのですから、德行の形であります。世俗の人が飾と

する車には乘らないで義を守り、節を全ふして徒歩して行く形であります。

六二　此の爻は中正ですが、陰柔ですから、志は弱く九三の陽に從つて共に動かねばなりません。丁度頤に髯があつて美しく、頤と共に動く形です。

九三　此の爻は、位も正しく、而も二陰の間に挾まれてよく之を飾り、之を潤す形になつてゐます。陰は人を飾ると共に之を溺らせる惧がありますから、永久に貞吉を守らねばなりません。

六四　此の爻に到つては、粉飾が過ぎて、上下の位の別も疑はしい程になりますから、そこで、この六四が、その柔德と正の位をもつて反省し、質素な天然の飾を尙ぶやうになつた形であります。又六四はこの爻の九三と陰陽、相比してゐますために、九三が之を思慕する形になります。併し六四には初九の正應があるので、六四の方では九三を却つて寇のやうに避けてゐる形です。しかし遂には六四も九三が寇ではなく自分と婚媾せんとしてゐる意を了解して咎無きに到ります。

六五　此の爻は尊位にゐますが陰柔で、下に應ずる陽爻がないために、今は賁の時で文飾を事としてゐる時ですが、却つて柔德を尙び、自ら下民の苦勞を知つて、一時は吝嗇の譏を受けるのですが、終には吉を得て喜が有る形です。

上九　この爻は賁の卦の終に居りまして、賁極つて質素に反る道理によるもので、上が質素を尙ぶ時は、下も之に和して節儉が世に行はれる形です。

䷖山地剝　此の卦は地上に山のある卦です。山は風雨によつて、次第にその上を剝ぎとられるものですから、剝と申します。そしてこの卦は陰柔が長じて陽剛を滅し、僅かに一陽を殘すのみとなつたもので、小人の勢が盛大な時ですから、君子は順を尊んで止まり、何事も行はぬ方が宜しい。君子は盈つれば必ず虧けると云ふ天道天理を尙んで、之によく順つて、天行と一致するやうにすべきであります。だから君子は、下が上を剝して行くやうなこの卦の形に則つて、下には厚く施をして、民を安んじて行かねばなりません。さすれば、却つて自分の位置も保てるのであります。

初六　剝の卦は、一陽が上にあつて、下は皆空虛でして、丁度牀のやうです。そしてこの初六の爻はその最下位ですから、牀の足の處に當つてゐます。そこで上を剝するのに、先づ牀の足から害を加へやうとする形ですから、その災害を蔑視すれば凶となります。

六二　此の爻は、牀の上部と脚部との間の部分迄に一層の危險が迫つたやうな形です。しかし直接牀の身に及んだ形ではありません。勿論貞正を無視すれば凶である事は言ふ迄

もありません。

六三　剝の卦に於て此の爻は、上九の陽爻に應じてゐますから、上下の陰を失つても、私黨に與しない形ですから咎がありません。

六四　剝の卦の第四爻に至つて、小人の害は身に迫つて、最早危い時になつた形で、凶であります。

六五　此の爻は、初爻から五爻迄の五陰の上にゐて陰の頭になつてゐる形です。ですから此に權力を與へないで、只愛して丈おいたならば差支へはありません。小人は總べて、權力を與へずに愛して丈おけば害をなし得ないのですから、終に咎なくて濟みます。

上九　今や剝の卦が終つて、天運循環して、正に反らうとして、衆陰陽を尊んで之を輿に載せて、小人は我が身を置く處を失ふに至つた形ですから、小人が君子に害を加へやうとして、遂には却つて自分の身に災害を受けるやうになるのに例へられませう。

䷗地雷復（復は復る意）此の卦は地中に雷のある象で、之を季節にすれば、十一月の冬至に當つて、雷氣が、再び地中に復つて來る時ですから、復といふのです。この卦は否や觀や剝と共に陰陽の消長を示す十二卦の内の一つで、純陽の乾爲天から、一陽を去つて姤となり、二陽去れば遯となり、三陽去れば否となり、遂に純陰の坤爲地となつて、ここに一陽來復して、七回目に、復となるのです。

そして震雷は動くもの、坤地は順ふものですから、出入自在で、何人が來ても咎はありません。又、雷氣（生氣）が進む時は萬物を生育しますから、どん〳〵進んで行つて宜しく、諸事皆亨通するのです。全く復の意は卽ち天地の心の具現でありまして、天地兩氣は循環して止まないのであります。しかし雷が地の中に復したのみの此の卦では、陽の力はまだ衆陰に對して、微弱でありますから、靜かに此の陽氣を養はねばならないのです。そこで先王は、一陽來復の冬至の日には、一日家に居て愼み、商旅の往來を止め、巡獵を休んで陰陽の定まるのを待つたのであります。

初九　此の爻は、復の卦の始にあつて、道に復る最初の形ですから、一旦は過があつても、道を遠く去らないで復つてきたので、悔に到らず、却つて吉を得るわけであります。

六二　此の爻は陰であつて陰の位に居て、才も志も弱いのではありますが、中德があるために、よく初九の剛健な者に順つて善に復る形であつて吉であります。

六三は、陰柔で位も正しくなく、屢々過を犯して、悔いて又道に復る形ですから、大變危ふいのではありますが、何時も悔い改めて正道に復るために、咎を免れ得るのです。

六四　此の爻は五陰の中の中央にあつて、而も一陽來復の初九と正應してゐるのはこの

爻丈で、獨り、初九の仁に應じてゐますから、道に從つて復るのであります。

六五　此の爻は尊位に居て柔德がありますが、之と應じ又比する陽爻が無いために、他の力を假りずに、其の非である事を知つて、自ら之を改めて善に復る形であります。

上六　此の爻は、陰暗であつて、復の卦の終にあるために、道を遠く離れ去つて、復るのに迷つてしまつた形で、天の災と自らの過の結果とを共に身に蒙る形です。天に逆ひ人に悖つた此のやうな者が師を起したとしても大敗を招くばかりで、それが、國君であるにしても、日を積み年を重ねて尙且、軍功を奏し得ないのは當然で、その迷が甚だしいために道に復らず、君道に反いてゐる形です。

☳☰天雷無妄（无妄は自然に發する誠實の事、卽ち妄に爲すことがないこと）此の卦は雷が天の下にある卦で、兩方ともに動くもので、天と雷とが相動いて天道が運行し、萬物も亦生育しますから、元いに享るわけですが、しかしそれは天雷の自然の性質でありまして、決して妄に動くわけではありません。この妄に動かぬために特に貞正を守らねばならないのであります。もし正しくない事に動けば、天命は之を祐けず必ず罰を受け、進んでも必ず不利を招きますから、萬事自然に委せて、謹愼して無事を保つべきであります。先王は此の象を觀て、その德を盛んにし、時に順つてよく萬物を養育したのですが、勿論自分の利益のためではなく、自然に發する無妄の誠に從つたのであります。

初九　無妄は公正であつて私の無い事であります。此の爻は陽剛で正德があり、自ら望む處がないけれども、その身を持する事が正しいために、人も之に感じて、正道に化し、その志を得る事が出來る故に、進んで事をなしても吉であります。

六二　此の爻は柔中の正德があるために、利を計る心はなくても、耕さずして穀物が刈り得たり、荒地を開かないでも二年目には田になるといつたやうに、自然と幸を得る形で所謂無妄の幸であります。但し、自ら耕さず、苦勞せずに得た富ですから、勿論未だ、富裕と云ふ程ではありません。

六三　此の爻は陰であつて陽の位に居て不中正ですから、无妄の災（はからざる災）を得ます。例へば、通りすがりの旅人が、人が預つてゐる牛を盜んで行つたのに、他の村人が疑を受けて、持主から詰問されて迷惑をするといふたぐひであります。

九四　此の爻は陽であつて、陰位に居ますから、位が正しくないために、妄動して災禍を受け易いのであります。だから特に貞正にせねばなりません。且この貞正にすべしといふ戒を堅く守つて生れつきの性質のやうにせねばなりません。

九五　よく攝生してゐても、無妄の（自然と）病にかかる事がありますが、これは自然の

結果ですから放任しておけば宜しいので、妄に藥を試みては却つて餘病を起して困難します。

上九　此の爻は位が不正で、しかも無妄の卦の極上にゐますから、妄に望を起して進めば、その凶害は最も甚だしい形です。

☶☰山天大畜　此の卦は、山の下に天のある卦で、小い山をもつて、大で剛健な天を止めてゐますから、之を大蓄といふのですが、天は剛健で勢に乘じて進まうとしても、山は厚く充實して、篤實の德をもつて之を制してゐる形ですから、特に貞正を重んじてこの形勢を破つてはなりません。

又此の卦は大いに德を畜へ、賢臣を養ふ形でありまして、家に居て徒食するのでなく、用ゐられて官祿を食む形でもあり、大川を涉るやうな積極的大事を成して功を奏する形であります。君子はこの象によつて、山の小をもつて大なる天を畜めるやうに、古今の聖人の善行妙言を我が身心に畜へて自分の德を養はねばなりません。

初九　此の爻は剛健で、才も志も強いのですが、大畜の卦の下位にあるため陽の力は微弱であつて進めば危く災がありますから、已み止まるが利しい。

九二　此の爻は剛健でありますが、中の德がありますから、時を知つて自ら止まつて妄進しませんから、咎を免れ得るのであります。

九三　この爻は内卦の乾天の上位にゐますから、壯健で良馬を追ふやうに鋭進します。しかしこの卦は大畜なのですから、充分貞正を守るのが宜しい。且此の爻は、例へば健德の備つた上に、更に天子を守護するに足る武術を日々習練してゐる形でありまして、文武共に成つた上は、大いに進んで宜しい形です。これはこの爻が陽爻であつて陽の位に居り、應爻の上爻も亦陽であつて之と德を同じうし、志を合せますから進んで利しいといふ事になるのです。

六四　此の爻は、罪を犯さうとするものを、恰も子牛のうちに角木を付けて人を害することを防ぐやうに、未然に之を防ぐ形で、大いに吉を得るわけであります。これはこの爻が陰であつて位も正しく、應爻初九の妄動を制止して、大畜の卦意を表してゐる形だからです。

六五　此の爻は尊位にあつて柔德がありますから、猪を退化させて、强剛の力を柔和にすれば自然と牙のない豚になつてしまふやうに、暴力を用ゐずして妄動者の牙を拔いてしまふやうな形です。

上九　此の爻は陽剛であつて大畜の卦の終にあるのですが、大畜の止めるといふ形は、

物事の發展を妨害する意ではなくて、進化發展のために自然に之を貯へ養ふ意なのですから最後には單に畜める丈に終らぬのは當然です。だからこの爻は四方八方に何の障もなく事が行はれる形で、德智大成の結果、大道が大いに行はれる象であります。

䷚山雷頤（頤はおとがひの事で養ふの意）この卦は、上下二陽の間に四陰が挾まれてゐる形で、丁度、兩頤の間に、齒の並んでゐるやうな形です。これは飲食によつて、身體を養ふばかりでなく、生を養ひ、德を養ふのも皆この頤の象義です。但し、その養ふものは何時も正しいものでなければなりません。物事の口實を求める時には、それ以前に自己の求めた物が正しいかどうかに注意すべきです。口實を先にしてはなりません。眞正がとにかく吉の所以になるのです。頤の道が正しく大となれば、天地が萬物を養ひ、聖人が賢を養つて其の德を萬民に及ぼすやうなものであります。また口から物を入れて身を養ふと同時に、口から出る言葉は、直にその人の德と仁とを表はすものですから、君子は飲食を節すると共その言語を愼むべきであります。

初九　此の爻は剛健であつて位正しく、頤の時に當つて二爻三爻の陰を養ふ可きであるのに、四爻の陰に應じてゐるのは、自分の靈性を捨てて、富んでゐるのに尙貧者に養を乞うてゐるやうなもので、卑しい形で凶であります。

六二　此の爻は陰柔であつて、自ら養ふことが出來ず、陽に從つて養を受けるのでありますが、此の爻の初九に養はれることは、卽ち自分が、上位にあり乍ら、下位の者に養を求める事で、頤の常道にもとつてゐます。けれども上位の應爻である六五の爻は之も陰であつて自分を養つてくれる力がなく、上爻の陽に養つて貰はうとすれば、自分と同類の應爻六五の爻を失ふことになる形で孰も凶であります。

六三　此の爻は陰柔であつて、しかも位正しからざる形ですから、上爻の陽に養はれるのは、六三の應爻に養はれるのですから一見正しいやうですが、尊位にゐる六五に養はれないで、上九に養はれる事は頤養の道に背いてゐます。而も此の爻は、內卦雷の上位にゐますから、人に養はれつゝ不滿を抱いて動く形ですから、永く此を用ゐてはならぬ形です。

六四　此の爻は陰ですが位正しく、又初九の剛健と正應してゐますから、たとへ才力乏しく自ら養ふにたらぬとはいへ、よくその事を知つて、下に下つて自分を養ふ人を求めて、虎視耽々として、その養ふ處をねらひ求めて、それを次々と間斷なく守り、下位の賢者を求めて行く形ですから、咎はなく、逆な形で養はれてゐるのですが、とに角吉を得る形です。

六五　此の爻は陰であつて尊位に居ますから、人を養ふ剛健の力がなく、常道に悖つて

ゐるやうですが、柔順の中德があるため、自分の微力を良く知つて、顧問の地位にある人を象徵する上爻の陽に從ひますから、若し大川を涉るやうな危險を避けて貞正を守れば吉を得られます。

上九　此の爻は陽剛であつて、他の四陰爻は此の爻によつて養はれてゐる形ですから、その責任は重く、危疑の位置に居ますけれど、陽明富貴の德を以てよく己を養ひ、又人を養つて、遂に福慶を得る事が出來ますから、大川を涉るやうな危險を冒しても利しい。

䷛澤風大過（大過は、あやまちの大なるものの意、度を超えた意）此の卦は、外卦の兌は澤でありまして水をたたへ、內卦の巽は風であつて同時に風にそよぐ木であります。そこで此の卦は、喬木が水底に沒した形で、大な過の形です。且又二陰は上下にあつて其の間に强剛は四陽を容れ、丁度、棟が自分の力より大に過ぎたものを載せてその重さに堪へかねてゐる形ですから、更に過ある形となるのです。しかしかかる過、かかる危險をその儘にしておけば、遂には破滅あるのみです。進んで之を救はねばなりません。勇往邁進敢然進んで、始めて志望が亨るのです。人事に於ては、小人の澤水が氾濫して、君子の大木を滅さうとする時ですから、君子は大いに人に傑れた行を立てゝ、世道人心の惡逆を懼れず、誠を盡して進むべきでありまして、たとへ道が世に行はれないからと云つて、隱遯して悶へるやうな事があつてはなりません。

初六　此の爻は陰であつて柔德があり、柔かな茅のやうな敷物を敷いて下位に安居して强剛なものを受けてゐる形です。これは咎のない形です。

九二　過の卦は、水を好む楊の木が陽の勢の盛大なため、乾き切つて枯れたやうな形ですが、此の爻は同じく陽剛であつても比爻の初六の陰が潤ひ助けてゐる形なので、枯れた楊の切株から新芽を出した形です。又老夫が若い女を妻としたやうな場合に、適當な年齡ではないのですけれど、矢張相助けて子孫を生育してゐるやうな形であります。

九三　過の卦を棟の形としますと、この爻は丁度その棟の中位になつてゐますが、これは陽であつて陽の位に居ますために、才も志も共に强いけれども、その精力には限があつて、宛も弱い棟が、重い物を載せて撓むやうに、遂に其の家その身を滅すに到るのであります。これは應爻の上爻が陰であつて、之を輔ける力がないからです。

九四　前の九三に對して、此の爻も同じやうに陽ではありますが、陰の位に居ますから剛に過ぎる恐が少く、また九三の應爻上六は上にあつて棟の撓むのを助ける力が無かつたのですが、此の爻の應爻初六は、下にあつて、柱となつて、此の棟を助け支へてゐる形ですから、此の初六を捨てて、他に心を移すやうな事さへなければ、吉を得ることが出來る

のであります。

九五　九二は下にある陰の助を受けて、楊の新しい芽を出した形でありましたが、之はそれを上に受けて一時華を開いたもので、根の方からの助が無いために間も無く凋落するに決つてゐます。これは丁度老婦（上六）が少年を夫に持つたやうなもので、咎もなく譽もなく、只醜い丈であります。

上六　此の爻は陰であつて、大過の卦の最高位に居まして、大過を救はうとして大河を渉るやうな危險を侵したが陰であつて陰位に居るため、才も志も弱く、力が足らないで却つて水中に沒した形でありまして、甚だ凶ではありますが、義のため身を亡ぼしたのですから精神的には咎がないわけであります。

☵☵坎爲水　坎は水の象です。水は高所から低所にゆく性を持つてゐまして、土の缺けた場所に陷るものだからです。又坎は土の缺けた場所の形で、坎を重ねたものですから習（重）坎と申します。又此の卦は坎險に處する道を習ふと云ふ形でもあります。水は物に遇つて物を傷はず、山を下り野を過ぎ、曲折、婉轉、遂に蕩々菪々として大海に出るものであります。宛も人の心が誠であれば、行つて亨らざるなく、何處でも尙ばれるのに似てゐます。又水は險の意もありますが、王侯は時には險を用ゐて國を守りその用は極めて大であります。君子は此の卦によつて、水が險に臨んでも相繼いで流の絶えぬやうに、その德を常に持して、流通倦む事のないやうに日々に道の教を習ふべきであります。

初六　此の爻は陰であつて、下位にゐますから、丁度穴の底にゐるやうなものです。ですから坎の穴から出る事が出來ず、道を失つた形で凶であります。

九二　この爻は一陽をもつて二陰の坎中に陷つた形で、而も應爻の九五は陽ですから、陽に對する陽となつて相應じません。だから未だ坎險を出る事の出來ない形でありますが、この爻は剛中の德を一面に持つてゐますから、坎險の中にあつても小幸を得る形であります。

九三　此の爻は陰であつて、陽の位に居ますから不正です。又上坎と下坎との間に挾まれてゐますから、進むにも退くにも坎險に遮られてゐるのに、この危險を知らずに、安眠を貪り、遂に坎の穴の深みに陷る形ですから、遂に功を失ひます。それゆえかゝる形を用ゐてはなりません。

六四　此の爻は柔であつて位正しくまた尊位に在る九五と陰陽相比して、此の坎難の時を救はうとしてゐるものでありますが、併し、未だ坎難の甚だしい時でありますから、君に誠を通じやうにも禮を備へて道を行ふことが出來ず、食事にお酒一本位をそへて、牖か

らそつと運ぶやうな有樣にたとへられる形ですが、しかし遂には剛柔相反る時が來て、この坎難を救ひ、咎なきを得る形です。

九五　此の爻は剛健であつて尊位に居まして、六四の比爻と力を合せて坎險を救つて、水の盈ち溢れて氾濫せんとするのを平かにして止めるやうに、よくその難局を打開して咎なきを得た形ですが、未だ難を解いたと云ふ丈でその德が大いに行はれると云ふ迄には行つてゐない形です。

上六　此の爻は陰柔であつて、坎險の卦の上極に居るので、下の九五を凌いで自ら身を失ふ形です。丁度、人を縛して獄に繫いで、罪を悔い心を改めさせやうとしながら、三年の長年月をもつてして遂に道に還らないといふやうな形で甚だ凶であります。

☲☲離爲火　離は火の象であります。火は萬物を照炳し、暖を與へ、物を煮焚し、その用途は頗る大でありますが、一度用途を失しますと、總べてを燒き盡す惡魔となり、大禍害を引き起します。だから火を用ゐるには特に貞正でなければならないのです。貞正は柔順の德をもつて火を用ゐて始めて吉を得るのであります。また火はそれ自身形なく、只物に麗いて形を顯すものであります。日月天に麗いて萬物を照らし、草木地に麗いて花を生じ、人間正に麗いて明智を得るのであります。故に大人君子は、今日も明、明日も明といふ風に、離火の卦の示す如く、光を重ね、熱を重ね、日と月との德を重ねて明德を究めて、天下萬民を照破せねばなりません。

初九　此の爻は離の卦の始に居ますから、火の始めて燃えるやうな形で、その光は未だ明かでない時ですから、輕々しく進んではなりません。

六二　此の爻は、離の卦の主爻でありまして、而も柔順中正の德を持つた形ですから、忠信があつてしかも吉祥の氣を持つてゐます。

九三　此の爻は、內卦の終に居ます。そして陽をもつて陽の位にゐますから、剛に過ぎて柔順を守らぬ形です。だから離火の象に處する道を知らぬ形となり、宛も夜宴の時に、人が拍子をとつても之に應じて歌はなかつたために、自分丈が退け者にされて、座中の古老に心配をさせるやうな形で凶であります。

九四　此の爻は陽であつて、陰の位に居りますから、正に麗くべき離の時に不正に麗いた形ですから、突如として、變重を起す形であつて、その性質は烈火のやうに亂暴殘虐であります。だからかかる者はその身滅亡してその名は廢れてしまふのであります。天下に身の置き處の無くなる形です。

六五　此の爻は陰であつて尊位に麗いてゐます。この爻は柔中の德があります。そして

離の時に於いて、九三、九四の剛暴な者のあるのを憂ひ悲しみ、朝夕戒慎して凶を轉じて吉となさんとしてゐる形です。

上九　此の爻は今離の卦が終つて、王は遂にこの上九を用ゐて兵を起し、剛暴なもの（九三）を滅ぼして天下の害を除き、その國を正して咎なきを得る形です。しかもその首領を討ち渠魁は捕虜としますが、その黨類は咎めない形であります。

（以上で易の所謂「上經」を終つたのです）

☱☶澤山咸

此の卦は、艮の山の上に兌の澤のある卦で兌は說、小女の象であります。艮は止る象であり、又小男の象であります。それ故、山が澤氣に通感するやうに、或は小男（青年）が少女に戀愛するやうに、敏感に感應する形であります。感ずる時には亨通があります。咸卽ち亨であります。しかしその感合は正しい感合でなければならないのです。貞正を失つた感通は姦通であります。男子が進んで女子に下り、女子が說んで之に應ずるのも感の道でありまして、此が卽ち婚姻の道であります。又天地相咸じて萬物を化生し、聖人は人心に咸じて天下を和平します。故に天地にも、萬物にも、人間にも、其々咸通の道があつて、その感ずる處を觀て物の情が分るのであります。君子はこの卦によつて、常に己を虛しふして人の心を咸じて、それを受け入れなければなりません。

初六　此の爻は咸卦の最下位にあつて之を人にすれば足の部分に當ります。人が動く時には先づ足の親指から始まるので、拇指は下にあつて最も敏感なものであります。だからその拇指に感する時は、何か他に應じて、氣持の動いてゐる證據です。

六二　これは初六より上に上つて、腓の處に當ります。その應爻の九五は脊肉の處に當つてゐますが、腓は直ちに、背肉の處へ行く事が出來ず、脊肉も亦腓に來る事が出來ませんから、相交る事の出來ない形で凶でありますが、しかし九五の爻と此の爻とは陰陽相應

じてゐるのですから、妄動を慎んで貞正を守つてゐますと、遂に相感應して吉となるのであります。

九三　この爻は股の處に當つてゐます。この爻は又陽であつて陽の位に居て、且上六の陰と相感應ずべきであるのに、常に六二の腓に順つて動いたり止まつたりしてゐる形で、正に己の止まつてをるべき處に、止まる事の出來ない不節操の者でありますから、進んで事をなせば凶であります。

九四　この爻は咸の卦の胸の處に當つてゐます。胸には心臓があつて植物性神經系統を通じて大腦との關係は特に敏感です。こゝに私らは心情の源を感ずるのです。こゝが正しかつたなら吉を得て咎はないのですが、この爻は陰であつて陽の位に居るのですから、正しくない處があるので、心が動き易い形になります。そして慾の儘に心が動けば、慾に動く同類は集りますが、かく心が動くのは未だ心が大きくないのであります。だから特に貞正を守つて吉を得なければなりません。

九五　この爻は咸の卦で背肉にあたります。背肉には慾望を象徴する器官はありません。從つて悔はありませんが、この爻は君位にあつて、自ら止まつて動かぬ形ですから、民の事を謀る志が薄い形です。志が末の形です。

上六　この爻は口にあたります。しかも此の爻は陰柔不正で、誠でなくて言葉丈で人を説ばせ、また感通させる形です。たとへば妻が言葉丈巧みにして夫と感通するやうなもので、甚だ良くありません。妻は默して、妻の侍女が口を出して、皆を説ばせ和合させる方が自然であります。

䷟雷風恒（恒は表面の變化はあつても、其の根本に於いては易らぬ意）この卦は震雷が上にあり、巽風が下にある形です。雷も風も永遠に易る事のない運行の象であります。人事にすれば、震は長男であり、巽は長女であつて、長男の夫が外にあつて事を行ひ、長女の妻は内にあつて事に從ひ、既婚の夫婦が家を保つてゐる形でもあります。夫婦は互に節を盡して生涯を共にすべきものであります。夫婦の道を貞しく守つたならば、何事も必ず、亨通しますし、夫婦が力を協せ、心を同じうして事をなすならば、必ず事は盛大に赴くのであります。これが人事における恒であります。天地にも、萬物にも、皆この恒の德があります。

君子は此の卦を觀て、よく恒を守り、安に方針を易へるやうな事をせず、恒の德を守らねばなりません。

初六　此の爻は、恒の卦の内卦（長女）の主爻で、いま最下位にあるのは、丁度妻が嫁い

で間もないと云ふ形であります。然るにこの爻は陰であつて陽の位に居るので、才弱く、志のみ強く、恒の始に當つて、餘りに急ぎ、餘りに深入りしすぎた形で凶であります。

九二　この爻は陽であつて陰の位にゐて、不正でありますから、悔があるべき筈なのですが、剛中の德を以て中庸の道を久しく行ふ形ですから、遂に悔無きに至るのであります。

九三　これは內卦巽の一番上の爻で、風の動くやうに、心が動いて、信義のない形で、そのために辱を受ける事のある形です。かかる者は何處にも容れられる處がありませんから注意せねばなりません。

九四　この爻は、初六の妻に當つてゐる爻ですが、陽であつて、陰の位に居るために、不中不正であつて、恰も鳥の居ない場所で狩をしてゐる如く、何時になつても功を奏し得ない形であります。

六五　この爻は尊位にあつて、柔中の德があり、而も應爻の九二と陰陽相應じて之に從ふ形です。卽ち順貞の恒德をあらはします。しかし順貞は婦人の道であつて、義に奮つて事を制して行くべき男子が、女に制せられて唯貞順を守つてゐるやうではいけません。この爻の形はだから婦人には吉であつても男子には凶なのです。

上六　この爻は恒の卦の終にある爻であります。また外卦震雷の極に居て、鼓動の性が最も明かにあらはれてゐます。ですから、その位に安んずる事が出來ない形です。卽ち妄動して恒を守る事が出來ぬ形勢で、功を失ふ象であります。

移り氣多く物に飽き易く、忙しく奔走して骨折損に到り、目的無くして妄進して禍を受けるやうな場合は皆この爻の形に當てはまるのです。極力恒を守るに努めて、中心を得る事を旨とせねばなりません。

䷠天山遯（遯は逃れ退く意）この爻は、陰陽の消長を連續的に示す十二卦中の一つでありまして、䷠乾爲天に一陰下に生ずれば、䷫天風姤となり、更に其の陰の勢が長じますと䷠卽ちこの遯の卦となるのです。この卦は陰の小人の勢が次第に盛んになる時で陽の君子は山に遯れ退く形がありますから、之を遯と名付けたのです。そして遯は直に志望を遂げる意味でなく、却つて速に避け遯れて恥を受けず、幸福を得る形です。けれども小人の勢は漸次に長じて、遂には禍を肆にするやうになるから、貞正を守つて亂してはなりません。小人はしかし、之を惡むと却つて怨み憤つてしまふし、寬大にすれば人を侮るやうになるものでありますから、君子は、遯の形勢の下に於ては、小人を惡まず、ただ嚴に自分の身を保つて、小人から遠ざかるのが第一です。

初六　この爻は、遯の卦中にあつて、六二と共に、遯れて行く陽を逐ふやうな形になつてゐます。此の爻は特に遯れ遲れたものを逐ふ形ですが、まだまだ陽の勢が盛な時ですから、それを何處迄も追ふやうな事があると却つて自分が災害を受けますから、穩かに止まつて居れば宜しい。

六二　この爻は遯の卦の主爻で、勢が次第に長じて君子に迫らうとする陰爻ですから、黃牛の草のやうな强靱なものでもつて之を執へて、脫出する事が出來ないやうにして、遂に邪念を斷つて志を固めるやうにさせねばなりません。

九三　この爻は比爻の六二の陰と親比してゐますから、遯るべき時であるのに、これにひつかかつて遯れ得ぬ形です。丁度病にかかつて進退の自由を妨げられてゐるやうな形で甚だ危險です。しかし此の爻が六二の陰を臣下の如くあしらつて、唯愛して丈おいて、大事に使はねば遂には吉を得る形です。

九四　この爻は陽であつて初爻の陰と相應じてゐますが、今は遯の時ですから、其の好む處を捨てて、速に遯れねばなりません。しかし小人は情慾に迷つて此の決斷が出來ませんから、時に應じて退かないで自ら禍敗を招きます。大人君子たる者は、よく富貴の念を斷ち、慾を捨てて遯れなければなりません。遯れ得れば吉であります。

九五　この爻は六二の爻と陰陽相應じてゐますが、剛健中正の德がありますために、時の勢を知り、變に應じて、よく遯れ去る事が出來、何處迄も志を正しくして、小人との私交に煩はされぬ形です。

上九　この爻は遯の卦の終にあつて、應比の陰爻がないために、遲疑する處なく遯れ得て餘裕のある形であります。

䷡雷天大壯　この卦は乾の上に震のある卦で、乾は天であつて剛健、萬物を鼓動發育するものであり、震は雷であつて、動いて止らぬものであります。剛健進擊は大いに壯んな形であります。人事にたとへますと、乾の老父は內に居て事を整理し、震の長男は外に向つて動き、父子で心を協せて、その勢盛んな形です。しかし勢に乘じて剛健に過れば、却つて破を生ずるのは當然で、特に貞吉を守らねばなりません。君子は天道天理に從つて禮でない事は行つてはなりません。

初九　この爻は大壯の卦の最下位に在るのですから、足の象であります。此の爻は陽であつて、陽の位に居ますために、才も志も强過ぎて、人に先立つて輕擧なことをする形ですから、進んで事をすると必ず災があつて、誠があつても行くべき處を失つて、困窮するのであります。それは應爻の四爻も亦陽であつて、之と相應じてゐないからです。

九二　此の爻も亦陽爻ですが、陰の位にゐて、而も剛中の德があつて、壯を恃んで妄動するやうな事の無い形で、正であつてしかも吉であります。

九三　此の爻も亦初九と同じやうに陽をもつて、陽に居るために、小人は强剛を用ゐ過ぎて、他を侮つてしまひます。君子は己の强い事を忘れて、知らず識らず强剛を用ゐます。此の大壯の象に於て、剛强を恃むやうでは甚だ厲ふい形であります。宛も羊が無茶苦茶に突進して、籬に角を引つかけて、進退共に窮るやうなものであります。

九四　此の爻も陽爻であつて陰の位にゐるために、不正であつて悔のある筈ですが剛柔宜しきを得て、よく大壯の時に處して、貞なれば吉を得る形です。

丁度籬が自然に開けて進む路が生じ、大車の下の心棒を助ける木がしつかりして、平坦な處をどんどん進むやうに、進んで大になしてよい形です。

六五　此の爻は陰であつて陽の位にゐますから、位に當つてゐないのですが、丁度大壯の時であるために、位に當つてゐないのが却つて吉となる因緣となつた形です。即ち强剛の德であるとすると、牡羊がその角を籬に觸れて困苦するやうな過があるのですが、柔中の德によつて、籬を和らげ、羊のやうなものでも容易に遁れうるやうになつた形ですから、柔が却つて剛を制して悔の無い形です。

上六　これは大壯の卦の、終に居るため最早進むべき處がなく、外卦震雷の極にあるために、退く事を知らぬ形で、丁度牡羊が其の角を籬にかけて、進退に窮した形です。それは此の爻が陰であつて陰にゐて、あまり陰柔に傾いて、才を失ひ、その勢を現し得ずして凶を招く形ですが、しかし之を憂ひて反省悔悟して、自重しますならば凶を變じて吉とする事が出來ます。

䷢火地晉（晉は進む意）　此の卦は坤の上に離があつて、大陽が地上に現れた象でありますから、之を晉と名付けたのでありまして、大陽地上に現れるとき、大地はその赫々の光を受けて、萬物を進展發育させる力を得ます。之を國に例へますと、民を安んずる諸侯がよく臣節を盡して明君の寵遇を受けて、その任務の繁忙に酬ゐられて、大きな賜物を受ける形です。君子は此の象にならつて、その明德を自ら進んで昭かにして、四方を照らさねばなりません。

初六　この爻は晉の卦の最下位にあつて、これから段々に進んで行く形ですが未だ最下位にゐるために、上からは用ゐられず、また中間に居る九四の爻の邪惡のために進路を阻まれてゐる形です。しかし此の爻は、自ら獨り正位を守つてゐますから、貞正であれば咎は無くて吉を得る形です。

六二　この爻も亦、九四の爻のために進むのを妨げられて愁ひ悲む形ですが、この爻は柔中の德があつて、忠順貞正を守つてをれば遂に尊位にある六五と亨通し、幸福を受ける形です。尊位にある六五は此場合陰ですから、女王にあたります。

六三　此の爻も亦進んで六五の君に順はうとする形で、內卦の上位に居て、下位の二陰と心を同じくしてゐる形で、衆は皆之を信じて允を盡して遂にどん〳〵進む事が出來て悔を無くする事が出來るのです。

六四　此の爻は陽であつて陰の位に居て、また內卦の衆陰が、六五の君に順つて進まうとするのを妨げた君側の邪惡なるものにたとへられる形ですから、貞正であつても厲い形であります。

六五　此の爻は大明の德によつて尊位にゐますが、柔陰であるために、强剛邪惡の君側の者に妨げられて、德を明かにする事が出來なかつたのが、遂にその悔が消滅して、必ず順良の民を得る事が出來、事を行つて成功の慶を得る形です。

上九　此の爻は晉の卦の上位に居て、丁度角のある頭部に當つてゐます。角はよく物に突き當り過剛のものですが、王は之を用ゐて九四の猛威の權臣を討たせる形で、甚だ厲いのですが、遂には戰に勝つて咎なき事を得るのですが、たとへ邪惡の者でも、權臣を征しなければならないと云ふのは未だ君德が明かになつてゐない證據で甚だ遺憾であります。

䷣地火明夷（夷はやぶれる意）この卦は地中に太陽の沒した形です。國にたとへますと、上に暗愚迷昧の君があるため、君子が却つて難を蒙る形ですから、かゝる際には、よく艱難に處して、邪に傾かず貞を守つて、己の才は之を晦まし、身の安全を計つて宜しい。紂王の近親箕子が僞狂人となつて其の明を晦まし、而も良く貞正を守つて難を免がれた如きは、明夷に處して誤らなかつた形であります。君子はかゝる難局に際しては外に向つては大愚を以てし、內に於いてこそ明德を明かにすべきでありまして、これが衆に臨んで其の心を得る大道であります。

初九　此の爻は正義の行はれぬ暗黑の時に、速に遯れ去らうとして、しかも鳥が飛ばうとして翼を上げ得ないやうに、困つてゐる狀態です。大人君子はかかる際には食ふものも食はずに、急いで逃げて行きますが、人は夫れを見て色々と疑つて批評するでせうが、所謂不義の祿は食ふべきでないからどん〳〵遯れていいのです。

六二　此の爻は、柔中の德を有し、柔順であつてしかも則に從つた形ですから、駿馬に鞭つて逃げるやうに迅速に遯れ去つて吉を得られる形であります。

九三　此の爻は、至明な內卦の離の極にゐて、しかも陽剛ですから、天下のために暗愚

の首領を攻め滅ぼし、志を遂げて大勝を得る形です。しかし邪悪無道の者でも、上に立つてゐるものを撃つのは正に過ぎて正を破るおそれがあります。

六四　此の爻は、明夷の主爻である上六と次第に接近して、上六の愚昧なことが、よく解るので、速にその門庭を去つて難を免がれ得る形です。

六五　此の爻は上六の暗愚に親近してゐますから、よく己の貞しい處を守つて、その明德を寸刻も休ませてはならないので、特に貞正を重んじなければなりません。

上六　之は明夷の主爻で、外卦坤地の極に居て、大陽の地中に沒する形です。始は旭日昇天の勢があつても、上たるの規則を失つて、賢明なものを傷つけ、天下を毒し、遂に身を亡し國を失ふ形であります。

☲☴風火家人　此の卦は離火の上に巽風のある卦で、火あれば風を生じ、風があれば火の勢が盛んとなり、互に相助け相益すること丁度家人が力を協せて家を盛んにするやうであります。そして家を齊へる道は婦女の貞正に創まりますから、特に婦女の貞正なるべきことを示した形であります。此の卦の象は、內卦の主爻である六二は陰であつて、陰の位に正しくゐます。また外卦の九五は陽であつて陽の位に居りまして、陰陽男女各々その位を正しくして家を保つてゐるやうな形であります。これは陰陽調和の造化の大法に則つた形で、天地の大義を現してゐます。又家人は親愛の情に狃れ易いものでありますから、父母は嚴格に家人を率ゐて、恩威並び行はれて、家道の全きを得るやうにすべきであります。そして一國の根本は一家にあるのですから、家道が正しくなれば天下の道も定まるのであります。そこで君子はこの卦の象を觀て、一家の風教は皆自分の言行から出るものであることを察知して、言語に禮を保ち、行に恒あるやうにせねばなりません。

初九　此の爻は陽剛であつて位が正しく、門を閉して外を閉いでゐる形です。丁度新婦が家を保つ形で、悔がないのです。

六二　此の爻は柔順中正の德があります。卽ちよく九五の爻に應じて順ふ妻の形で、外に出て事を遂行するやうな事はなく、內を守つて貞であれば吉を得る形です。

九三　此の爻は、陽であつて陽の位に居るため剛强に過ぎて、家人に親まないで口喧しいため風波を生ずるやうなことがありますが、速に之を改めて吉を得る形ですが、婦女子が日夜娛樂に耽つて、嬉々として遊ぶのみで淫逸に流れるやうな事があれば、遂に家政が放縱に陷つて家を破るに到るのであります。

六四　此の爻は、柔であつて、位正しく、尊位に在る九五と陰陽親比して家を富まして、大吉を得る形です。

九五　此の爻は尊位にあつて剛健中正で、而も六四と陰陽相親しんで、六二の爻と相應じ相輔けて、よく其の家を保つてその國が治まる形で、恤ふる事はなくなり、吉を得るのです。

上九　此の爻は陽であつて、家人の卦の最上位にあり、嚴父の象であり、且誠實威嚴を有し、常に自ら反省して吉を得る形です。

☲☱火澤睽（睽は相背く意）此の卦の內卦の離は火の象で、炎上するものであり、外卦の兌は澤の象で地下に潤下するものでありまして、その性情相背いてゐる形です。また之を人事にとりますと離の中女と兌の少女とが一室に同居して、その氣質が合はないために相背くやうな形でもあります。しかし兌は說ぶ象でありますから、說んで、離火の明に麗いて行く形がありますし、又尊位にある六五は、柔中の德があつて、九二の陽剛と相應じてゐますから、小事に用ゐる場合には吉を得るのであります。又男女も形異つて始めて和合が出來るやうに、天地の萬物は皆或る時は睽き或る時は合ふと云ふ風にして交々、その用を爲すものであります。相背く意も亦大いに用があるのであります。君子は人と同ずべきところは大に柔順に和合せねばなりませんが、世俗に背かねばならぬ所は、飽く迄も毅然として自己の節を持して、世俗への雷同を避けねばなりません。

初九　此の爻は陽をもつて陽の位にゐるのでありますから、其の位は正しいのでありますが、應爻の九四も陽剛であるために、相睽いて應じないのです。けれども馬が逃げたと言つて、之を追へば益々奔騰しますし、惡人だと云つて之を激しく怒ると却つてその人に害を加へますから、君子は靜かに己を持して自分の位置を守つてゐた方が宜しい。さうすれば、陽剛の九四も後には必ず應爻であるこの初九に求めて來る形になつて、そこで悔も亡びて無くなり咎無きを得るのであります。

九二　此の爻は尊位にある六五の爻と陰陽相應じてゐますが、睽の時ですから、相隔てられてゐる形です。併し此の爻はよく人臣である所の道を失はずにゐるために、遂に陋巷に於て君臣が相遇つて互に喜あつて咎無きを得る形であります。

六三　此の爻は陰であつて陽の位に居るのですから不正です。また上九の正應があり乍ら、九二、九四に親比して、丁度輿が、或ひは前に曳かれ、或ひは後に牽かれて、ぐらぐらしてゐるやうなもので、遂には九二と九四は上九の怒に觸れ、或ひは劓り、或ひは髮を切つて怨を霽らさうとするやうな形になりますが、後にはその疑も溶けて、此の爻に相應ずるに到つて、終を完ふする事が出來ます。

九四　此の爻は初九に睽いて孤立してゐる形でありますが、遂には初九の元夫に遇つて

自分の信實を捧げ、和親を求めて、相共に親睦し、厲ふく咎を免れる形です。

六五　此の爻は尊位にありますが、今は睽の時に當つてゐますために、臣下に和し難く之を遠ざけてゐた形ですが、遂には同族の臣にあたる九二と相應じ、丁度、柔かい膚の肉に喰ひ入るやうに深く和親して、悔を無くして進んで慶を得る形です。

上九　この爻は睽の卦の極にゐるため、應爻の六三に睽いて孤立し、六三を泥まみれの豚のやうに嫌つて、厭悪の餘り、恐怖を感ずるに到る位でありますが、遂には疑が霽れて、之を射殺さうとした弓を投げ捨てゝ、婚媾を求めて、應じて行つて吉を得る事が出來るやうな形です。

☵☶水山蹇（蹇はなやみの意）　此の卦は、外卦坎水の險が前に横はり、内卦艮山の險阻が後を塞いで進退に窮した形です。而して艮は止まる形であつて、前方の坎險を見て、よく止まつてゐるのは進退の道を知つたものであります。故に、險難の象のある方は避けて陰柔であつて守り退く象のある方向に退くのが、蹇の時に處する道であります。更に此の卦を觀ますと、尊位にある九五は剛健中正で、この蹇を救ふ才力がある形ですから、かかる大人に就き從つて行けば、その志を成し、その功を奏することが出來て、貞正を守つて吉を得る事が出來るのです。蹇難の意義はまことに深いものがあるのであります。かかる蹇の時は何事も亨通し難い困難な時ですから、君子は絶えず其の身を省て德を修めねばなりません。

初六　蹇の卦の最下位に在つて、位に當らぬ爻です。上に應ずる爻もありません。故にこの爻は往き進めば必ず險難に陷る形ですが、退き守れば災を免れ得るのであります。

六二　此の爻は尊位にある第五爻に應ずる爻で、王臣の形になつてゐます。そして今は蹇の時ですから、王臣である此の爻も多難ではありますが、それは一身の利害のためではなく、國家のため焦心苦慮するもので、事の成否を問はないのであります。だから咎を受けるわけがないのです。

九三　此の爻は、陽をもつて陽の位に居るのですから、稍もすれば進み動き過ぎる形がありますが、内卦の初六、六二の二陰爻も此の陽爻を頼りとしてゐますから、若し正を守つて止まつて呉れるならば、之を喜ぶ形であります。

六四　此の爻は陰をもつて陰の位に居るため、才も志も弱く進めば蹇がありますが、位は正しく尊位に在る九五と親比し、又九三と相連つて居ますからその位を退いて守る時には難を避け得る形です。

九五　此の爻は剛健中正で尊位に居て、蹇の時の蹇難を一身に受けて、重大な責任を負

つた形ですが、剛中の德節があつて九三陽剛の友の輔を受け、よく其の難を救ふ事が出來るのであります。

上六　此の爻は柔陰でもつて、蹇の卦の終に居ますから、進めば蹇難が愈々深くなるばかりですが、退いて守る時は、尊位にある九五の大人と相親しんで之に從ひ、また內卦にある九三と陰陽相應じて志を同じくし、よく喜を得る形です。

䷧雷水解（解は解ける意）この卦は內卦の坎水（雨）と外卦の震雷と、相共に作つて堅氷がやうやく解け、百果草木の發生する形ですから、之を解と名付けたのでありますが、震雷は鼓動して止まぬものであつて、遂に坎の險難の上に脫して蹇を免れた形ですから、復つて其の位を保ち守るべきでありますが、未だ難が解けぬやうでありますれば、迅速に進擊して之を解消させるべきであります。かく雷雨共に作つて、百穀を發生させる此の象を觀て、君子は天地の仁德に倣つて、過のある者を赦し、或ひは罪ある者の罰を減じ、その憂患を解いて、恩澤に感じて再び罪過を犯さぬやうに導かねばなりません。

初六　解の卦は總べて小人を除く事を各爻の象としてゐますが、此爻も陰の小人で、本來は咎を受くべきでありますが、應爻九四の陽剛と相應じて、之に順つてゐますから咎なきを得る形であります。

九二　此の爻は剛中の德があつて、尊位にある六五と陰陽が正しく相應じてゐますから、小人を除いて天下の難を解く忠臣の象で、貞正であれば吉を得る形です。

六三　此の爻も陰爻で小人の形です。丁度背に物を負ふ賤夫の身でもつて貴い人の乘るべき車に乘り、そのために衆人は此の小人を憎んで寇するやうになりますが、併しそれは自ら招いた眚でありまして、誰を咎めようもない形で、たとへ貞正であつても吝の形であります。吝とは過を改めるのに躊躇してゐる形です。

九四　此の爻は陽であつて陰の位に居て正當ではありません。此の爻は應爻の初六の小人を解き放して交らず、九二と力を合せて生氣發生の功を成さねばなりません。しかし小人を解き放さねばならなかつたと云ふのは、一度は之を用ゐたからでありまして、未だ完全無缺の德のある形ではありません。

六五　これは柔中の德を有して尊位に居りまして、且つ小人を解き放つてしまつてゐるので天下がよく治まり、吉を得る事の出來る形で、小人も亦之に心服して、自然と退き去つて再び害を及ぼすやうなことのない形です。

上六　此の爻は、解の卦の最も高い位にゐて、丁度高い城壁の上にゐる隼のやうなもので、公は之を用ゐて、小人の狐を討たせて、天下の亂れやうとする禍根を除かせるのです。

此の爻は解の卦の陰爻中唯一の位正しい爻です。

☶☱山澤損（損はへらす意）此の卦は民が君に貢を奉るやうに、下を損じて上を益する形でありますが、同時に、邪念を減らし、慾念を無くして、損すべきものを損じて、眞を保つて行く形でもあります。眞があつて損ずべきを損じて行くのは大いに吉でありまして、咎がありません。損の道はかくて常に貞正でなければなりません。又損をしても狼狽せずに、進んで囘復の策を講ずべきであり、且損の時は、總て節約を旨とし、神を祭るにしても、心中に誠をもつてすれば、供物のやうなものは極く簡素で宜しいのです。正式の祭禮を略式にしても、その心が通ずれば宜しい。時に順つて程よくするのが損の道です。君子は此の損の象をよく見て、忿とか慾望を減らして、その德を益すやうにせねばなりません。

初九　此の爻は陽剛であつて、六四の爻と陰陽相應じ、六四の陰柔不柔であるのを慮つて、自分の事を打ち捨てゝ、速に行つて之を救ひ、己を損して、他を益する形ですから咎がありません。

九二　此の爻は剛中の德があつて、下に居る民の豐かな形でありますが、民の富は卽ち君の富でありますから、進んで應爻である尊位の六五の爻を益するために、自分を損するやうな事はしません。そして貞を守ることを自分の志とする形です。

六三　此の爻一つが、內卦中での陰爻であるため、强剛に過ぎる形を和らげ、他の爻を總べて友として喜び迎へる形であります、

六四　此の爻は、陰であつて陰の位にゐるために、陰柔不才で、その身に疾があるやうな形ですが、應爻の初九がよく之を救援して、その疾を救つて喜を得る形であります。

六五　此の爻は柔中の德があつて尊位に居りまして、上九と陰陽親比して、大いにその德を益し、民も亦從つて益を受ける形で、大いに吉なる象であります。

上九　此の爻は陽であつて陰の位に居る剛健且つ溫順な大人の象でありまして、六五の君を祐ける形です。貞正なれば吉で咎なく、進んで事をなして宜しい形ですが、上に此のやうな大人が居れば、臣下の者も公事のために、我が家の事を忘れても盡すやうになりまして、大いにその志を得る事が出來るわけであります。

☳☴風雷益　この卦は、山澤損と正反對に、上にある男が、下に惠を施す形でありまして、下は大いに益する時です。又風が烈しければ雷がいよ〳〵激すると云ふ形でもあります。雷は止まることなく進擊し、風は力に順つて到るところに入つて行きますから、進んで事をなすによい形勢で、大事大業を企てて志を達し得る形であります。君子は此の卦の象を觀て、他人の善を見ては、己を虛しふして從ふこと風の如く、又自己の過があつたの

を知つた時には、勇を奮つて之を改めること雷の如くして、その知識德性を益して行かねばなりません。

初九　此の爻は剛健であつて、益の卦の初に居るのですから、之を用ゐて、大なる仕事をして宜しい。大いに吉であります。しかし、大いなる吉を保つて咎なきを得るためには、下々の民に、重々に仕事を言ひ付けるやうなことなく、專ら一時に心を用ゐさせる注意が必要であります。

六二　此の爻は柔順中正である上に、應爻である外卦の九五の爻は、上を薄くして下を厚くする明君の形で、よく之を益して行きますから、永久に貞正を守れば、必ず吉を得る事が出來ます。

六三　此の爻は陰であつて、陽の位にゐます。そして內卦の震雷の極にあつて妄進し易い形で、例へば飢饉や刑罰の凶事が起るのでありますが、今は益の時ですから、之を益して災厄を救はねばなりません。そこで先王は神前に供物をして祖先に告げ、かかる折のために固く保つてゐた倉庫の穀物を出して之を民に給うて咎無きを得たのであります。

六四　此の爻は柔正であつて、尊位にある九五の爻と親比し、且、今は益の時に當つてゐますから下民を益し、民の利益のためには、祖先の靈に告げ、且先王の志に從つて、國都を遷してまでも盡してやつて宜しきを得ると云ふやうな形であります。

九五　此の爻は剛健中正であつて尊位に居て、大いなる善君の象であります。だから誠をもつて民を惠む志が深く、必ず大吉であります。君に誠があつて、その德をもつて普く民を惠むのでありますから、大いに志を得る事は勿論であります。

上九　これは益の卦の最極に居て、不正不中、慾を貪り、志に恒德がなく、心の偏つた形ですから、下民は之を憎んで、攻擊するやうになり、禍が外から不意に來る形であります。

☱☰澤天夬（夬は決の意であります）此の卦の外卦の兌は澤であつて水を受ける地であります。この兌澤が乾天の上にあるのですから、澤中の水氣が蒸氣して天上に昇り、決然として雨となつて降らうとしてゐる形であります。此の卦は陰陽消長十二卦の一つで、五陽爻竝び進んで一陰を決し去らうとしてゐる形であります。此の卦に於て、陰柔の小人に當る陰の卦が最高位にあつて、五君子の上に乘つた形です。君子は之を見るに忍びないで誠を盡して君（五爻）にその小人の罪惡を揚言します。しかし小人であつても高位にあるため之を決し去る事が困難であり危險であります。ですから力を用ゐないで溫和に之を去らせねばなりませんから兵を用ゐてはいけません。兵を用ゐずとも剛陽で進んで行けば遂

には事を遂げ得ます。更に此の卦は澤氣が天上にあつて方に雨を下さうとしてゐる形ですから、君子は此の卦の象を觀て、雨が萬物を潤すやうに、その德澤を普く下に及ぼす事を猶豫してはなりません。

初九　陽剛の陽爻が夫の卦の初にゐるのですから、少壯血氣にはやつて妄進する形です。陽の勢の長ずるのを待たないで小人を一擧に決し去らうとする處に無理があり、却つて小人に敗北して咎を得る形です。

九二　此の爻は陰の位に居ますから、初九のやうに血氣に逸る事もなく、又剛中の德があつて勇を誇る事もなく、豫め用心して衆を戒め告げておく形ですから、たとへ夜中に敵が攻めて來るやうな事があつても少しも恤ふることがない形であります。

九三　此の爻も初九と同じく陽であつて陽の位に居ますために、過剛で怒が頰にばつと直ぐあらはれるやうな形ですが、それでは直ぐ敵に覺られてしまいますから凶であります。ですから君子たるものは、小人を決し去る覺悟を決めたら、その事を顏に現はさず、自分一人でも決行する決心をして、急がずに時を待たねばなりませんが、その爲一時は、小人に味方するのではないかと疑を受け、濡衣のために人に慍られる事もあるでせうが、遂には事を遂行して咎なきを得るのであります。

九四　此の爻は、陽であつて、陰の位に居ますので、才は強くとも志が弱く、丁度臀の肉が無くなつたやうなもので、進退共に不可能になつて、上六の小人の爻を恐れて決斷の出來ぬ形でありますから、强剛な者に從つて行けば始めて咎なきを得るのですが、陰柔不聰明であればその言さへも悟り得ないでありませう。

九五　此の爻は、剛健中正で、上六の小人を徹底的に決し去つて、咎無きを得るのでありまして、それは義のため己むを得ずなすのでありますが、上六の爻とは比爻で、相親比する一面があるため、內心では、陰陽相親比する上六の小人を潛かに好んでゐる形で、其の德は未だ充分光大とは申されません。

上六　これは巧言をもつて君の恩寵を受け、高位に上つた小人の形ですが、今や、五陽は竝び進んで、之を決し去らうとしてゐるので、泣き叫んでも、誰も助けるものはなく、遂に身を亡ぼすに到るのです。小人の道は一時盛んなことがあつても決して長續きはいたしませぬ。

䷫天風姤（姤は遇然の意）此の卦は陰陽消長、十二卦の一つでありまして、前の夫の卦において高位に居た一陰爻を決し去つた處が、今度は一陰がたまたま下にあらはれた形であります。人事に例へますと、內卦の巽は長女の象であり、又年長で壯んな女であり、

且、一陰をもつて五陽に遇ふ形から、淫婦の象ともなります。しかし陰陽の相遇ふのは自然の道でありますから、之を止める事は出來ませんが、只陰に對する道を忘れてはなりません。此の卦におきましては、尊位の五爻は剛健中正で、よく陰の增長するのを抑止し、天下が大いに治まるやうに努めてゐる形であります。又この卦の形は天下に風の行き廻る象ですから、后たる者は此の風のやうに、其の命令を天下に徹して、よく天下を治めなければなりません。

初六　この陰は、充分繫ぎ止めて貞正を守らせると吉でありますが、進ませたならば拔く事の出來ぬ邪惡に到ります。瘦豚のやうなものだと思つて侮つて放つておくと遂には必ず强壯なものとなつて害を及ぼします。

九二　この爻は、小人である初六の比爻になつてゐますが、剛健の德があるために、その美に迷はされることなく、只此を包擁する丈で、自ら食はず、又人にも薦めず、只內に容れて外に制して咎のない形であります。

九三　此の爻は、初六の陰爻を求めて、落付かぬ形ですが、初六は、此の爻の應爻でもなければ比爻でもないために、進む事が出來ません。それで大變厲ふい形ではありますが大きな咎はなくて濟む形です。

九四　此の爻は初六の應爻ですが、初六は、既に九二の爻が包み藏してしまつてゐますから、それを得る事が出來ないので、九二からそれを奪ひ返さうとして凶を起すのでありますが、之れは尊位に近い者が、下情に通ぜず、怠慢によつて民に遠るために凶を起すのにたとへられるでありませう。

九五　此の爻は剛健中正で、しかも尊位に居ますから、丁度柳の大木が根本にある瓜を包み隱すやうに、初六の小人を內に含み貯へて、外に出さぬ形です。此の初六の小人は、澤天夬の卦の高位にあつたものが、遷つて今最下位に來てゐる形ですから、自然の順序をよく考へて、敢へて之と爭はず、只之を包擁して、時に害をしないやうにすれば宜しい。

上九　此の爻は、初六の小人を憎んで之と爭ふ形ですが、高位にある身をもつて卑賤の者と爭はねばならない處に愧づべき點があるのですが、小人を憎んで之と爭ふ事自身はあへて咎はありません。

䷬澤地萃（萃は聚る意）此の卦は、地上に澤のある形で、地上に水の潤が充分にあれば、草木はそこに聚生いたします。又精神も凝れば集つて來ます。そこで先王は祖先の墓所を祈つて、孝道を以て天下の人心を萃めるのであります。又此の卦の尊位の九五の爻は剛健中正で、六二の陰に應ずる明君の形でありますから。かゝる大人の下には庶民が皆萃

つて來るのであります。かくて天下が一つの家のやうに治つて富裕の時ですから、大きな牲を供へて祭禮を行ふのに宜しく、物事もどんどん進んで行ひ得ます。之等の事は總べて皆天命に從ふ道でありまして、萬物がみなそれぞれの性情に從つて萃る場合には、その萃る處をよく觀察して、天地萬物の情を知ることが出來るのであります。けれども一面に人が多る萃る時は、泰平の內にも、豫め用心をして、武器を磨き、思はぬ事變のため警戒せねばなりません。

初六　此の爻は、九五の王に對して側近の權臣とも云ふべき九四の爻と陰陽相應じてゐますから、孚があり乍らその孚を貫徹し得ないで迷つてゐる形です。しかし泣き叫んでも誰も顧ませんから、恤へないで九五の爻の下に萃まれば宜しい。さうすれば咎はありません。

六二　此の爻は柔順中正で九五の王と正應してゐますから、自分丈でなく、初六、六三の二陰とも一緒になつて九五に萃つて行くならば吉であつて咎がありません。又この爻は神に供へるには孚が第一であるのですが、その眞心のある形です。

六三　これは九五の應でもなく比でもないために、九五の下に萃らうと思つても行けずに嗟嘆してゐる形ですが、今は萃の時ですから、强ひて勇氣を振つて九五に萃つて行かうとすれば九五も之を容れて咎無きを得るのであります。しかし小人はこの勇氣を出し得ないで後悔する形であります。

九四　この爻は陽剛であつて尊位に側近する爻ですが、九五を措置いて此の爻に萃らうとする者が多い形ですから、私心のない君子であれば吉ですが、小人にとつては大凶の形であります。

九五　此の爻は剛健中正で、人心を萃めて位を有つ形ですが、この卦では人心の孚が半ば側近の九四に萃つて行く形ですから、未だその德が光大と云ふ事は出來ません。しかし何處迄も、大きな德を永く正しく守つて行けば、遂に悔が無いやうになります。

上六　此の爻は萃の卦の終に居ますから、物極れば變ずる理によつて、萃終つて散に遷らうとしてゐる形ですが、同時に嗟嘆し、流涕して、その散ずるのを憂へて引き戻さうと努力してゐる形ですから咎なきを得るのであります。

☱☷地風升（升は昇り進む意）此の卦の內卦の巽は風であり、同時に、木とか木の實の象にもたとへられます。此の卦はかかる木の實が芽を出して、外卦坤地の上に出て、次第に生長して高く昇り進む形であります。けれども木の實の發芽は、時が到つて始ておこり、升は時に隨つて進む意であります。卽ち巽順の德を守つて時を待つて始めて大に亨るので

あります。人事にたとへますと、位が進むには大人の推擧に據らねばなりませんが、升は大人の德に接する事が出來ると欲する處を必ず遂げることの出來る形ですから恤ふることはないのであります。常に、巽と坤の中道を進めば必ず翹望を達成するのであります。君子は地中に木の生ずる此の卦の象を觀て、自分の度量を廣大にして、丁度木の實が次第に大木となるやうに微小なものをよく滋養して高大を致すやうにせねばなりません。

初六　此の爻は陰爻でありまして、巽順の允を有してゐます。升の卦の初に當り、よく柔であり、時が來れば升つて行かうとする道を知る形であります。上の九二、九三も之と志を合してゐる形で大吉であります。

九二　此の爻は剛中の德があつて尊位の六五と陰陽正しく應じ、孚のある臣の象ですから、之を用ゐて祖先の靈を祭らしもよい位ですから、咎なく、君臣共に喜を得る形であります。

九三　この爻は、陽剛で、上位には之を障害する陽爻は一つもありませんから、丁度人の無い里を行くやうに、昇進する事が出來ます。この爻は又陽であつて陽の正位にゐるのですから誠を存して何の疑ふ處もありません。

六四　此の爻は陰であつて陰の位にゐますから、柔順であつて、其の所に止まつてゐる形であります。そして丁度側近の賢臣の形ですから、王は之を用ゐて、天を祀らせる形であります。卽ち柔順であつてよく天に事へるものでありますから吉であつて咎がない形であります。

六五　此の爻は柔中の德があつてしかも尊位に居りまして、貞正の道を守つて、人を遇するので、遠藩の强豪なものも、皆其の德に化して、王朝に升り、朝する形でありまして大いに其の志を得る象です。

上六　此は升の卦の終に居て、最早升るべき處が無いにも關はらず、陰柔不才で升の道に尙昇進しやうとする形ですから、その身は破滅し、富を失ふに到りますから、日々怠らず貞正を守らねばなりません。

䷮澤水困（困は苦む意）此の卦は、兌の澤が上にあり坎の水が下にある形であります。澤は元來水を蓄へる地でありますが、此の卦の形は、蓄ふべき水が地下に漏れ去つて、澤の水が涸れた形です。かくて萬物皆困に陷つてゐる有樣です。此の卦の象は、陽爻は皆陰爻に蔽はれて、陰は陽を消し、君子は小人に制せられた形です。けれ共兌は悅であり、坎は險の意ですから、險に臨んで心の悅を失はず、困窮の中に在つて其の道を失はぬ君子の形ともなるのです。君子にとつては困中にも亦亨通の道があるのであります。故に大人に

とつては吉であつて咎が無いのであります。

小人は困苦に遇へば自己に都合のよい口舌をもつてその困を脱しやうとしてもがきます。その結果却つて信用を失つて愈々困窮を増すのです。かかる場合には寧ろ默して時を待つのが宜しい。君子はかかる困の時に當つて身命を度外視して、飽く迄も自己の所信に向つて邁進して宜しい。

初六　此の爻は陰柔であつて、困の初に居まして、位も正しくありませんから、安居する事が出來ず、又曖昧不聰明のために坎險に陷つて丁度幽谷に踏み迷つたやうに何時迄も困窮を脱し得ない形であります。

九二　此の爻は剛中の才德がありますが、初六、六三の二陰の間に陷つて、酒食に困しむ形であります。尊位に在る應爻の九五は、此の爻と同じく陽であります。陽と陽とは、相應じないものではありますが、今の困の時を濟ふには中德ある此の爻を用ゐて輔弼の任にあてねばならぬ形で、九五は、此の九二の爻を聘して、共に志を遂げ、慶福を得る形ですが、之を求めるには神明を祀ると同じやうな誠敬をもつてすべきであり、又九二自身は今坎險の中にある形なのですから、自ら進んで九五の天子に求めて行つてはなりません。

六三　此の爻も陰柔不正でありまして、君子を困に陷らせる小人の形であります。これは自然と自ら危險に陷つて、自ら滅びる形で、進む時は九四の爻の石のやうに堅固な陽に止められ、退こうとすれば九二の陽爻が丁度刺のある草のやうに之を妨げ、進退窮して家に還ると、妻が遁出して探し出せないといふやうな最も甚だしい凶の形です。

九四　此の爻は君側の執政といふやうな爻で、天下の困を救ふ事が出來ず、中德ある下位の陽剛な賢臣に助力を求める形です。けれ共九二は此の爻の應爻でも比爻でも無いために、速に應じては來ないのであります。そこで卑吝の謗は免れ得ませんけれ共、遂には九二が來て相與する形勢になりまして終を完ふすることが出來るのであります。

九五　此の爻は剛健中正で尊位に居ますので、天下の困窮を救ふ形であります。そこで邪妄の小人である六三の鼻を切り初六の足を切つて刑して行く形です。しかし小人を刑したと云ふ丈では未だ志を得たとはいへないのでありますが、誠心をもつて九二の賢臣を聘し祭祀を行ふやうな誠心をもつて、之を用ゐますならば、徐々に福を受けるようになるのであります。

上六　此の爻は陰柔であつて困の卦の終に居ますから、困の時に處する道を失つて、かつ。ちが風に搖られるやうにふらふらして安定を保つ事の出來ない形です。卽ち安に動けば悔があります。しかし自分の非を悟つて行を改め、貞正を守つて進んで往けば遂に困窮を

脱して吉を得ます。

☵☵水風井（井は井戸の意）此の卦の内卦は巽で風です。又木の象であります。木は水の上に浮ぶべきでありますのに、此の卦では、水の下にあります。これは丁度木で作つた昔時の釣瓶が、井水の中に沈んでゐる形です。又、井戸は水脉をよく見て善い水の出る處を掘つたものですから無暗に動かす事は出來ませぬ。人間の德もそれと同じく、動かしたり易へたり出來ないと共に、井戸に恒德があつて、汲んでも汲んでも盡きないやうに、又汲まないでゐても溢れぬやうに恒の德がなければなりません。又井戸は、之を汲んで往來する民を養ふ故に、井には養ふ意があります。井は此の點でも人德に通じます。人德は絶えず努めて之を修むべきもので、釣瓶が、井戸の外へ上りかけた時に、繩が足らなかつたり釣瓶が壞れたりすれば、凶であります。そこで君子は此の象を觀て、井水の盡きないやうに民を勞ひ、よく民を勵まし助けなければなりません。

初六　此の爻は井戸の一番下の處にありまして、丁度泥が多くて飲むことが出來ず、また此の爻は陰柔不正で、上に應爻が無く、釣瓶を上げる轆轤を捨ててしまつた古井戸のやうに、之を用ゐることが出來ないのであります。

九二　此の爻も上に應爻がありません。之は丁度釣瓶が破れてゐるやうに、水を汲み上げる事が出來ず、井戸の底にゐる無用の鮒を濕すに過ぎないやうな形です。

九三　此の爻は、陽剛で位も正しいのですが、之を用うべき、尊位の五爻は、應爻でも比爻でも無いために、之を汲んで吳れないので惻み悲しんでゐる形です。しかし之は飲用すれば大變に宜しい清水を、上の者が知らない形で、その側を通行する旅人も、この水が用ゐられず飲まれずにゐる事を惻み嘆き、此の清泉が用ゐられたなら、此の井戸（君子）の福のみでなく、明君の福でもあり、天下の福でもあるのに、と言つてゐる形であります。

六四　この爻は九五の君を輔佐する執政といふべき位置にあつて、その德を保護してゐる形ですから、咎が無いのであります。

九五　此の爻は、井水が底の泥水から遙かに遠くなり、また既に甃が出來て、その水は清く冷く、人は皆喜んで之を用ゐる形です。それは此の爻が剛健中正で、尊位に居て、無窮に人を養ふ德澤が普く行き渡る象であるからです。

上六　此の爻は井の卦の最極にゐて、丁度水を汲み終つてその井戸の蓋をしないで置くやうなもので、後から來る人にも汲ませやうと云ふ誠の表れですから德の大成した形で元いに吉なのであります。

☱☲澤火革（革は改める意）此の卦は兌澤が上にあつて、離火が下にある形です。これ

は水火が相滅しあふ形であり、又少女(兌)と中女(離)とが同居して相克し、何方か一方が斃れて、後に殘つたものが、舊を革めて新事を爲す象であります。又兌には又金の象がありますが、今火の上に金があるのですから、金の形の革められる意にも通じます。しかし改革の前には、よく省察して革が道に當るやうにしないと、丁度、金を融して新に鑄型に入れても、鑄型(道)が悪ければ、又やり直さねばならぬ事になつて、革を輕々に行へば却つて弊害を生じますから、革に際しては、飽く迄誠をもつて貞正を守つて、時期が到ればば大いに改革すべきであります。かくて始めて悔もなくなるのです。即ち天地が革まつて春夏秋冬の四季の變革があります。しかるに支那の湯の武王が世を革めたやうな場合は、革の鑄型其自身が不正なのですから、何度でも革があるのです。大日本帝國に於ては、革の鑄型は判然と定つてゐるのです。天皇陸下を中心とする帝國の主權が、たとへ寸毫でも冒されたときにのみかかる革が行はれるのでありまして、革の道は、支那や、西洋では知らないのです。支那の易の作者自身湯や武王が、夏や紂を討つたのを肯定せざるを得なかつたのは、まことに哀れな事であります。君子は、革の象を見て革の大道を誤る事なく、又四時の變革に順つて曆を治め、時を失し間違ふ事の無いやうに注意せねばなりません。

初九　此の爻は革の卦の最下位にあつて、位低く、また上に應ずる爻もありませんから未だ改革を行ふべからざる時であります。即ち之を黄牛の皮のやうな强靱なもので繫ぎ留めておいて貞順を守らせなければなりません。

六二　此の爻は柔中の爻であつて尊位の九五と陰陽相應じてゐますから、革を行つても咎の無い形で、相共に喜ぶ事が出來るのであります。

九三　此の爻は强剛をもつて、離火炎上の内卦の終にゐますために、短慮性急亂暴の形で、改革を行ふべき任ではなく、貞正であつても危ふい形です。即ち革の時勢に促されて、止むなく暴に陷つてしまふ危險があるのです。

九四　此の爻に至つて革の時が熟して來たのであります。革にあたつては孚を以て之を行ひますならば、人も皆之を信じて、悔が亡くなつて吉を得るのであります。

九五　此の爻は剛健中正であつて尊位に上つてゐます。それ故革の時に當つて、よく變に應じて通達し、天下の弊を革める形で、孚があり、德が明かで、虎の毛が一變して文(しま)が明かになつたやうなものでありますから、民が皆心服する形です。

上六　九五で改革が整ひ、この上六では、其れが終つた形です。そこで、君子は豹の皮の文が、變るやうに、時に應じて變革します。小人もそれ相當に外容を革めます。しかし君子と小人では革めやうが異るのです。君子は形と共に心が革まりますが小人は形丈革め

て、心は之を革めません。内心では改革前の事を慕つてゐます。しかし上の君子が貞正を守つてゐれば、遂には心から君に從ふやうになつて來ます。また前の九五は、大きく判然と簡明に變革の大綱を明かにした形で宛も虎の紋のやうなものでしたが、王の顧問に象る上六の爻の變化は、改革後の細かい制度まで新に明かにして豹の細かい紋が明かになるやうなものです。

䷱火風鼎（鼎は帝位を示す鼎の意）鼎は帝位をあらはす貴重な具で象を卦の形にとつてゐるのであります。此の卦は離火上にあり、巽風下にある形であり又、聖人神を祭り諸侯に陪食させる形でありまして、敬神和樂の内に天下の情勢を聽き、聖賢の意見を聽き巽順であり乍ら、耳目を働かす聰明な形でありますから、大いに吉であつて萬事亨通するのであります。

君子は、帝位を示すこの鼎の動かすべからざるものであるやうに、位を正しくし天下を定めて所謂鼎の輕重を問はれるやうな事があつてはなりません。

初六　之は、鼎を用ゐる初にあたりますから、先づ倒にしてその中に溜つてゐる渣を出してしまふやうな形です。そこで、かくこの卦を倒にしますと、澤火革、卽ち前の卦になりまして舊幣一掃の象となります。此の爻は陰柔不正でありまして、九四の應爻があるのに關らず、近くの九二の比爻に交つてゐる形で、人にたとへると妾の形ですが、妾には子を得て安んずる事がありますから、繼ぐ所があれば咎はないといふ形です。

九二　この爻は鼎の胴の處にあたります。此の爻は陽爻であつて充實の形でありますが下には陰柔不正の比爻初六の爻がありまして、丁度仇がある形です。しかし行ふ所を愼めば、その初六不正の爻の仇は、疾にかかつたやうになつて之に卽いてくる事が出來ないで終に吉を得る形です。

九三　此の爻は外卦離火に接近し、また上爻は同じく陽で之と應じません。丁度鼎の耳が燒け過ぎて、鉉をかけることが出來なくなり、内に美味があつても、それが食べられない形です。しかし此の爻が變じて陰となり、柔順を守る時は上九と應じて遂に吉を得る事が出來るのであります。

九四　此の爻は鼎の胴の一番上にあたり、前の二爻、三爻、四爻は共に陽剛で重をあらはしてゐまして甚だ重い形です。しかし之の應爻である初六は陰であつて力が足らず、足を折つて鼎を覆し、内にある珍味を駄目にする象となります。これは君側の執政に象る九四の爻位にあり乍ら、小人と親爻を結んだためで、罰を受けるのは當然で、この形になれば甚だしい凶であります。

六五　此の爻は柔中の德があつて、尊位に居て、丁度鼎の金耳が立派であり乍ら、己を虛しふして用をなすやうに、賢臣の言を聽き、また黃金の立派な鉉のやうに、立派であり乍ら、物を引き上げる用をするやうに、善事を取り上げて自分の德をみたすのに用ゐるのであります。

上九　之は鼎の鉉の處にあたります。此の爻は陽剛でありますから、玉の飾のあるやうな立派な鉉に象られ、王をよく輔けて大吉に到る形です。

☳☳震爲雷　此の卦は震を二つ重ねた形であります。雷には動く、勉める、働く、勢力、振威、忿怒、激昂、奮發、決斷等の激しい意味があります。雷は又生氣の事でありまして生氣は春出て、秋に藏れるもので、木をもつて之に象るのですが、人事に象れば、長男の象となります。雷の奮ひ起り、生氣の發する時には、勢力猛烈で、人は却つて恐れ戒めて災は却つて福となり、雷の震動が止めば、人は皆和樂します。そこで今後の事迄恐れ戒める結果、自ら處置する法則を得るに到ります。更に震雷百里にとどろく時は、大變事のある事を知つて、周章狼狽する形ですから、特に長男たる者は宗廟社稷を祭るのです。震雷の象である長男は、明敏果斷で、大事に臨んでも、泰然自若　その執る匕鬯を握りしめてこれを取り落すやうな事はありません。そして匕は祭祀をなす時、鼎の中の食物を掬つて神に供へる匙の事でありますし、鬯は發祀の時地上に撒いて清める香の高い酒でありますから、此の爻は大切なものを失ふ事のない形であります。

君子は震雷重なつて百里に震ふ此の卦の象を觀て、却つて恐れ戒めて、自らを修め、よく反省して中心を失はぬ注意が必要であります。

初九　此の爻は震爲雷の主爻であります。震雷が響いて來ても後には喜があり、恐れて却つて自ら戒める時は却つて後の常則を得る所以であります。

六二　此の爻は、震雷の主爻である初九の上に乘つてゐて、甚だ危ふい形であります。しかし柔中の德で、妄進する事なく恐れ戒めて財寶を捨てて、高所に逃れ、災厄を免れる形です。財寶は一旦失つても再び得る事が出來るものですから執着してはなりません。

六三　此の爻は內卦の主爻である、初九の震雷を遠ざかつた形ですが、同時に外卦の主爻である、九四の震雷に近づいた形です。しかも陰爻でありながら陽の位に居りますから位不正で常に危難に脅される形ですが、恐れ戒める時は害無くして濟みます。

九四　此の爻は外卦の雷の主爻で、陽剛ではありますが、陰の位に居て不中正ですから動く可からざる時に動いて遂に上下の陰中に陷つて、道を失ふ形で、未だその德が光大であるとは申されません。

六五　此の爻は初九の雷は濟んでも、又九四の雷に迫られた形で甚だ危ふい形ではありますが、此の爻は柔德があつて、尊位に居ますから、匕鬯を喪ふ事がありません。卽ち大事に際して自失するやうな事はありません。

上六　此の爻は、震雷の卦の終極に居まして、驚の餘り心が亂れて物も碌に見られぬやうな形ですから進んで事をなしてはなりません。しかし靜かに省みてみますと、九四の雷は未だ遠く六五に迫つてゐる丈で、未だ危險が身に迫つたわけではなくて、早くから驚き戒めてゐる形なのですからこの點では却つて咎がないのであります。但、此爻の應爻である六三は小人の象ですから、その交に就いての故障苦情は伴つて來る事を注意しなければなりません。

☶☶艮爲山　艮の山が二つ重つた形が此の卦です。山には留まるとか止まるといふ意があります。しかし留まるに處を得れば宜しいが、處を失へば不可であります。人間の身體で言へば體の前部には慾望に關係のある感覺器官が發達してゐますし、背部には別に慾を發する器官がありませんから、背を正し後に力が充つる時身は止まる處に止まつてゐることになります。

さてこの卦の應爻は皆陰陽相應ずる者はなく、只陰と陰、陽と陽と相重なつて止まつてゐる形であります。しかし止まるといふ事は、とかく一方に偏し易いものですから此の點は注意しないといけません。止まるべきには止まり、進むべきには進むといふ風に、時に順つて動靜宜しきを得るやうにならねばなりません。君子はよく此の象を觀て、自己の分限に止つて、分外の事を考へてはなりません。

初六　此の爻は山卦の趾の處にあたつてゐます。趾は動作の根本ですが、動く可からざる時には止める役目をします。今この爻の形は止まるべき時を知つて止まつてゐる形ですから咎がありません。永久に貞正を守るが宜しい。

六二　此の爻は山卦の腓の處に當つてゐます。このふくらはぎは股に從つて、動いたり止つたりするものですが、その股にあたる爻は九三の爻で、これは內卦艮山の主爻で進む時にも尙止まらうとする剛頑の形ですから、勢ひこの六二の爻が之を矯め拯はうとするのですが、どうしても聽き容れず不快を感ずるやうな形であります。

九三　此の爻は腰から股にあたりますが、腰が動かないと身體屈伸の自由は失はれて、煙でむされるやうな格好をして苦しまねばならぬ形であります。

六四　此の爻は陰であつて陰の位にゐますから、自分の身の止まるべき處を知つてそこに止まり、君側にあつて身を挺して、諸惡を止め防ぐ形ですから咎はありません。

六五　この爻は柔順中正であつて、丁度言を愼んで妄りにその頰を動かさないやうな形ですから、言ふ事にも順序が立つてゐて、悔がないのであります。

䷴風山漸（漸は順を追つて進む意）此の卦の外卦の巽は風であり、木の象であります。又內卦の艮は山の形ですから、この卦は山上に木のある象であります。山上の大木は長年月を經て順を追うて成長するものであります。人間にたとへると女子が年頃になれば、順に從つて嫁ぐやうなもので、これをあせつて無暗と戀愛したり、不正の交によつて節を失ひ義を犯してはならないのであります。漸とはあく迄順を追つて進む意であります。それには必ず貞正を守つて、正道に順つて進まねばならないのです。先づ自分自身を正しくして天下を正しくするのが漸の道です。

此卦は、尊位にある九五は剛中の德があつて仁義並び用ゐる形であり、外卦の巽は所謂巽順の象であります。風があらゆる物に順ふやうな形であります。更に內卦の艮は止まる象ですから、內に止まつて外は順ふ形ですから、動いて窮る事のない形であります。君子は山上に木のある此の卦の象に則つて賢德ある人を用ゐてそれぞれの處を得させて、その德化によつて風俗を善くさせねばなりません。

初六　此の爻は漸の卦の初にあつて鴻が干に進んで來た形で、丁度若い女が婚禮したばかりの形でもあり或は今若い者が、始めて仕官した形でもあります。

しかし上に應ずる爻が無いために、之を引き上げてくれる人が無いため危い點がありまし。たとへば之を毀る人がある形ですが、順序をもつて進めば、咎が無いのであります。

六二　此の爻は初六より一歩進んで、鴻が磐石の上に上つた形です。而も此の爻は尊位にある九五の陰陽が正しく相應じ、君から祿を受けて飲食も裕な形でありますが、陰をもつて陰の位に居て正位に居ますのみならず、柔中の德を持つてゐますから、空しく祿を受けて飲食を貪つてゐるやうな事は無く、漸を追うて誠を盡す形です。

九三　此の爻は鴻が陸に進んで來た形です。此の爻は、陽でもつて陽の位に居ますから剛情に過ぎ、進むばかりで退く事を知らない形です。しかも上には六四の比爻がありますから、之と私婚して子を生ませる形がありますが、正當の配偶で無いためにその子は育たず、甚だ凶であります。この爻の應爻は上爻でありますが、此の九三の爻と比親する六四の爻は不逞の女子の形で、却つて自分の方へ寇をする有樣であります。此の寇を禦いで自分の身を守るべきであります。

六四　此の爻は陸より一段高く進んで木の上に上つた形です。しかも水鳥である鴻が止まるのに工合の良いやうな平な枝を得て咎の無い形です。これは此の爻が外卦巽の主爻で、

巽順なものですから、よく漸の時に處して正道を行く事が出來る形であります。

九五　此の爻は、鴻が更に進んで高い岡に上つた形です。此の爻は剛健中正であつて、尊位にあつて內卦の六二とは陰陽相應じてゐます。しかも六二の婦とは互に相應じて中間に九三、六四の爻が在るために妨げられて、夫婦が相逢ふ事が出來ないやうな形でありますけれども、遂に正應である二爻を阻礙する事が出來ないので、此の爻は遂に六二と應じて願を達して吉を得るのです。

上九　此の爻では、鴻は、次第に上に進んで、卦の終に來てゐますから、丁度、空高く飛び上つた形です。そして鴻は列をなして一糸亂れず、整然として飛んで行きますから、人は仰いで之を見るのであります。君子は此の象をもつて人道の儀法とするのであります。

䷵雷澤歸妹（歸妹は妹を歸がせる婚姻の意）此の卦の下卦は兌澤であり、上卦は震雷であります、兌は澤であり、四時に當てれば秋であります。それで此の卦は秋に至つても尙、雷が地中に潛まないで澤上に在る形で、澤は雷を追ひ慕つて止まぬ象があります。人事にすれば、內卦の兌の少女が外卦震の長男を慕つて、自ら進んで之に嫁がうとしてゐる象です。しかし嫁ぐべき時が未だ到らないのに女の方が悅び動いて自分から進んで嫁がうとするのは、人倫の常道ではありませんから、進んで行けば凶であり、不可であります。

しかし婚姻は陰陽の道でありまして、天地も交つて萬物を生じ、人も婚姻によつて子孫を得るのでありますから、そこで君子は此の象を觀て婚姻に於て最初の時が大切であるやうに、末永く終を完うするためには、最初の時に、破れの出る處をよく調べておいて、それをよく戒めねばなりません。

初九　此の爻は、婚嫁の卦に於て、九二と共に、正統の妻ではない形ですから、總べて望む事なく、此の分を守つて差出がましい事をしないで行けば吉を得る形です。（但、正妻以外に妻あるわけはなく、支那の易經にある正妻副妻のたとへは、只形勢上の例として觀て下さい）

九二　此の爻も前爻と同じく、その分を守つて、分外の事を願はないで、その分に安んじて、隱忍貞正を守れば宜しい形ですから、未だ婚嫁の常道を得るには到らないのであります。

六三　此の爻は內卦の主爻で正妻となるべきものですが、陰柔不正の位にゐる爻ですから、外卦の主爻の長男である九四が之を納れない形ですから、仕方がなく正妻にならうとする初志を飜して副妻にならうとしてゐるやうな形ですから、道に據らぬ婚姻は止めた方が宜しいのです。往けば凶です。

九四　此の爻は、外卦震雷の主爻で、今內卦兌の上にあるのは、卽ち秋の雷ですから、期を誤つた形ですが、別に婚姻出來ないと云ふのではありません。よく愼み戒めて、よい配偶を得たならば、その時始めて婚姻を行へば宜しい。

六五　此の爻は尊位に當つてゐますから、王がその妹を嫁がせる形です。しかしこの爻は柔順中正なもので、謙讓の德を尊んで、志の貴いのを重んじ、衣服等も副妻に劣るやうなものを用ゐ、また滿月前の月のやうに、その德を誇らないやうにせねばなりなません。

上六　婚姻をする際には、男女各々禮を盡して婚するのですが、それが充分行はれない形の此の爻は、凶であります。これは此の爻が應爻の六三の爻と、陰と陰で相應じないからです。（以上婚姻の例に正妻副妻を言うたのは支那流のたとへであつて、大日本帝國に於ては、正妻以外の婚姻は成立しないのです）

䷶雷火豐（豐は裕に富み盛大な事）此の卦は、外卦の震雷と、內卦の離火とが、相共に働いて、よく萬物を照らし鼓動發育する形であります。又、東方（震の方位）に離の太陽が將に昇らうとしてゐる象でもあります。そして內卦の離火は明の意があり、外卦の震には動の意がありますので、明動の形となり、豐大の象となるのです。けれども日も遂には中天を過ぎて、月も盈つれば虧けるものですから、時に順つて盛衰消長があります。まして人間では此の盛衰があるのですから　君子は、震雷と電光が共に到るやうな此の象によつて、その光明正大を學んで、明をもつて獄を裁き、哲をもつて刑を定めなければなりません。

初九　此の爻は、應爻である九四と同じやうに陽剛なものですから、陽と陽は相應じない筈ですが、此の方は內卦離火の陽であり、九四の方は外卦震雷の陽ですから、この明動は相扶ける形がありますから咎はないのみならず、更に進んで遂には九四に應ずるやうになりますが、自己の才力を恃んで剛を誇つて進み過ぎると、災に遇ふに到ります。

六二　此の爻は、柔順中正ですが、進んで應爻である尊位の六五を輔けやうとしても同陰であつて相應じません。また中間にも九三、九四の陽剛な爻があつて、之を妨げると共に、上位には陰柔な上六が居て、その明を昧ますことになります。ですから、進んで行くと、却つて疑を受ける形勢ですから、飽く迄誠を積んで、九五の爻の方で自然と之に感應して來るのを待つてゐると吉を得る事が出來るのであります。

九三　此の爻は、邪惡迷妄の顧問官の象である上六に應じてゐるために元來は剛健で正しいものであるのでありますのに、不忠不貞のものと誤られて、その右肱を折られて用ふる事の出來ない不具にされる形ですが、これは節義に殉じて小人から傷害されたので、自

分には咎はないのであります。

九四　此爻は陽であつて陰の位にゐるために、位に當つてゐません。故に暗昧で不明の形ではありますが、下位の初九と同陽相扶けて、遂にはその志が行はれ吉を得る形であります。

六五　此の爻は柔陰であつて尊位に居るために、陰弱微力の傾はありますが、誠があつて節を守つてゐる應爻の六二の爻を招き來らせますならば吉であつて慶を得る形です。

上六　此の爻は、豐の卦に於ける各爻を陰蔽するものでありまして、その極位にゐて、却つて自ら高ぶつて、己れの明德を暗くし、終に豐を變じて凋落に陷らせ、身を藏さねばならぬやうになりますから甚だ凶であります。

䷷火山旅（旅は旅の意）此の卦は、艮山の卦の上に離火の卦のある形で、火が次々へ燃え移つて行く形です。又、旅人が次から次へと旅して行くやうな形です。旅の時には家を離れ、知人も少い處を行くのですから、特に剛健な人に從ひ、止まるべきところに止まつて、德の明かな人に付いて行くやうにして、始めて安全に交通し得るのです。又旅に於ては時に貞正を守らないと思はぬ災害を蒙りますから、貞正を守る事には特に注意して欲しいものであります。かくすれば必ず吉を得ます。君子はこの卦の象を觀て、山上の火の明かに照らすやうに、智を明かにして愼んで刑を用ゐ、又火の止まることが無いやうに、速に、且つ滯ることなく獄を定めねばなりません。

初六　此の爻は陰柔であつて、旅の卦の最下位に居ますので、細少卑劣なものに喩へられます。卑しいものが、旅行中に一錢一厘の金の事で爭ふやうなもので、自ら災を招くやうな事は愼まねばなりません。

六二　此の爻は陰であつて陰の位にゐますから、丁度旅人が泊るべき宿を得た形であります。此の爻は柔中の德があるので、旅人に付き從つてゐる童僕も、よく忠貞を盡しますから、旅で最も重要な、旅館と、旅費と、忠僕の三人を得て災なく旅する事の出來る形であります。

九三　旅に於ては、柔順中正を最も尊ぶのでありますが、此の爻は、陽であつて陽の位にゐるために、强剛に過ぎて、矜り傲る形でありますから、遂に、その旅館を失つてしまひ、僕にも背き去られ、困苦を極める形であります。

九四　此の爻は陽であつて、陰の位に居りますから、暫くは假の宿を得、又旅費や、身を守る利器を得たけれど、遂にその位を得る事が出來ず、未だ終身安居すべきところを持ち得る形ではありませんから、未だ愉快にはなれないのです。

六五　此の爻は尊位にゐて、天子が四海を自分の家としてゐられる形ですから、最早自らは流浪の旅をする必要はありません。只使の者が、君命を奉じて、他國に使する象であります。そして矢の直なやうに、正直に他國の文明を視察して、之を我國に取り入れ、君命を辱かしめないで歸り、その才德は君の志す處に合し、終に稱揚される形であります。

上九　此の爻は旅の卦の最高位に居て、柔順を尊ぶ旅の時におきまして、强剛のために却つて順を失つて、丁度巢を燒かれた鳥のやうに、その旅宿を奪はれ、先には人を蔑視冷笑してゐたのが、後には自分自身が泣き叫ばねばならなくなつた形です。また自分の持物を全部載せておいた牛まで盜まれたと云つて泣き叫んでも誰も見向きもしないといふやうな凶の形です。

☴☴巽爲風　これは巽風の卦を二つ重ねた形です。巽は風の象です。又、入る、從ふ、伏する等の意があります。そして風は普く行き渡つて極りがないものですから、此を命令の行き渡るのに喩へます。そして此の卦は、巽の卦の尊位にある九五が、剛健中正で、而も柔順の德がありますために、その志がよく行はれ、初六、六四の陰爻は、皆、陽爻の下に在つて、剛に從ひますから、小陰も亦亨通することが出來るのであります。そこで大に進んで事をなして良ろしいが、大人に從つて事をなせば最も宜しい。君子は此の卦を見て、風が相次いで吹き渡つて行くやうに、天下萬民に命令を下して事を行ふべきであります。

初六　此の爻は、陰柔であつて、巽爲風の卦の最下位に居て、風が、未だ全土を席捲するやうな勢を得るに到らず、行きつもどりつそよいでゐる位の形ですから、心に疑があつて進退を決し得ない形でもありますが、武人が貞正强固なる決心をする如く、志を定めるならば治まるやうになつて來ます。

九二　此の爻は、內卦に於て、丁度、牀下に坐してゐるやうな形ですが、剛中の德があるために、史巫を用ゐて神明の敎示を受け、亂れて紛れ易い事を、よく處理し終つて咎なく吉を得る形であります。

九三　此の爻は內卦の巽の終に居まして、風が屢々その方向を變へるやうに、あちらこちらと順ふ處に迷つて卑屈な能度でためらつて、世の信用を失ひ、その志が窮する形です。巽順は卑順とは異つてゐるのです。堂々として天理に順つて行くのが巽順の德です。

六四　此の爻は位が正しく、尊位の九五に、比親してゐますから、天子を輔佐する大臣の形です。卑順阿諛の者はたとへ多く集つても、今は巽爲風の時ですから、命令は行き渡り、悔は亡んで、狩をして多くの獲物をうるやうに功を立てるのであります。

九五　此の爻は、卑順阿諛の徒が多く集つて來るのを、巽爲風の德をもつて積弊を改革

一洗しやうとするのですが、此の爻は剛健中正でありますから、改革をする前に丁寧に慮り、又後々の事迄度つて、この改革を斷行するため遂には悔が亡びて、總べて宜しく、始は功無くとも、終には吉を得るのであります。

上九　此の爻は、位が不正で、巽の卦の最上にゐますから、巧言令色でもつて、人に卑順し阿諛を極める形ですから、尊位にある剛健中正の九五に斥けられ、遂にその資本と權力を失ふに到ります。ですから貞正强固を保つても凶でありますから充分に愼まねばなりません。

䷹兌爲澤　兌は一陰二陽の上にある形で悅ぶ象でありますが、この卦はかかる兌を二つ重ねた形です。此の卦の九五と、九二の爻は剛であつて中を得、上六、六三の陰爻は各各陽爻の外にあるのであります。之を人事の象にとりますと、內心は剛健であつて、しかも人には溫和をもつて對する象でありますから物事大に亨通するのであります。しかし悅ぶのには、常に正を悅んで、不正は悅んではなりません。故に特に貞正に心掛けなければなりません。兌の時貞正を守れば、始めて天に順ひ、人に應じて安を得、眞の悅を得るのであります。

卽ち己を空しうして民を說ばせたならば、民は說んで其の勞を忘れ、難に赴くに當つては民に先つて、欣然として進むならば、民も亦その難に進擊して死も亦恐れないでありませう。次に兌には又口の象がありますから兌を二つ重ねた此の卦には互に問答する意があります。君子は此の象を觀て、明友と互に講習問答をして、友に傑れた者が居れば之に順ひ自分が朋に勝つてをれば之を敎へるやうにして眞の悅を養はねばなりません。

初九　此の爻は剛正であつて、兌の卦の初に居ますから、邪淫にならず、他を疑はず、他と相和して說ぶ形であります。

九二　此の爻は剛中の德がありますから、尊位の九五とは同じ陽で應じ難く見えますれど、よく孚を盡して、遂に九五にその志を信じられて、悔が亡びて吉を得る形であります。

六三　此の爻は、陰であつて陽の位に居ますから、巧言をもつて、說を致さうとする形で凶であります。

九四　此の爻は剛健中正ですが尊位にある九五と、巧言令色の象である六三の爻との間にあつて、九五に仕へて節を守らうか、六三の比爻と交つて情愛に溺れやうかと二途に迷ふ形でありますが、遂には病疾のやうな六三を隔て退けて、九五に比類しうるに到り、眞の悅を得て名譽を保ちうる形であります。

九五　此の爻は剛健中正で、尊位にあるために、邪陰のものにも刑罰を用ゐず、孚を以

て之を矯正しやうとする形です。一面に邪陰（上六）が陽正を落さうとする危險があるのですが、前に述べた尊位の德をもつて、孚で一貫してしまふのであります。

上六　此の爻は、兌の卦の主爻ですが、巧言令色で人の說を引く小人の形ですから、その德は光大でありません。

☴☵風水渙（渙は解く意）　此の卦は坎の上に巽風のある形で、水氣が凝つて、密雲となつたものを、風が吹き散らす象であります。坎は氣候にすれば冬であり、凍る意があります、此は氣候にすれば春の象で、春暖の氣を意味します。それで此の卦は、凍つた水の上に春風が吹いて來て、氷結を解く形でもあります。渙は離散、解消、解脫の象であります。そこで渙の卦が亨通する力をもつてくるのであります。但しそれは困難が解けて志望の少しく達する意味の亨通であります。又此の卦の外卦巽は風であると共に木の象ですから、木で作つた舟が水上に浮ぶ形となつて、大川を涉つて宜しい形で、人事にすれば、運氣の閉塞が開け、坎難が解けた形ですから、先王は、かかる時には宗廟に到つて、天帝、祖考を祭つたのであります。

初六　此の爻は、卦の始の位に居て、しかも陰柔でありますから、自ら難を救ふ事は出來ず、剛健な九二に順つて險を脫すべき形ですから、速に九二の爻の許に求めて行かねばなりません。さうすれば吉を得る事が出來ます。

九二　此の爻も坎險の中にあるのですが、自分丈では力が足りませんから、速に九五の尊位のもとに赴いて、身を安んずる處を得て、悔が亡びて、危いのを脫する事が出來るのであります。

六三　此の爻も未だ坎險の中にありますが、その躬の難を渙散するには、應爻である外卦の上九の援助を受けて遂に難を脫して悔なきに至るのであります。

六四　此の爻は柔であつて位正しく、剛健であつて、尊位の九五と陰陽親比してゐる君側の大臣にたとへられるのであります。此の大臣が、民の險難を渙らし解いたために、民はその德に感じて、夥しく聚つて喜ぶのでありまして、その功德は光大であります。

九五　此の爻は剛健中正で尊位に居まして、民の難をもつて己の難とし、大政令を大に發して民の坎險を渙散し、咎なきを得る形です。しかしこの大政令を出すには、それが再び出す事の出來ないものですから、責任上、汗の出かねるやうな苦を感ずるのではありますが、民の難を自分の難と感ずる處に、決然大政令を渙發する勇氣と決心を得るのであります。

上九　此の爻は、內卦の六三に應じて、丁度鬱血を渙き散らすやうに、その難を救つて、

自らは卦の最上位にあつて坎險より遙かな處に遠去かつて咎なきを得る形であります。

䷻水澤節（節は中を保つ意）此の卦は前の澤水困と反對に、澤の上に水のある形であります。澤に水が溢れると堤を破つて洪水となり、少きに過ぎると乾上つて、草木を枯らしてしまひます。それで水澤の卦には調節といふ事が一番大切になります。天地の運行も節があつて四季が成り、人も度を節し、又慾を制して、その財を保ち、自他を保全しうるのであります。節こそ亨通の大道であります。故に自己の力量に耐へ得ぬ事まで、無理に負擔して行くのは節の大道ではなく、苦節は極つて凶となるのであります。君子は此の象に則つて、貴賤の分に從つて、數理や度量を制定して行き、人の德行を計つてはそれ相當の報をせねばなりません。

初九　此の爻は陽であつて、陽の位に居ますから、その位は正しく、また事をなしても亨通するときと、通じない時のあるのをよく知つてゐてしかも、自分が卦の最下位にゐるために、進んで事を爲し得ない事を察して、內に止まつて家の外に出ないで、その行を愼んでゐる形ですから、咎がありません。總べて節とは進むべき時に進み、退くべき時に退き、よく中庸を得る事なのです。

九二　此の爻は、初九と反對に、內に留るために凶を招く形であります。これは陽であつて陰の位にゐる爻ですから位が不正であります。又應爻である九五とは同德（陽）相應じて事をなすべきであるのですが、時を知る明がないため家に蟄居して時を失ひ、苦節に陷つて凶を招くのであります。

六三　此の爻は陰柔不正であつて、內卦兌の主爻でありますから、悅び樂しむ事に專らとなつて、節を守る事を失ひ、遂には嗟き悲しまねばならぬやうな結果を招きます。節を守らぬために起つた失敗は自業自得で誰をも咎める事は出來ません。只自ら悔い改める他はありません。

六四　此の爻は柔正であつて、尊位に居る九五と陰陽相親比して之を輔佐してゐる形であります。之は臣節に安んじてゐる形ですから、よく亨通することが出來るのであります。

九五　此の爻は剛健中正で尊位に居るために、自らよく節を樂しんで、吉を得、またその行ふことも節を得て、天下の民も其の德を尊ぶに到る形であります。

上六　此の爻は節卦の極上にある爻ですが、ここには强ひて事を貫かうとする形があります。しかし强ひて事を貫かうとするのは、却つて節を誤つたもので、それは單なる苦節に過ぎません。その分に止まり節に安んずるのが本當の節であります。併し此の爻はとに

かく節のため苦んでゐるのであつて、忠臣の形にはなつてゐるのですから、理に於ては悔がないわけですが、實質的には凶を招く事が多く、貞正であつてもその行く道が窮る事があります。

☴☱風澤中孚（中孚は中心に孚のある意）此の卦は兌澤の上に、巽風のある卦で、風と澤水が相從つて犯す事がないやうに、互に相信じ、孚を捧げ合ふ形であります。

此の卦は、三、四爻の兩陰は、四陽の中に在る形ですから、內の虛い形、卽ち中心に私のない形であります。孚は國の大をも感化しますが、同時に豚魚のやうな無智なものでも孚には感ずるのです。孚のあるところ、何處に赴いても人と和し物と和し得るのでありますから、孚の中心が定まつてゐるならば、たとへ大川を涉るやうな危險をしてもよく功を奏する事が出來るのであります。そして孚は常に貞正を伴ふべきもので、貞正でない孚はあり得ないのであります。又貞正でないものに孚を致すのは天の應ずる道でないのです。孚と孚は貞に於て天に感じて行くのです。君子は此の卦の內に含んでゐる離火の象、☲を觀て、火のやうな明智と、衷心よりの孚を以て獄を裁いて、出來るかぎり死を緩くして生くべき道へ解放してやるべきであります。

初九　此の爻は剛正でありまして、四爻の陰爻と相應じてゐますから、その孚を完ふする事が出來ないで、中途で方向を變へるやうなことがあれば心の平安を失ひますが、志を變ずる事が無ければ吉を得るのであります。

九二　此の爻は剛中の德があつて、孚を致す形で、親鶴が、夜陰子を案じて鳴けば子鶴が之に和して應へるやうに、尊位の九五と相應じて、孚を捧げ合ひ、又初九に對しては信義をもつてのみ自分の好い爵祿を得たことを敎へ共に孚に導く形であります。

六三　此の爻は陰であつて、陽の位に居て、陰柔不正で孚が無く、剛陽であつて不正な上九と相應じてゐますので、一時は鼓舞して事を進めても、半途で之を止めて、心はたえず動搖して、泣いたり笑つたり定まるところの無い形であります。

六四　此の爻は柔正でありまして、尊位の九五と陰陽相和して、孚を致してゐる形で、正に君側の良大臣であります。その德は正大で、しかもよく臣節を守つて滿盛を極めると云ふ事もなく、初九と正應してゐても、私交は之を斷つて、專一に上にある五爻の君に孚を盡す形であります。

九五　此の爻は剛健中正で、孚を以て國を敎化する明君の形であります。民もその至誠に感じて、互に手と手を繫いで離れないやうに眞心をもつて臣節を盡し、咎のない形であります。

上九　此の爻は不正の位にあるために、卦の極にあり乍ら、鷄鳴高く空に登つて身は地上を離れ得ないやうに、虛聲のみの不信の者に象られ、永くその名聲を保つことが出來ず遂に凶に到る形であります。

䷽雷山小過　此の卦は艮山の上に震雷のある卦で雷氣が高く山上にあるので、少しく上に過ぎて、萬物の鼓動發育をし難い有樣でありまして、內外の兩卦の中位は何れも陰爻でもつて占めてゐます。陰は陽の大に對して小でありますが、之は小が大に過ぎた形であります。勿論少しく過ぎた方が亨通に便な事もありますが、その場合にも貞正でなければいけません。大體に於て小事には良ろしくても大事にはいけない形であります。又この卦は、鳥が翼を擴げて飛んでゐる形ででもあります。三爻、四爻を鳥の體としますと、初爻、二爻、五爻、上爻はその兩翼に當つてゐます。鳥が飛び過ぎて、後には只羽音が空しく殘つてゐる形は、人事に喩へると、高慢の象となります。すべて、かかる場合には、上つてはなりません。下るのが宜しい。謙遜の德によつてのみ大いに吉を得る形てす。君子は此の小過の形勢に處して、その行の恭敬を過し、喪にあつては悲を過し、日用の事は節儉し過ぎるやうにして宜しい。これらの事は少しく度を過して宜しい事であつて、樂や歡事に度を過してはなりません。

初六　此の爻は上六と共に、鳥の翼の末に當つてゐます。この爻は陰柔であつて、愼んで止まる事を知りませんから、丁度飛鳥が、最初は勢良く大空を翔るやうに、最初は尊大他を蔑視してゐますが、遂に翼が弱つて、どうとも出來なくなる形です。

六二　此の爻は、陰中の德がありますから、事を過すといふ過失がありません。故によく臣としての分を守つて、君を凌ぐやうな事がありませんから、吉を得るのであります。

九三　此の爻は陽であつて、陽の位にゐて、上六とは陰陽相應じてゐますが、此の上六の爻は傲慢な小人ですから、之は飽く迄應ずる事を防がねばなりません。若し之に從つてしまへば、必ず之に害せられて、どうとも仕方がないやうな凶になります。

九四　此の爻は陽であつて陰の位に居ますから位に當つてゐませんが、尊位にある六五と親比して咎なきを得る事が出來るのです。しかし自ら進んで事を爲すのは甚だ危險ですから、何事もなさず、永く貞正を守るやうに戒めてゐたなら、久しからず、平安を得る事が出來ます。

六五　此の爻は、既に外卦の雷氣が高きに過ぎて、雨を致さぬ形ですから、六五の尊位にある此の爻もその德未だ大ではなく、大事をなす事は困難であります。しかし乍ら小過の時にあたつて、小人の勢に壓せられて隱遯してゐる賢人を注意して探し出して之を世に

用ゐ仁德を天下に及ぼして天下を潤すやうにせねばなりまん。

上六　此の爻は陰柔であつて卦の最上位に居りますから、行ふ所が分に過ぎて遂に合し難く、自らは高慢になつて妄に事を爲さうとする形ですから、飛鳥が却つて網にかかるやうに災禍を蒙るのであります。

☵☲水火既濟　此の卦は易の六十四卦中で六爻共に總べて位が正しく、陰陽相應じ、その位は總べて整つてゐますから、功業全くなつて、諸事安泰の形であります。卽ち總べての事が既に濟んだのであります。此の時は總べて成つた處を保つ事に力を盡して、新に大事を起したり、大變革を爲すと却つて困苦を招く事があります。しかし小人は事が成就して安樂になると、安樂に止まつて勉勵する心がなくなり勝で、遂には却つて亂を生じて、その道が窮るものであります。君子は此の卦を觀て、治に居て亂を忘れない心を持つて、安泰の內に自己を反省し、豫め患時の事を考へて、之を防ぐやうにせねばなりません。

初九　既に氣力疲れて爲す力のない形で、獸が河を涉る時に、高く上げた尾を疲れて濡らしてしまふ形です。又車を引いてゐる獸が疲れてその輪を曳きづつて行くに到るやうな形でありますから、最早妄に進んではなりません。

六二　此の爻は柔順中正で賢臣の象ですが、既濟の時ですから、成すべき事がなく、應

爻たる尊位の九五も、その賢明を用ゐるに處が無いのですが、靜かに自ら守つて時を待てば、終に之を得るのであります。婦人が首飾が無くなつたので、外へ出られないからと云つて、盜まれたと云つて騷いで追い求めるやうな態度に出てはなりません。

九三　此の爻も、同じやうに、事を起してはならぬ形です。强ひて事を起せば、勝利を得ても天下悉く疲憊して、得失相償はぬ結果になります。

六四　此の爻は既に既濟の亂の始まつた形で、舟の水漏を終日警戒せねばならぬといつたやうな形です。

九五　此の爻は勿論剛健中正で尊位にゐるのですけれど、既に既濟の亂が始まつて心中に憂苦があるため、神の祐助を仰がねばならぬのですが、此の場合は、祭の盛大よりも、誠意をこめて簡素質朴に祭を行つて至誠至敬を盡すべき時であります。

上六　此の爻は、終の亂の形で、既濟が遂に亂れて、未濟に移らうとしてゐるので、丁度川を涉るのにその首まで濡らすやうになつた形で、甚だ危ふい形です。

☲☵火水未濟　之は、既濟と正反對で、六爻共に位が不正で、陰陽は相交はらず、水火は水火の用を成さなくなつた形です。しかしかる形勢に於ては、事は未だ濟らないとは言つても、時が來れば必ず濟るものでありまして、終には亨通する事になるのです。けれど

も、未濟が亨通するやうになる迄には非常な忍耐努力が必要でありまして、智慧が淺く、慎む處を知らない小狐のやうな小人は、始には奮發しても、川を渉りきらうといふ處で力が盡き、その尾を濡らして引き返してしまふやうな無氣力なことでは、何事を爲遂げる事も出來ません。君子は未濟の時こそ、よく慎んで物事を辨へ、正しい處にゐて努力奮鬪せねばなりません。

初六　此の爻は、小狐が急いで河を渉らうとして遂に力拔けて尾を濡らしてしまふやうなもので、柔陰をもつて未濟の最下位にゐるのですから、その力を知らないで急いで功を求めて、却つて災を招いた形であります。

九二　此の爻は剛中の德がありまして、妄に動き進む事がなく、正しい處を行ひ乍ら時を待つてゐる形でありますから遂には吉を得るのであります。

六三　此の爻は陰であつて、陽の位に居るのですから、志は強いのですが、力が弱いのでありますから、無理に進めば凶となります。併し未濟には遂に濟るべき道があるのでありまして、而も此の爻は、內卦の坎險の終らうとする處に在るのであつて、一歩前進すれば、難を遁れ得る形ですから、勇氣を出し大死一番、大川を渉るやうな事を敢行して宜しいのであります。時勢はたとへ事を行ふに凶に見えても、押し切つて進むべきであります。

九四　此の爻は、既に卦の半ばを過ぎ、未濟の困難を漸く脫して、未濟の中に既濟を生じた形で、貞正で進めば、吉となつて悔が亡ぶのであります。之は時運改革の時で、不正の寇を伐つて遂には功を得、勝利を得る形です。

六五　此の爻は、柔中の德があつて尊位にあります。そこで外卦離火の主爻で明智を備へ、比爻である九四の爻も之に孚を盡して、未濟の困難を除いて行きます。そこで終にその君德が普く天下を照すやうになつた形で、貞正一貫すれば吉であつて、咎がないのであります。

上九　此の爻は、未濟の卦の終にあつて、艱難全く脫して安泰を得た形です。君臣相和し、樂んでゐる形ですが、此時節度を失して歡樂に溺れるやうであれば、從來の成功を悉く失つて、再び困苦に陷つてしまひますから、節と孚と謙とを忘れてはなりません。

以上六十四卦、三百八十四爻は總べて辯證的に、象の變化を論述したものであります。これは更に人事の細事に應用綜合されて(占)となり、更にこの辯證方法の適用を個々の生活事象に當てはめる時に、宅相、方鑑、人相、手相等のあらゆる術數學が成立するのであります。

しかし乍ら象の變化を研究する中心は、永遠にこの卦と爻の變化の研究にあるのであり

ます。願はくば、再三、再四以上の諸卦爻の意を讀破し、味讀し、且又、その辯證法的意味を考察して、その眞意を充分に體得して、修養反省の資とされたいのであります。而して心を鎭め、精を凝らして、事象の大勢を判斷するには、易盤によつて之をなし、卦の構成の理解と、易斷の體驗とを共に綜合して、眞理を把握して下さい。

四　易の文獻

易に關する文獻は汗牛充棟も只ならず、主なる物を揭げても左の通りであります。

乾鑿度……闕名氏　易飛侯……漢　京房
太玄經十卷……漢　楊雄　子夏易傳二卷……
連山一卷……　古五子易傳一卷……
歸藏一卷……　丁氏易傳……漢　丁寬
蔡氏易說……漢　蔡景君　周易施氏章句……漢　施讎
韓氏易傳……漢　韓嬰　同孟子章句二卷……漢　孟喜
周易淮南九師道訓……漢　劉安　同梁邱章句……漢　梁邱賀

以前

周易京氏章句……漢　京房　易傳……漢　京房
易林四卷……漢　焦贛　周易薛氏記……薛虞
費氏易……漢　費直　費氏易林……漢　費直
周易分野……漢　費直　周易馬氏注三卷……漢　馬融
同劉氏章句……漢　劉表　同宋氏注……漢　宋衷
同荀氏注三卷……漢　荀爽　易乾鑿度鄭氏注……
易洞林……闕名氏　易通卦驗……闕名氏

唐

周易略例……晉　王弼　元包……後周　衞元嵩
周易陸氏述三卷……吳　陸績　周易王氏注……魏　王肅
周易王氏音……王肅　同何氏解……魏　何晏
周易董氏音……魏　董遇　同姚氏注……吳　姚信
同瞿氏義……瞿玄　同向氏義……晉　向秀
周易統略……晉　鄒湛　同卦序論……晉　楊乂
周易張氏集解……晉　張璠　周易張氏義……晉　張軌
周易于氏注三卷……晉　于寶　周易王氏注……晉　王廣

以前

周易蜀才注……蜀 范長生
同上徐氏音……齊 徐邈
周易要略……齊 沈鱗士
周易繫辭桓氏注……晉 桓玄
周易繫辭明氏注……齊 明僧紹
周易大義……梁 武帝
周易周氏義疏……陳 周宏正
周易何氏講疏……隋 何妥
周易崔氏注……崔覲
周易盧氏注……
周易王氏義……王嗣宗
莊氏易義……
關氏易傳……北魏 關朗

唐

周易探元 三卷……崔憬
周易元義……李淳風
周易黃氏注……晉 黃穎
周易李氏音……晉 李軌
周易妙于見形論……晉 孫盛
周易劉氏義疏……齊 劉獻
周易伏氏集解……梁 伏曼容
周易褚氏講疏……梁 褚仲都
周易張氏講疏……陳 張譏
周易姚氏注……姚規
周易傳氏注……
周易王氏注……王凱冲
周易朱子義……朱仰之
周易侯氏注 三卷……侯果
周易新論傳疏……陰宏道
周易新義……徐勛

易纂……僧一行
周易集解……李鼎祚
周易精義……太宗撰
周易口訣義 六卷……史徵

宋

漢上易傳 十一卷……朱震
易數鉤隱圖 三卷……劉牧
郭氏傳家易說 十一卷……郭雍
溫公易說 六卷……司馬光
誠齋易傳 廿卷……楊萬里
周易裨傳 二卷……林至
易圖說 三卷……吳仁傑
易學……王湜
周易義海撮要 十二卷……李衡
復齋易說 六卷……趙彥肅
古周易……呂祖謙
易說……呂祖謙
橫渠易……張橫渠
周易玩辭 十六卷……項安世
紫岩易傳……張浚
易璇璣 三卷……吳沆
易學啓蒙通釋……胡方平
東谷翼易傳……趙汝諧
易小傳 六卷……沈該
三易備遺 七卷……朱元昇
水村易鏡……林光世
丙子學易編……李心傳
周易古經傳……稅與權
周易輯說 十卷……王甲子
易傳證 四卷……徐總幹
童溪易傳 三十卷……王宗傳

周易攻異……翔鳳　文公易說 廿三卷……朱鑑
易原 八卷……程大昌　大易傳義附錄 十四卷……董楷
周易輯聞 六卷……趙汝諧　易說 四卷……趙善譽
正蒙書……張橫渠　太極圖說……周濂溪
通書……周濂溪　皇極經世書……邵康節
洪範皇極內篇……沈仲默　易傳……楊簡
易童子問……歐陽修　東坡易傳 九卷……蘇軾
吳園易解 九卷……張根　鄭氏周易注 二卷……王應麟
周易要義……魏了翁　易舉偶……魏了翁
伊川易傳 四卷……程頤　易學辨惑……邵伯溫
周易本義 十二卷……朱熹　易學啓蒙……朱熹
讀易私言……許衡　周易本義纂註 十五卷……胡一桂
學易記 九卷……李簡　周易啓蒙翼傳……胡一桂
俞氏易說集 十卷……俞琬　周易本義通釋 十三卷……胡炳文
易纂言 十三卷……吳澂　雲峯易義……胡洪輯

元

易象圖說……張理　周易會通 十四卷……董眞卿
周易參義 十二卷……梁寅　易圖通變 五卷……雷思齊
大易象數鉤深圖……張理　周易本義集成 十二卷……熊良輔
程朱傳義折衷 卅三卷……趙采　易外傳……郝敬
太極先天圖……郝敬

明

周易大全 二十四卷……胡廣　周易集註 十六卷……來知德
易經蒙引 十二卷……蔡清　古周易訂詁 十六卷……何楷
易經存義 十二卷……林李元　易象正 十六卷……黃道周
理學類編……張九韶　易象鉤解……陳士元
周易議卦……王崇慶　易象類編……章潢
易學濫觴……黃澤　河圖洛書論……來知德
玩易意見……王恕　學易記……金賁亨
仲氏易 三十卷……毛奇齡　推易始末 四卷……毛奇齡
河圖洛書原升論……毛奇齡　太極圖議遺議……毛奇齡
易小帖 五卷……毛奇齡　易韻 四卷……毛奇齡

春秋占筮書　三卷……毛奇齡
易本義九圖論……王白田
易學象數論……黃宗羲
讀易大旨……孫奇逢
周易本義辨證　五卷……惠　棟
李氏易解賸義……李富孫
周易校勘記　十一卷……阮　元
易章句　十二卷……焦　循
易　說　六卷……惠士奇
易通釋　十卷……焦　循
周易虞氏義　九卷……張惠言
虞氏易事……張惠言
虞氏易言　二卷……張惠言
易義別錄　十四卷……張惠言
易　例……惠　棟

以上西河合集中に收錄せるもの

周易觀象……李光地
河洛精蘊……江　永
周易述　廿一卷……惠　棟
周易本義爻徵……吳日愼
易圖明辨　十卷……胡　渭
易　音　三卷……顧炎武
日知錄　三十卷……顧炎武
易圖略　十八卷……焦　循
周易補疏……焦　循
周易虞氏略例……李　銳
虞氏易侯……張惠言
周易虞氏消息……張惠言
周易荀氏九家義……張惠言
易漢學　八卷……惠　棟

清

周易述補　五卷……李杜松
周易姚氏學　十六卷……姚配中
周易舊疏考證……劉毓崧
讀易漢學私記……陳壽熊
易書衷論……張　英
易　貫　五卷……俞曲園
艮官易說　二卷……俞曲園
周易互體徵……俞曲園
卦氣續考……俞曲園
易窮通變化論……俞曲園
周易述義　十卷……傳恒等奉勅撰
周易洗心　六本……任啓運
周易衷翼集解　二十卷……汪　注
周易述補　四卷……江　藩
虞氏易消息圖說……胡祥麟
易經異文釋　六卷……李富孫
周易爻辰用鄭義……何秋濤
周易玩辭集解……查初白
合訂刪補大易集義粹言　八十卷……納蘭成德
玩易篇……俞曲園
邵易補原……俞曲園
八卦葉子格……俞曲園
卦氣直日考……俞曲園
五行占……俞曲園
八卦方位說……俞曲園
周易孔義集說　二十卷……沈起元
周易指　四十五卷……端木國瑚
河上易註　八卷……黎世序
周易稗疏　四卷……王夫子

大日本帝國

周易衍義　三卷……山崎　嘉
周易經翼通釋　十八卷……伊藤長胤
讀易私說……伊藤長胤
周易義例卦變考……伊藤長胤
周易手記……三輪希賢
古易一家言……新井祐登(白蛾)
周易釋解　十卷……皆川　愿
周易講義……眞勢中州
左國易一家言……眞勢中州
李鼎祚易解義疏　十八卷……山本有信
啓蒙欄外書……佐藤　坦
周易古占法……海保元備(漁村)
周易講義……根本通明
易　經……高森良人
易經詳解……溪百年
周易乾坤古義……伊藤維楨
周易傳義考異　九卷……伊藤長胤
讀易圖例……伊藤長胤
周易新疏　十卷……室　直清
古易斷　十卷……新井祐登
易學類編……新井祐登
易　原……皆川　愿
象變辭占……眞勢中州
易雕題略……中井積德
九卦廣義……佐藤　坦
周易欄外書　十卷……佐藤　坦
高島易斷……高島嘉右衞門
周易講義……內田周平
易經講義……內田不賢
易經復古筮法……根本通明

易學講話……高瀨武次郎
周易活斷……高島嘉右衞門
周易釋故……松井羅州
易占の神祕……熊崎健翁
周易時義……長井金風
周易講義……柳田幾作
日東易蘇……高松貝陵

正名學文獻

姓名判斷……林　充胤
適業新論……同
名つけ字典……高島勝俊
姓名學寶典……同
名つけ字典……平野日宗
應用姓名學……窪田久德
名前の選び方……畑　觀洲
姓名構成祕法……石島道將
人の運命觀……長田光弘
選名術……清水英範
姓名判斷一元術……藤原壽山
姓名學寶典……遠藤卓人
名前のつけ方……井川觀象
姓名判斷學……木村茂市郎
姓名學奧傳……佐々木高明
應用姓名學……柄澤照覺
姓名判斷……奧田象現
名つけ親……田中雲龍
姓名學大觀……佐々木秦軒
撰名祕法……加藤格堂

姓名學神髓……根本圓通　姓名判斷神祕術……陽新堂主人
名前の附け方字引……同　姓名獨判斷……海老名復一郎
姓名學大意……同　姓名の神祕……熊崎健翁
運命の神祕……熊崎健翁　姓名の哲理……同

この內、通俗的に分り良いのは高島氏の高島易斷と、熊崎氏の易占の神祕です。本書の記述は之等の書に負ふ所が多いので讀者と共に感謝したいのであります。只本書では、漢文を入れて無理に支那風のものにしないで、純我國の易としての口語體の書き流し體で一貫したのであります。而して易で大切なのは辯證的の意味であります。

五　終

辯證法に出發し、數理に於てその辯證を發展し、易の象理に於て、それを綜合した記述が、以上述べた諸項であります。勿論辯證法がその根本になつてゐますが、各種の象の辯證に迄辯證法の應用を進めた事と、辯證法自體の各種の形式を定めた事は正しく東洋辯證法の特長でありまして、西洋の辯證法が辯證形式を只一つに固守し、或は唯心的にのみ、或は、經濟的にのみその適用を規定せんとするところに甚だしい幼稚さがあるのです。しかし辯證法の成立過程の分析に於ては、ヘーゲルの哲學や、マルクスの思想は、實に透徹し、且詳細を極めて、東洋の辯證法は、その點極めて簡單で、何故辯證法が、事物を考究する根元的事實になり得るかの根據を示す事は頗る薄弱であります。此點に於て、大日本帝國に於て、大成すべき哲學としての「辯證の哲學」は私の近く讀者に捧げる處のものでありますが、此處には、忘れられた東洋の辯證法が、若し西洋哲學に於ける如き、科學的研究方法と、表現形式を執つて發表される時に、始めて、大日本帝國が、世界を文化的に指導すべき、思想的、哲學的根據を得る事が理解されるでありませう。

又辯證法の實用的利用の方面は、東洋に於ては、占斷或は種々なる術數學となつて、實に異常なる發達を來したのでありますが、之も矢張科學的根據の研究を沒却したために、學問的には迷信となり、社會的には一種下等なる職業となつて墮落し終つたのであります。

易の卦及び爻の變化と其の意味について讀了された諸君は、如何にもその意味が、實生活に於て適切であり、精神指導の力が深刻であり、しかも整然として私らの理性に充分の滿足を與へつゝ、しかも情意の世界を顯出して餘すところの無いのを感じられたでありませう。

かかる神聖にして深遠、しかも平易簡明なる易が、一部占斷業者の專有物の如く見られ、且つ、學者及び一般知識階級人から、迷信視される理由は、全く易及び術數學の科學的闡明がなされてゐないからであります。著者は、此意味に於て、易と術數學の科學的研究に全力を盡す事は、大日本帝國の學徒の最も緊切なる義務と考へるものであります。

それには先づ第一に、易及び一切の術數學は單なる科學ではなくして、辯證法を基とする處の、辯證科學である事を知る必要があります。しかもその辯證法の概念は、西洋のそれとは全く異つて、完全なる辯證法である事であります。故に東洋辯證法の徹底的研究が何よりの先決問題であります。本書に示す處は、實にその一班に過ぎませんけれども、數の發展に適用した辯證法と、象の變化に適用した辯證法の適用の一例丈を示したのであります。

此の一例を能く了解する時、私らは、進んで種々なる生活現象に就いての辯證法の適用を解明する事が出來るのであります。

人體に就いての辯證的研究の一端は、既に「心療術」として發表し、その理論の一端は「心療醫典」の內に記述しました。その研究の完成は、必ず西洋醫學の非實際性を清算し、漢方醫學の非科學性の清算と共に、眞の皇方醫學の完成の基礎となるべきものであります。

人相手相等の科學的研究の一端は既に「鬪運術」にも發表しましたが、之は人體に於ける象理を分析し、更に數理辯證の適用によつて、研究して行く時は、最も實用的であつて、興味ある新精神分析學として完成すべきものであります。

家相（宅相）も全く辯證的根基の上に立つて證明さるべきものでありまして、將來の建築學は全く改變さるべき運命にあります。

更に方鑑の學の如きものは、最も迷信的色彩の濃厚なものでありますから、その科學的根據の鮮明は「鬪運術」に於て最も努力した處でありまして、その甲子起源の天文學的根據は、同人、稻葉交咸氏によつて發見されたのであります。卽ち單に便宜の規定と考へられた干支曆の紀元は、最近に於ては、我が允恭天皇の十三年甲子上元の前年、卽ち十二年の十二月の甲子月甲子日であつて、之が天文學的に冬至が、ぴつたり、午前〇時にあつてゐると云ふ事が證明されたので、始めて、干支曆は、冬至の時刻を標準として設定された曆である事が分つたので、易經中にもあるやうに古聖が、冬至の日を重んじて終日身を愼んで、天地の時の定まるのを待つたと云ふ意味が分るのであります。しからば、此證明のある迄は、易者、又は占業者と云ふ人々も、自ら何ら確信なくして人に說いてゐた事になります。

五終

ますから、如何に科學的證明が大切であるかと云ふ事が分るのであります。

科學的證明によつてのみ、現行干支暦の正確なる事が確信され、初めて自稱學者が研究をなさずして、迷信呼ばりをする不明を覺醒し、東洋の學こそ眞の學であつた事を腹の底迄知らせてやる必要があるのであります。

更に、半面に於て、科學的研究をなさずして、神聖なる易を賣り、術數の學を安易に金錢に易へ、確信なくして人を迷はす人々に對しても強い反省を促したいのであります。易は研究すべきものであつて賣る可きものでなく、又買ふべきものではありません。只教を乞ふべきものであり、誠心をもつて、金錢名譽利慾を離れて、神に對して立つべきものであり、神に代つて斷ずべき神聖事であります。

易は宗教の象であり、術數は眞宗教傳道の用具であります。而して、大日本帝國に於て、總ての宗教は綜合されて、易の各爻が五爻を輔ける如く、天皇陛下の大御業を輔け奉るべきものであります。しかしかかる意味の易は既に支那に於て消失したのであります。漢方醫學の正統が支那で消滅した如くに、易道も亦支那に興つて、今消失したのであります。

嗚呼、總て良きものは、總て大日本帝國に殘つてゐるのであります。佛教も基督教も、その發生地に滅んで、大日本帝國に於てのみその正統を保つてゐるのであります。世界文化の粹は總べて大東の帝國に集つて、此處に渾然たる皇法となつて結晶とするのであります。

我が易道に於きましても、既に德川時代に於て、高松貝陵は「日東易蘇」を著して、大東帝國の中心を論じ、却つて幕府の怒に觸れて、其著は盡く燒かれたのであります。

之を思へば、易の學的研究と、賣卜ならざる、眞の實用的體驗とは現代の大日本帝國の國民にとつては最も緊急なる重要問題であります。大日本帝國國民が、總べて易の眞理を體驗知了する時は、人事、物資の活用は數萬倍されて、必ず精神的に實際的に世界を統合し得る事は火を見るよりも明かであります。而して其の第一着手として正名と、易斷によつて、自己の生活態度を根本的に改轉する方法を具體的に示し、以て、大日本帝國國民が總べて行ふべき「國運術」の門を開いたのであります。

讀者は絶對的な確信をもつて、又誠心誠意をもつて此の門に躍入せねばなりません。讀者の一人が、之によつてその生活に眞の中心を得ますならば、大日本帝國は眞の忠良なる國民を一人得たのであります。故に讀者は此の眞理を知つた以上は、自ら行ふと共に、總ての人に對して、此の眞理を傳道せねばなりません。眞理は私すべきものでないのです。

五終

眞理は賣るべきものでは無く傳ふべきものであります。此處に私は經濟的價値を無視する者ではありませんが、その經濟的價値は、徹底的に大衆に開放されたもので無ければならないのでありまして、個人的立場に於て考へられてはならないのであります。

さて、易がかかる正しき態度をもつて研究され體驗されるためには、右の如き眞面目な態度を要しますから、西洋の占や迷信と同一視する事の不可なるは云ふ迄もなく、同時に遊戯的氣分でしたり、再三斷じ直したり、惡事を占つたり、態度姿勢を正さないで占つては決して神明に感應しないのであります。

易盤に對する時は、神器に對するのでありますから、室を清め、手を潔め、衣服を正し、心を誠にし、且、易盤の構成が辯證法的眞理によつて成るものである事を確信して之を用ひなければなりません。

さうすれば必ず百發百中するのであります。當らぬのは八卦ではありません。感應無き處に易斷は無いのであります。

著者の實驗によれば、個人的利害に卽しない、國家の大事、純實驗的な隱された物の判別、修養的立場から見た、自己の生活態度の斷定は必ず感應が判然とあります。

例へば昭和七年一月八日、午後五時三十分、兄弟平田凡人驅せ來つて、事變の突發を告げ、犬養首相の留任如何、荒木陸相の留任如何を易斷せん事を要求しました。しかるに、前者には、風地觀の四爻變を得、後者には、地風升の四爻變を得ました。前者を變卦すれば、前者には天地否の四爻を得、後者には雷風恒の四爻を得るのであります。而して翌日果して卦爻の示す通りの結果となつたのであります。時に米國覺書を發して大日本帝國に向つて意見を致した事に關し、帝國は如何なる形勢にあるかを占斷しました處風山漸の第六爻を得たのであります。變卦すれば、水山蹇の第六爻を得ます。此卽ち易中最も良き卦の一つであります。「鴻が空高く飛び上つて、しかも列をなして亂れず、整然として進んで行く有樣」であります。變卦は「尊位の大人と親しんで之に從ひ、內卦の九三と相應じて、志を同じくするならば遂に吉を得る。」と云ふ象でありまして、表には擧國一致して整然として進み、裏には天皇陛下を中心に頂いて、國民と相應ずるの形があつて、私らは、易斷の結果に感泣したのであります。

又、物を隱して、それを易斷する實驗は純粹な心理學的實驗として、嚴正な學的立場から行ふべきでありますが、之は同人、大東愛知と之を行つて、最初は失敗しましたが、研究の結果、色、形、性質と細く分類して易斷した場合には盡く適中しました、之によつて

も、一時に多數の事を斷ずる事は最初は出來ない事を實驗したのであります。

次に自己の一身上の修養として易斷する事は、旅行、事業は言ふ迄もなく、人事全般に亙つて、易斷して、一々感應を得て、以つて自ら戒め、自ら勵まし、或は確信を得、或は反省を重ねて感謝の生活を送つてゐるものであります。しかも之によつて、基督教や佛教に對する宗教的感激は日を追うて促進され、聖者の行蹟、教訓は勿論一々易理に合せる事を痛感するものであります。

さて、易斷は、易の先驗的辯證法で、もつて自己の靈性を發揮し、靈感を潔めるものでありますが、理としての易の研究に到つては、後天的辯證法として最も完成したものである事を、讀めば讀む程、考へれば考へる程、研究すれば研究する程、痛感するのであります。私は此の十數年來の疑問であつた、ヘーゲルの辯證法とマルクスの唯物辯證法との關係、その自然科學及倫理學宗教との關係等の問題が、判然と解答を與へられたのであります。その解明は「辯證の哲學」での問題でありますが、その體驗は本書に示す處の眞理を讀者が、直ちに實行する事によつて得られるのであります。

著者は「心療術」の發見に於て、又その「皇方醫學」としての完成に於て完全に易の辯證法によつて啓發されて來たのであります。自然科學的研究に於て私が行きづまつた時、絶えず新しい進路を與へて呉れたのは「易の辯證法」でありました。

又西洋哲學を學んで行きづまつた時、東洋哲學を探つてその漠然とした形に迷つた時、最後に綜合的解決を與へて呉れたのも此の易でありました。

宗教に入りつゝ、社會運動の大きな動きに、又宗教打到の叫びに、ともすれば、一寸は動かうとする心に、最後の鐵槌を下して、歸命の一路を示して信仰の旗の下に一貫する決心を與へ強めてくれたものも易でありました。

現實生活の難關に際して、私を救つて呉れたのも易でありました。而して大日本帝國國民としての眞の自覺を與へて呉れたのも實にこの易であつたのであります。

而して、易の象に就いての辯證に對して、數の連續發展の辯證、音の辯證、卽ち言表の辯證は、私に對して、實際生活の活動上に異常な力を與へてくれました。易が私に態度を教へてくれたやうに發展する連續數の辯證と文字の音の辯證は、表現の辯證となつて私の名を規定し、私の一切の表現を規定して、私の生活表現を一變したのです。

更に三宅正雄氏の教によつて家相方鑑の研究をなし、その科學的證明を成して後、始めて確信をもつて、昭和七年六月に方相を用ひ、眞西に向つて進み、遂に理想的な家相の家をぴつたりその方向に於て、直ちに得まして以來三宅氏の指示された通りの結果を得てゐ

ます。人相や體相に就いては自己の創始した「心療術」の立場から其の科學的證明をなして一々患者其他に就いて實驗考査を行つた結果、その改造の原理を發見しました。命理に就いては、その時間の測定が不可能の事と思つて、放棄せんとしましたが、中山禮民氏によつてその測定をして頂けた事に據つて、その科學的根據の闡明を確信し得るに到りました。その鑑定は下の如くでありました。「出生年月日、辛丑壬辰月甲戌日、出生時は巳己時と鑑定す。緣由、一、受胎月を癸未とし息元は生日甲戌より見て巳卯とし、一、生年月日干支の數を合算し、空亡天干數と九の數を除し、兩分して四、五の數を得、一、此の時の潮關係を見るに、辰月は大潮にして陰曆三月八日は朝潮が己の時にさしこめり、一、干合及地支の三合關係に於て、受胎息元の卯未の木局は亥を誘起し卯の對衝酉と生年丑とは己を誘發し、甲日の干合巳と組合ひ巳己となりて、金局をなし、木局を破り、己は亥の冲を受けて分離したるものにして、己時の己は其數を四とし、生數と一致す。仍て巳己の時生と鑑定す。」とその科學的證明は、「推命讀本」の問題ではありますが、己に時を決定する方法が與へられるならば推命の學も大いに活用の途を生じて來るわけであります。

しかし乍ら、推命や、家相、墓相等は、先天運の決定に役立ち、後天運の改轉に役立つのではあつても、先づ闘運の生活に入る門としては不適當であります。闘運生活への門戸は飽く迄、正名と易斷にあるのであります。正名は、闘運の活動を初める第一歩であります。易斷は、闘運のための反省への第一歩であります。この兩者は車の兩輪の如くなつて運命の改轉の出發點を與へるのでありまして、此の門からすれば、種々なる術數の學は自然と理解し得るに到るのであります。本立つて道生ず、と云ふやうに闘運術の根本を先づ樹立して、始めて、闘運の奥殿に入り得るのであります。正名と易斷によつて、如何に運命と闘ふ事が可能であり、人間は運命を支配し得るものであると云ふ事が、判然と認識出來るのであります。

しかも、言表の辯證と象の辯證とが、いかにぴつたり合致するか、數理、音理から觀察した意味と、易象から觀察した意味とが合致するかは、著者の姓名に於ても明かであります。前にも述べたやうに、平田内藏吉の姓名易象は「坤爲地」の三爻變であつて、それを變卦すれば「地山謙」の三爻となり、平田内藏吉の通名、平田丁山の姓名易象は「地山謙」の三爻變でそれを變卦すると、「坤爲地」の三爻となつて、互に相應じ、更に平田内藏吉の雅號「大東感明」の姓名易象は「乾爲天」の五爻變であり、その變卦は、「水天需」の五爻でありまして、數理辯證の示す意味とぴつたり合致して、寸毫の狂ひもないのであります。而してこの正名は、只數理辯證から丈なしたものでありまして、寸毫の私意をも加へなかつた

のであります。

かくて正名は、自己の活動方針を規定し、易斷による反省は大は天下國家の盛衰興亡、特に大日本帝國の國運を明示し、突發事變の明示となり、小は自己一身の出所進退に就いての確信を與へ、又自己の心の反省、淨化に最も有效に働いて、人生の行路に、疑念躊躇の念を一掃し、進んで宗教的生活への躍入の契機を與へ、神を信じ法に隨ふ人を作るのであります。

かくて正名と易斷に發した闘運活動は期せずして、「心療」による「人相」「手相」「體相」の改善、「推命」による「家相」「宅相」「墓相」等の改善となり、又只に言表のみならず、「書」「畫」其他一切の表現形式に中心を與へ、又は經濟的方面の問題を整へ、遂に大日本帝國が眞に世界を統合する眞正の生活力を全國民に與へるのであります。

願くば迷信と正信を、純理性的判斷の立場から區別して、各人各個に闘運の生活に躍入して、徹底的に其の生活を立直しその心を入れ變へて、國家富强、人類安泰の基礎を建設されん事を。

闘運讀本　終

天地渾厚の歌

大東感明

雲も行き雨も施し物みなの形なすかな大いなる天は
渾々と天今亨るあさみどり晴れ渡りたる大和の國に
純陽の乾天にあり敷島の大和の國にみかどゐませば
弘大の光を含み疆なき德包むかな柔き地は
厚ければ疆なければ物言はず地は物を載せて亨り行くかな
天と地に今渾厚の光あり大和島根の限り包みて

附記　本書に就いての質問は「大東盟舍」に於て總べてお答へ致します。「大東新易」に就いての講讀會は、毎月一日の晩六時より「大東盟舍」に於て開催します。

鑑定　希望者は左記の處に於てなされたし。但し大東盟舍に於ては只研究の相談に應ずる丈であります（時間も夜六時より七時迄に限ります）（心療は午前中のみ）。

心療・平田了山・東京市牛込區若松町七二（電牛込六一八二番）　大東盟舍
易斷・稻葉交咸・東京市神田區南甲賀町三（電神田三二九三番）　來蘇堂
命名・林　充胤・同　前　來蘇堂
家相・飯田天涯・東京市外高田町高田七八〇（電牛込五六一〇番）　經世堂
正名・大東感明・東京市牛込區若松町七二　大東盟舍
正命・大東愛知・同　前　大東盟舍
方鑑・柴田南海・東京市牛込區市ヶ谷八幡町六　十如學會
宅相・三宅正雄・東京市本所區太平町一ノ一（電墨田一七一番）　心療社
命理・中山禮民・東京市神田區南甲賀町三　來蘇堂
人相・櫻井大路・東京市麴町區有樂町一ノ一四ノ二　鑑定所
選名・熊崎健翁・東京市外大森西沼六七一　五聖閣

昭和七年三月三日印刷
昭和七年三月七日發行

鬪運讀本
定價壹圓五拾錢

著作者　平田內藏吉
東京市京橋區木挽町四ノ五
發行者　木村諭吉
東京市本郷區眞砂町三六
印刷者　龜谷良一
東京市本郷區眞砂町三六
印刷所　日東印刷株式會社

刊行所　木村書房
東京市京橋區木挽町四ノ五
電話京橋五九四一
振替東京二三九六〇

東京・波邊製本所製本・京橋

平田了山著

菊判五百頁・五百部
特製本・限定版

近刊

大東新易

新案易盤
新案易表附
選名新盤

右は易、方相、宅相、手相、人相、推命、選名の科學的原理を誰にも分る如く記述すると共に、科學的易斷器（易盤）による萬發萬中の易斷法を詳說し、更に易經の平易明快なる解釋を附したるものであります。千古の疑問たりし易斷の科學的證明は本書に於てなされました。學者も大衆も共に必讀の書であります。著者は哲學專攻の新進の文學士で、一面、皇方醫學の樹立者として心療術の創始者として知られ、且つ、「闘運讀本」の著によつて運命學の科學的研究に先鞭をつけた士であります。

東京市挽町四丁目
木村書房
振替東京
二三九六〇

平田内藏吉先生著（一千部限定版）

心療醫典

實價五圓五拾錢
書留送料卅六錢

全心療基本型圖其他病理解剖圖三色版、寫眞版、凸版口繪挿繪數多。
菊大判型。本クロス裝。
堅牢本上質紙六百頁。

平田先生救世的偉業の集大成。疾患は自己の力で、親身隣人の手でなほすべし、家庭には必ず一本を備へられたき一大聖典。
呼吸器病、生殖器病、慢性胃腸病、あらゆる傳染病、動脈硬化症等の治癒豫防に民間療法中の最高峰たる心療法の全展開、殘部僅少今直ぐ御需めあれ。

●全國書店にあります。品切の節は直接振替にて御註文下さい。

東京市挽町四丁目
木村書房
振替東京
二三九六〇

飯田天涯先生著

家相方鑑大全

一千部限定出版

實例家相圖面及實景寫眞百數拾葉入

菊判總クロス裝
金箔附六百頁
定價六圓
書留送料卅六錢

家相方鑑の道は、今や現代人士の熱心な注目を惹いて居る。方相學は、家相方鑑の道が包容する大宇宙の眞理に嚴密な科學的檢討を加へ、高尚悠遠な易學の理を最も卑近な日常事物に應用して、何人も之を實行する事によつて現實の效果を收め、生存の意義を全うせしめる人生の至寶である。

本書は、著者が學理に實地に研鑽三十餘年の蘊蓄を披瀝してこの更生せる方相學を實用的に詳述し、加ふるに著者自身の鑑定指導によつて異數の成功を收めた無數の實例中、五十餘件について百數十葉の家相圖面及實景寫眞を挿入して詳細な解說を試み、更に現代有數の學者に對する反駁論を附加したもので、其內容の洗練充實された事は既刊の此種書籍中到底比肩し得るもの無く、斯學の研究者に取つては實に無二の好指針である。

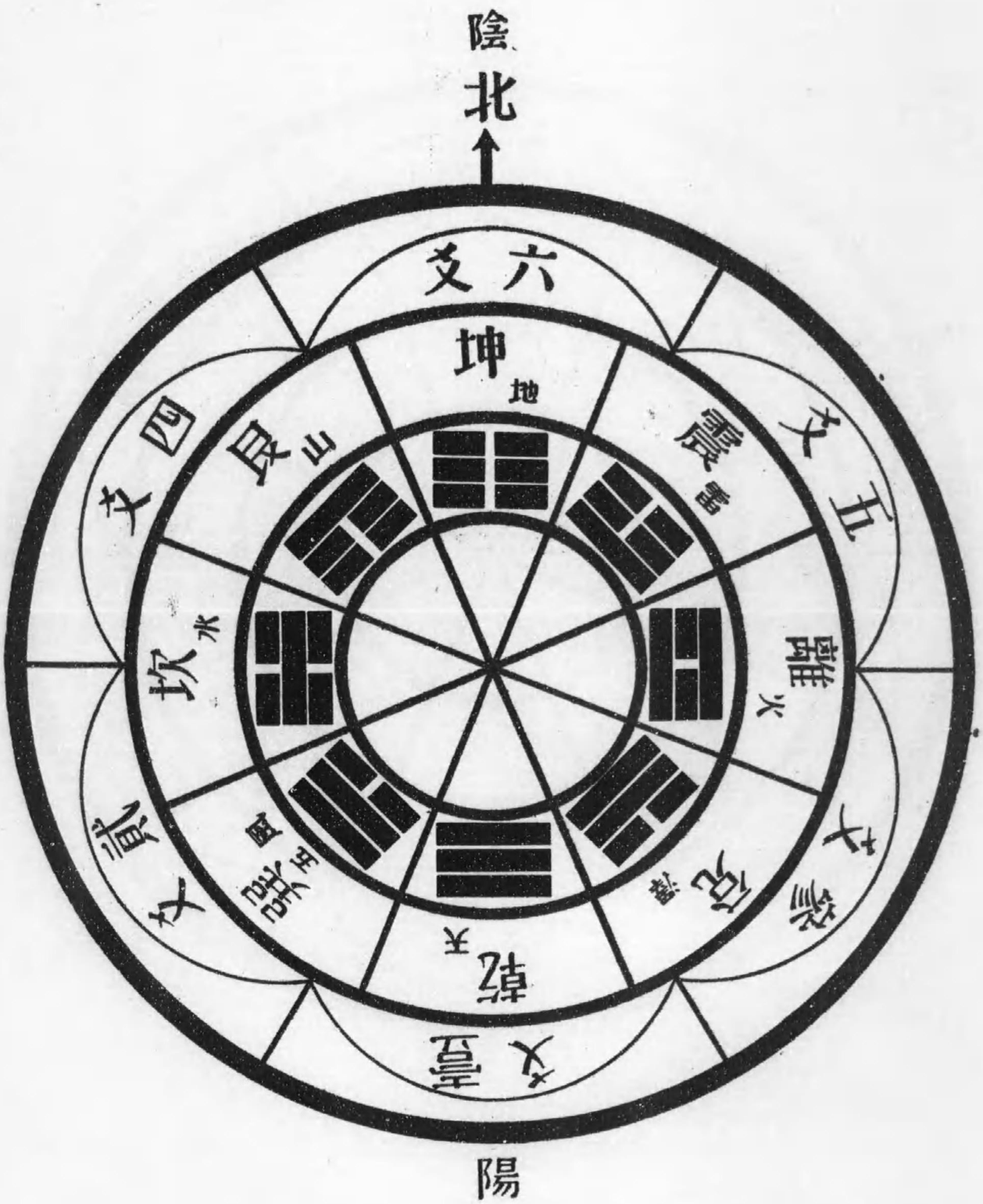
◎限定出版につき豫約註文に應ず速刻御申込あれ（三月中配本）

東京市京橋區木挽町四丁目五ノ橋

木村書房

振替東京二三九六〇

平田了山先生發明 易盤



特許出願濟（不許複製模作）
此易盤をボール紙か板に貼つて御用ひ下さい

鬪運讀本附錄

新選名表
變卦一覽表

木村書房刊

新選名表

（大東愛知編）

音／部	片假名	平假名	旁・扁・冠
1			
2	カ イ ア		
3	オ エ ウ		
4			
1		し く	
2		し こ う い	
3	か え あ	さ け	
4	お き	た そ	
5		な	
1	乙		
2	厂 匚	十	力 勹 人 儿
3	夂	尸 三 子 ⺍ 口 口 彳 巾	土 土 十
4	欠 牛 支 方 歹 片 木 气 牙 犬	心 爪 水 月	爪 月 戸 斗 止 日
5	穴 石	皮 白 ⺨ 田 立	王
6	网 糸 老	舌 米 ⺨ 艹 車	竹 来 戸
7	足 邑 貝	言 里 辵	走 角 酉
8	雨 金 門	阜	革
9	頁 革	食	韋
10	馬 髟 鬲	鬼	門
11	麻 魚		鳥
12			
13			
14			
15			
16			

音／部	に	ぬ	ね	の	は	ひ	ふ	へ	ほ	ま	み	む	め	も	や	ゆ	よ	ら	り	る	れ	ろ	わ	ゐ	ゑ	を	ん
1				ノ			フ	へ													レ						
2		ヌ			ハ	ヒ				マ		ム	メ		ヤ	ユ		ラ	リ	ル			ワ				ン
3											ミ			モ			ヨ					ロ			エ	ヲ	
4			ネ						ホ															キ			
1				の				へ																			
2						ひ							め						り	る		ろ					ん
3											み			も	や	ゆ	よ	ら			れ		わ	ゐ			
4		ぬ	ね		は		ふ			ま		む														を	
5									ほ																ゑ		
1																											
2	丫				匚		卩巳			又									刀								
3					巾					广					山	弓										女	
4						日	曰	火	攴	父									小		灬					斤	
5	禾				癶				矛				目			矢	广										
6						羊		舟	聿			耳				行		虫		来							
7	采										豆	身						豸						豕			
8							隹								門												
9																											
10									骨																		
11					麥																						
12																											
13																											
14					鼻																						
15					齒																						

音／部	あ
1	
2	
3	
4	
5	央
6	安
7	
8	
9	
10	晏 案
11	欺 庵
12	雅 無 蛙 幄
13	阿 渥 媼 暗 愛
14	
15	鞍
16	鴨 諳 謁 曖
17	
18	
19	襖
20	
21	鶯 櫻
22	
23	
24	靄
25	鬟
26	
27	

を	お	え	う	い	あ	部/畫
	乙			乙 一		1
			又	又		2
	于		于	巳		3
	王	曰 允	云	尹 尤 引 友 允		4
		幼	卯 右	由 幼 以 右	央	5
		衣 曳 回	羽 有 宇	衣 有 因 印 伊	安	6
	邑	延 役 均	佑	位 酉 邑 攸 佚 佑		7
往 汪 旺	於	易 炎 依	雨 侑	易 侑 侈 依		8
音	皇 屋	盈 衍 要 沿 泳 廻 垣	芋 油 音 畏 柚 施	怡 姻 幽 威 倡		9
翁	烏 恩	益 袁 窈 員 宴	耘 烏	倭 員 育 祐 殷 倚	晏 案	10
	苑 凰	悅 苑 英	尉	尉 唯 胃 移 悠 寅 偉	欵 庵	11
	黃	越 焰 淵 淡 惠		雄 爲 瑛 惟 圍	雅 無 蛙 幄	12
溫 飲 阿	溫 奧 園 媼 圓 鉞 鉛 詠 筵 羨 猶 煙	援 會 園 圓	量	郁 脩 猶 飲 猷 煙 游 楢 揖 意 彙 阿	渥 媼 暗 愛	13
	嫗	銑 猿 熒 榮 搖		維 飴 熊 溢		14
	毆 億 院 閔 銳 衛 腰 瑩 緣 葉	窯 瑤 演 慧 影		慰 院 逸 頤 郵 遊 葦 緯	鞍	15
鴛 陰 褞 橫	鴛 遠 謁 衛 穎	燕 燁 叡 園	運 褞	陰 謂 遊 燁	鴨 諳 謁 噯	16
醞 遠	應 憶	遙 霙 遠 營 檜 懌	醞	蔭 倜 優		17
	謳	爐 曜		醫 蔭		18
襖	穩 臆	塩 繪 繹 簷 瀅	韻	韻	襖	19
		釋 贏 譯 糶				20
隱	鶯 櫻			隱	鶯 櫻	21
		驛		懿		22
						23
	鷹	艷			靄	24
					靉	25
						26
						27

書/音	か	き	ぎ
1	： ：	： ：	： ：
2	： ：	： ：	： ：
3	下ゲ 个カイ 干リン	久キウ 己キヲ 乞キツ 巾キン 弓キユ	凡キ
4	亢カウ 介カイ 牙ガケ	仇キウ 今キン 及キフ 牛ギウ 斤キン 气キ	
5	可 加カ 巧カウ 尻カウ 甘カン 甲カフ 瓜クワ 禾クケ 外ゲワイ	丘キウ 叶ケウ 兄ケイ 巨キヨ	
6	仰ギヤウ 价カイ 交カウ 伉カウ 合カフ 好カウ 各カク 向キヤウ 考カウ 行ギヤウ 亥ガイ 灰クワイ 回エ	伎ギ 劫ケフ 休キウ 共キヨウ 刑ケイ 仰ギヤウ 兇キヨウ 匡キヤウ 吉キツ 机キ 旭キヨク 屹キツ	求キウ 曲キヨク 虫キ（蟲の略字ニモ） 臼キウ
7	亨キヤウ 何カウ 宏カウ 告カウ 坑カウ 孝カウ 改カイ 我ガ 更カウ 戒カイ 江カウ 汗カウ 角カク 串クワン	況キヤウ 亨キヤウ 妓キウ 局キヨク 吟ギン 岩ガン 岑シン 形ケイ 杏キヤウ 希キ 杞キ（國）	灸キウ 究キウ
8	佼カウ 享キヤウ 倔カウ 佳カ 函カイ 効カウ 岡カウ（俗） 岳ガク 快クワイ 岩ガン 庚カウ（俗） 杭カウ 官クワン 果クワ 和クワ	享キヤウ 京キヤウ 佶キツ 居キヨ 奇キ 宜ギ 季キ 岐キ 欣キン 宵ギヤウ 紘キウ	肌キ 汲キフ 玖キウ 金キン（ゴンニモ）
9	咸カン 寄カク 客カク 柳カイ 架カイ 柑カン 柯カ 河カウ 況キヤウ 界カイ 竿カン 看カン 罕カン 香キヤウ 冠クワン 廻クワイ 科クワ	九キウ 型ケイ 急キフ（人の姓） 姫キ 客カク 砥ギ 紀キ 祭キ 祈キ	革カク 香キヤウ
10	俄ガ 倖カウ 家カウ 剛カウ 峨ガ 夏カ 哥カ 峡カフ 恆カウ 拾カウ 校カウ 効カフ 格カク 耗カウ 耕カウ 珂カ 栞カン 肝カン 虹カウ 芥カイ 肯コウ 耶ヤ 高カウ 花クワ 芽ガ 航カウ	倚イ 倨キヨ 恭キヨ 校カフ 畜チク 笈キフ 級キフ 臭シウ	芹キン 衿キン 記キ 衾キン 臭シウ
11	勧カン 強キヤウ 教カウ 悍カン 悖ケ 眼ガン 狭カフ 紺カン 袈カ 貨クワ	島トウ 區ク（略字） 卿キヤウ 基キ 勘カン 崎キ 寄キ 崖ガイ 強キヤウ 救キフ	欲ヨク 毅キ 毅キ 皎ケウ 梗カウ 鯉キ 皎ケウ
12	稀キ 窪カ 睦ボク 脚キヤク 睡スイ 閉カン 項カウ 雁ガン 閑カン 開カイ 雅ガ（俗） 間カン 賀カ 街カイ 蛤カフ 絞カウ 皓カウ 硬カウ 畫クワ 涵カン 涯ガイ 殻カク 敢カン 寒カン 堪カン 嵒ガン 割カイ 剴カイ 凱カイ 球キウ	尭ゲフ 崎キ 強キヤウ 掬キク 幾キ 景ケイ 期キ 欺キ 菜キ 欽キン 涯ガイ 禁キン	義ギ 舎シン 経ケイ 脚キヤク 銀ギン 据キヨ
13	幹カン 嫁カ 感カン 會クワイ 暇カエ 愕ガク 港カウ 匪ゲイ 粳カウ 荷カ 蛾ガ 解カイ 茎カウ 号カウ 郊カウ 衙ガ 煥クワン	傾ケイ 極キヨク 揮キ 敬ケイ 暉キ 渠キヨ 煇キン 禁キン 琴キン 熙キ	僅キン 勤キン 煇キ 琴キン 禁キン
14	嘉カ 榎カイ 槐カイ 監カン 歌カ 槁カウ 箇カ 祓ケイ 綱カウ 裸カ 誠カイ 野カ 蛾ガ 荷カ 粳カウ 匪ゲイ 港カウ 愕ガク 暇カエ 會クワイ 感カン 嫁カ 幹カン	豪コウ 赫カク 閣カク 降カウ 降カウ 菓クワ 華クワ 管クワン 廓クワ	兢キヨウ 境キヤウ 僖キ 僥ゲウ 僞ギ 僑キヤウ 旗キ 獄キヨウ 綺キ 緊キン 箕キ 輕キヤウ
15	價カ 慷カウ 掴クワク 概カイ 樂ガク 漢カン 確カク 稼カ 皚ガイ 梟キヤウ 館クワン 葛カツ（俗） 緘カン 蝦カ 蝗カウ 號カウ 裟カク 解カイ 蛾ガ 荷カ 粳カウ 綱カウ 禊ケイ 箇カ 犒カウ 歌カ 監カン 槐カイ 榎カイ 嘉カ	緩クワン 寛クワン 鷹カン 駕ガ 蝦カ 蝗カウ 緘カン 葛カツ（俗） 館クワン 梟キヤウ 皚ガイ 稼カ 確カク 漢カン 樂ガク 概カイ 掴クワク 慷カウ 價カ 課クワ 慣クワン	嘻キ 嬉キ 儀ギ 嬌キヤウ 慶キヤウ 槻キ 漁ギヨ 毅キ 槿キン 畿キ 嶇ガイ
16	學ガク 橋キヤウ 挺カウ（國） 綿カウ 翰カン 衡カウ 蒼カウ 諫カン 諺ゲン 鋼カウ 諫カン 誠カン 國クワン 冀キ 器キ	嘉カ 橘キツ 曉ケウ 橇セツ 機キ 熹キ 窺キ 著チク	器キ 冀キ 嘉カ 橘キツ 曉ケウ 橇セツ 機キ 熹キ 窺キ 著チク
17	偏ヘン 擒キン 樞キウ 矯キヤウ 徽キ 磯キ 鬼キ（國） 禧キウ 舉キヨ 褻キヨウ 郷キウ 鞠キク	館クワン 闊クワツ 韓カン 鮫カウ 階カイ 鍔ガク 霞カ 講カウ（三ニモ） 艱カン 棟カウ 鬼キ 瞰カン 斂カン 檜クワイ 摑カン 壑ガク 嶽ガク 壕カウ	鞠キク 郷キウ 褻キヨウ 舉キヨ 禧キウ 鬼キ 磯キ 徽キ 矯キヤウ 樞キウ
18	檻カン 擱カク 濠カウ 濶クワツ（俗） 簡カン 鎧ガイ 顔ガン 額ガク 鵝ガ	擬ギ 歸キ 簣キ 謹キン 舊キウ 騎キク	檻カン 擱カク 濠カウ 濶クワツ（俗） 簡カン 鎧ガイ 顔ガン 額ガク 鵝ガ
19	勸カン 響キヤウ（一ニモ） 蟹カウ 鏗カウ 繪クワイ（エ）	響キヤウ（一ニモ） 襟キン 鏡キヤウ 鏡キヤウ	響キヤウ（一ニモ） 蟹カウ 鏗カウ 繪クワイ（エ）
20	礦クワン 覺カク 藁カウ 艦カン 還クワン（ゼン）	瓊キヤウ 鞏キヤウ 議ギ 競キヤウ 犧ギ 鞏キヤウ 警ケイ 鞏キヤウ 馨ケイ	瓊キヤウ 鞏キヤウ 議ギ 競キヤウ 犧ギ 鞏キヤウ 警ケイ 鞏キヤウ 馨ケイ
21	鶴カク ： ： ： ：	巍ギ 轎キヤウ ：	巍ギ 轎キヤウ ：
22	鑑カン 鑒カン 饗キヤウ 獲クワク 歡クワン 灌クワン	饗キヤウ 櫟キヤウ 饗キヤウ	饗キヤウ 櫟キヤウ 饗キヤウ
23	巖ガン	：	：
24	罐クワン	：	：
25	觀クワン	：	：
26		：	：
27		驥キ	驥キ

け	げ	く	ぐ	き	ぎ	節	画
							1
							2
	下	久 口 工 丸					3
介	元 幻 欠 犬	公 孔 戸 化 火					4
兄	玄 瓜 穴	丘 功 句 外 弘 瓜 禾 瓦					5
刑	圭 灰 劫	亘 光 休 共 回 灰 求		求 曲 虫 臼			6
形	希 改 見 劫	串 君 呉		灸 究			7
京	卷 卦 兒 快 侫	供 具 卦 和 官 快 果 穴 玖		肌 汲 玖 金			8
係	削 勁 奎 契 侠	九 冠 廻 枸 狗 皇 科 紅 糸 軍 芋		革 香			9
家	夏 徑 拳 枝 原	原 倶 宮 庫 恢 桓 晃 活 矩 紘 荒 花 訓 貢		芹 衿 記 衾 鬼 起			10
健	偕 卿 啓 堅 乾	偶 區 鳳 貨 貫		畝 毬 梗 皎 竟 狹 麥 魚 頃 近			11
捲	喬 堯 傑 惠 掛	寓 嵎 掛 掘 捲 款 畫 窪 筈 荒 桂 黄		稀 窟 窒 脇 給 胸 脅 翁 筋 晞 貴 蚕 釣			12
傾	敬 暄 暖 業 睨	義 禽 経 脚 鼻 筋 鉅 韮 鳩 会 愚 煌 輝 惶 寛 群 羣	塊				13
境	愿 僑 源 熒	据 銀 経 葵 謀 誼 輝 韋 偽 廓 管 菓 華 誨 郡 魁					14
倹	劍 劇 嬌 慧 慶	寛 慣 廣 摑 篁 綏 萱 舘 蝸 課 郭					15
嶮	剱 憲 橋 暁	勳 圜 槍 曇 遇 横 遑		錦 鋸 龜			16
撿	摯 榮 撃 檢 撥	檜 隅 閣 豁 館					17
瞼	誓 闕 鵑 難	瞑 簀 濶 獲 舊 環 瞿					18
勸	繁 繭 鯨 鏡 關	勸 擴 曠 穫 繪					19
厳	懸 瓊 競 獻 繊	懷 還 薫					20
顔	鶏 藝 鐃	驅 轟					21
儼	權	歡 灌					22
驗	顯	鑛					23
		罐 衢					24
		觀					25
							26
							27

音／劃	け	こ	ご
1		丨	
2			
3		口己工	
4		亢今公互孔午戸牛	
5		五古巧句巧尻巨弘甲	
6		伍光交抗瓦仰合后向好考行	
7		估亨克宏告切吾国呉更江言谷	
8	弦	交享刻効孤居坤姑昂昏杭昆欣空虎金	
9	型建界炫彦妍計	厚侯建剋哄狗炬紅皇芒虹込香	
10	桂皎笄肩笈芥泉秋肩芫虔花軒	倖偉健頃袈	恪倨候庫恆峡剛校効洪根晃肱耶耗肩耕紘笏笈烘
11	狽眼研竟狹畦紘鮫頃	婚堀國偶壺鳳御強梅浩毫梧悟晧舛晤敎強康	狹狐況枸故枯後巷建
12	現景稀碗潔脇給絢脅間閒	硬混殼欽棍掘	絞皓
13	經脛寛絹解詣鈸献	湖業愕極勤	琥煌渾港輝琴暗豪
14	溪盥箭禊竭罫尉華輕限	獄溝構稿箇綱	豪郊誇衙號莖粳窟
15	稽萱賢	樓樂慷廣	穀槨興糊稾
16	澯繩瑩縣諺横橋	衡縞篳	鋼膏追鋸
17	營嬌激謙谿霞鍵	懇壕	轟鄙鄕鮫鴻
18	警磬獻	濠鵠	
19		嚮曠鏗	
20		礦獻覺藁	
21		讙轟顧	
22		儼權饗	
23		鑛	
24			
25			
26			
27			

音／劃	さ	さ	ご	こ
1				
2				
3	山	三		
4	才	爪	切	
5	左	札		
6	早	在	再	
7	作	佐	些	
8	妻	刹	刷	
9	哉	削	促	
10	姿	宰	倉	高骨貢航
11	巣	参	偲	近魚
12	掃	散	創	
13	債	勦	催	
14	崩	察	奬	
15	磋	槽	摧	
16	撰	撒	儕	
17	燦	糟	操	
18	磨	爵	擦	
19	選	鵲	賛	
20	殺	藏	纂	
21	餐	餐	竄	
22	藻	讃		
23	曬	灑		
24	臟	蠶		
25				
26		讃		
27				

部	こ	ご	さ	ざ	し	じ
1	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
2	⋮	⋮	⋮	⋮	二人	入
3	⋮	⋮	三山		三刃	子上士女小 巳
4	⋮	⋮	切爪	才	四井仁丑什之心手少屯升	氏止支壬日
5	⋮	⋮	札左	⋮	且主仔仕出充史市正只申	生示足矢石
6	⋮	⋮	在早再西		伎丞任如夙寺字匠州向守	戌死旬戎式 次
7	⋮	⋮	些佐作坐	杉材壮	七些侍伸初伺助住	忍成束秀汐私身
8	⋮	⋮	刷剝淺妻	采沙	事侈叙卒周受使乳	兒刺命取姓宗姑
9	⋮	⋮	促削思哉	閂柴昨柵	信俊侵叙招思委性室	祝柴春 柘
10	航	貢骨高	倉宰娑差	財紗笊砦珊酒桑栽朔	十修乘借城射娑師峻怨巡徐指恤	弱差怐笊
11	魚	近	偲參巢雀崔爽筆窓祭産犀笙曹彩	細笹	偲唱執剩廡崎尋寂商蔘崇	常宿従將 振悉
12			散創掃最稍甥殘桟	象裁粧草策	創勝掃情敵授惇掌尋場斯捨晶植森桟殖深清	
13			催勦債嵯想歳煎羨笠聖莊裝蛸裘	戴	傷勦嗣掛慟暑新斟	湯渚楫湘椿楢惶猪測照
14	奬	察嶄惣槍造榮罪莒箏算	齊酸颯	柳	塾奬嘗壽慎像慈溜	爾槇準滋獅盡稱綬
15	摧	槽瑳箱	⋮		嘯犧摺數熟樟	箱緒稜篠磁皺漆樞
16	儕	撒撰撮	簑蓑篩蒼	鞘錚	儒儘樹憧樵	燒積燻潤
17	操	糟燦簀蔘	霜聳	齋	償嫦檣嶼燭	縮縱蔘襄聲蔗
18	擦	爵管鎖遺	雜		覬曙濡礎織	簫濕簪爵
19	贊	鵠選	⋮	⋮	櫛潟獸薪	繩薔辭識遵
20	纂	藏霰臍	薩		壞繻懦嬢籍	鐘薯籍觸藉
21	竈	饌			攘續屬賺	邇
22	讃	藻			鑄穫鬚	覦
23	瀘	曬			瀘鷲	曬
24	蠶	朧			廛讓	釀
25	⋮				⋮	
26	讚				燭	
27						

音／數	じ	し
1		
2		
3		
4		
5		
6		戎 収 旨 朱 此 肉 至 舟 而 臣 糸 耳 自 色
7		赤 車 辰
8		尚 所 承 政 昌 松 昇 枝 昔 杵 沙 直 祀 社 舎 青
9		注 沼 治 相 祇 甚 省 秋 肖 昏 耶 重 芍 首 食
10		拾 時 株 晉 書 桎 殊 洋 狩 殉 洲 津 祝 秦 真 祠 秤 砥 神 純 者 紙 衽 臭 芝 酒 針 酌 隼
11	旌	晨 敍 斜 梓 浚 梢 涉 率 祥 笙 珠 筍 盡 章 紳 習 終 紫 羞 若 處 袖 術 赦 責 雀
12	淑	淨 琇 淳 盛 竣 筍 稍 疎 絲 舒 絢 粧 絮 荏 脂 舜 翔 粟 荀 芹 詞 視 証 衆 詔 鈔 象 順 黍 軫 貳 閏 集 須
13	堅	聖 肅 稔 脩 唇 莊 蜀 試 詢 蛸 裝 詩 跡 資 雌 鉦 頌 馴
14	等	種 箏 綽 莒 聚 裳 賑 誦 飼 誠 飾 韶 飽
15	諗	質 諏 賞 蝕 衝 諄 賜 進 陣 趣 醇 震 鋤 霄
16	豫	輯 鞘 錠 錫 陳 靜
17	趨	鍼 鍾 駿
18		
19		
20		
21		
22		
23		
24		
25		
26		
27		

音／數	せ	ず	す
1			
2			
3	夕		寸
4	井		
5	世		主
6	亘	朱	州
7	串	足	吹
8	刷	炊	垂
9	咲		
10	借	祟	洲
11	寂		彗
12	善		
13	勦		睡
14	察	聚 翠	粹
15	嘯	醉 諏 樞	數
16	瞻	錐 陲	遂
17	擅	穂	燧
18	濟	雛	惹
19	蕭		
20	瀞		繻
21	殲		隨
22	攝		
23	蘇		髓
24			
25			
26			
27			

頁／行	ぞ	そ	せ	ぜ	す	ず
1						
2						
3			夕	山 千 川 小	寸	
4		爪	井	切 少		
5			世	井 占 仙 正 生 石	主	
6		存 早	亘	全 先 西 舌	州 朱	
7	壯 宋	村 杣 寸 足	串	声 成 汐 赤	吹 足	
8	宗 祖 所		刷	制 刹 刺 妾 姓 妻 折 征 戛 政 斉 昔 舎 青	垂 炊 辷	
9	俗 促 則 奏 相		咲	前 宣 招 性 拓 折 昭 星 泉 沼 省 肖 冑		
10	倉 孫 息 桑 祚 租 笊 素		借	城 席 扇 栖 栓 洗 洒 閃 笑	洲 祟	
11	側 曹 巣 爽 笙 窓 組 粗		寂	彗 専 彩 旌 旋 戚 涉 梢 犀 紹 細 設 苦 雪 責	彗	
12	創 尊 巽 惣 掃 朔 稍 疎	鈔 詔 荐 証 茜 脊 絶 税	単 善	情 捷 晰 晶 椄 晴 清 然 盛 浅 朔 淨		
13	勦 想 楚 湊 測 照 荘 蛸 装	鉦 靖 跡 詹 齊 韶 誠 説 逍 誓 篋 羨 蛸 詮 照 煎 湛 歳 揃	勦	勢 僊 嵯 察	睡	
14	奬 僧 像 愬 槍 綜 粽 箏 菖		僭	嵯 準 碩 精 箋 菁 蜻 誓 逍 説 韶 齊	粹 翠	聚
15	層 増 槽 箱		渐	摺 節	數 樞	諏 酔
16	撒 蒼 鉾 鞘	静 錫 鞘 錢 醒 蓆 篠 燃 潛 燒 潟 積	瞻	壇 儕 整 撰 戰 樵 橇	遂 陲	錐
17	操 簇 燭 糟 縦 聳 總 遜		擅	澤 禪 甚 聲 績 餞 鍬 鮮	燧 穂	
18	叢 礎 遭 雑		濟	繕 瞻 鼎 膳 繡 適 蕉 蟬	蕊 雛	
19	贈		蕭	濺 薛 譔 選		
20	藏 觸		瀞	籍 瞻 霰 臍 還 藉 釋 闡	繻	
21	績 屬 竈 藪		殲	纖 饌 饒	隨	
22	蘇 藻		攝	霽		
23			蘇	簽 纖	髓	
24	臓					
25						
26	矚					
27						

音／節	て	で
1		
2		
3		
4		弔
5		
6		汀 灯
7	刔 弟	廷 町 呈 低
8	的	帖 定 典 俤
9	亭	貞 訂 帝 俤
10	砥	恬 庭 哲 展 偶
11	梯	挺 悌 彫 偵 停
12	添	淀 替 朝 尊 堤
13	跳	鉄 鈿 碇 殿 傳
14	逞	艇 肇 禎 槙 嫡
15	締	滴 徹 廛 敵 摘
16	錠	醍 蹄 諦 潮
17	點	遞 蔦 澱
18	鎮	轉 適 濘
19	鏑	薙 擲
20		
21	鐵	躍 纏
22	疊	聽 疊 巔 攝
23		體
24		
25		廳
26		
27		

音／節	ぞ	そ	だ	た
1				
2			刀	乃
3				大
4			太	内
5			台	旦 夲 代 丼 他
6			打	朶 宅 多
7			男	弟 托 兎
8			汰	岱 帑 奈 宕 坦 卓 到
9			耐	炭 泰 段 桁 枴 拆 拓 帝 度 待
10			託	納 討 耽 桃 島 唐 党 倒 倬 淡
11				袋 苔 胎 第 梯 帶 堂 啄
12				淡 淘 棠 替 棹 敦 探 単 象 詔 栗 粧 草 窗
13				脫 當 琢 湛 湯 暖 憚 塘
14				誕 臺 端 態 對 團 瓢 造 速
15				魄 鋭 酗 啖 腦 滯 歎 彈 摘
16			陶	醍 逵 道 諦 糖 潭 撞 橙 導 檀 瞻
17				黛 隊 螳 澤 檀 檐 擔 擇 霜
18			題	蕩 鎚 濤 箪 獰 濯 斷 櫂 擡 戴
19				蟷 膽 禱
20				黨
21				鐸
22				囊
23				褝 體
24				雛
25				
26				
27				

音／節	ち	ぢ	つ	づ
1	丶			
2				
3		丈 女		
4	中 丑	屯 弔		
5	召	尼		
6	冲	仲 地 灯 竹		
7	町	杖		豆
8	佻	宙 忠 杠 沖 狃 治 直 笠 長		
9	勅	峙 剌 柱 注 致 紂 肘 重 貞		辻 椙
10	偶	偉 持 株 朕 畜 砧 秩 紐 衷 釘		
11	停	偵 啄 張 敕 挺 畫 窕 眺 笞 紬 芋 釣 鳥 頂		
12	植	智 筑 絮 絶 茶 註 貯 超 軸		
13	傭	塚 椿 猪 稚 雉 飭 馳		
14	嫡	暢 禎 置		對 圖
15	徵	漲 緻 腸 著 調 陣 駐		
16	儔	澄 潮 築 蓄 陳		頭
17	擇	濃		隊
18	儲	鎮 蟲 鎮		
19	擲	薙		
20	籌	孃		鬪
21				
22	疊	聽 鑄 疊		
23				
24	蠹			鬪
25	廳			
26				
27				

音	て	て	ど	と	な	に	ぬ	ね
1								
2				刀	乃	二 人		
3			土			刃 女		
4		弔	斗	屯	内	仁 丹 壬 日		
5			夲	冬				
6	汀	灯	吐	同		任 如 肉 耳		年
7	玎	低 弟 廷 町 呈	禿	杜 呑 努 兎	男	忍		
8	的	帖 定 典 佻	竺	東 帑 弩 宕 到	奈	兒 乳		念
9	亭	貞 訂 帝 俤	肚	突 栂 栃 度 峠	南	柔		
10	釘	砥 恬 庭 哲 展 偶		洞 桃 桐 島 唐 党 倒	衲 納	紘 弱		
11	頂 鳥 釣 第 眺 寃 條 梯 挺 悌 彫 偵 停			豚 堂 啄 動	那			
12		邸 迪 超 貼 程 添 淀 替 朝 尊 堤		胴 統 等 答 童 盗 筒 登 執 淘 棟 棠 棹		貳 荏		然
13		鼎 電 跳 鉄 鈿 碇 殿 傳		頓 督 當 湯 渡 楡 働 塘	楠	稔		
14		銚 遞 逞 艇 肇 禎 槙 嫡		銅 通 透 途 僮 圖 園		認 爾		
15	霆	調 蹀 締 滴 徹 廛 敵 摘		酗 腦 菫 稻 犢 樋 徳				熱
16		錠 醍 蹄 諦 潮		頭 陶 道 篤 都 糖 燉 燈 撞 憧 橙 暾 導				燃 奮
17		點 遞 蔦 澱		螳 瞳				
18		鎮 轉 適 寧		蕩 濤 獰 櫂				
19		鏑 薙 擲		蟷 疇				
20				闘 黨 騰 鐙				
21		鐵 躍 纏		藤 籐		邇		
22		壘 聽 壘 巓 攝		讀				
23		豈						
24				鬪				
25		廳						
26								
27								

音	つ	づ
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7	豆	
8		
9		辻 桙
10		
11	頂 鳥 釣	
12		
13		
14		對 圖
15		
16	頭	
17	隊	
18		
19		
20	闘	
21		
22		
23		
24	鬪	
25		
26		
27		

音	ふ	ぶ
1		
2		
3		
4	夫フ	文ブン 父ホ
5		
6		
7	甫ホ	
8	斧フ	服フク 武ブ 物モツ 阜フウ
9		
10	祓フツ	紋ブン 紛フン 芙フ 蚊ブン
11	問ブン	婦フウ 捕ホ 浮フウ 符フツ
12	普ホ	賁ヒフ
13		
14	舞フ	輔フム ホ
15	複フク	賦フ 部ホウ
16	撫フ	蒲ホ フ
17		
18		
19		
20		
21		
22		
23		
24		
25		
26		
27		

音	の	は	ば	ひ	び	ふ	ぶ
1						フツ	
2				七ヒ			
3			凡ボン 亡ボウ 万マン				
4			反ハン 巴ハ 方ホウ 毛モウ	不フ 匹ヒツ	比ヒ	分フン 不フ	勿ブツ ホ
5			半ハン 包ホウ 北ホク 卯ボウ 末マツ 白ヒク	丕ヒ 包ホウ	必ヒツ 未ミ	平ヘイ 皮ヒ 疋ショ 白ヒク	弗フツ 布ホ フ
6			妃ヒ 百ヒヤク 帆ハン 庄シヤウ	妃ヒ 百ヒヤク	牝ヒン		伏フク
7			伴ハン 判ハン 伯ハク 坂ハン 坊ボウ 忙ボウ 忘ボウ 呆ボウ 毎ハイ 汎ハン 貝バイ	兵ヒヤウ	尾ビ	佛フツ	巫フツ ホ 歩ホ
8	八ハチ	佩ハイ 胃ボウ 坡ハ 妹マイ 房ボウ 扇ハン 杷ハ 放ハウ 杯ハイ 枚マイ 沛ハイ 版ハン 盲マウ ミヤウ	坡ハ 佩ハイ 弥ヒヤ ヒヤ 1.異 坪ヘイ 坡ハ	佩ハイ	必ヒツ 未ミ	奉ホウ	府フツ ホ 扶フ
9	冒バウ	拍ハク 冒モウ 品ヒン 柏ハク 法ハウ 波ハ 味マイ 抱ハウ 拜ハイ 畑ハタ 盃ハイ 狛ハク 泊ハク 泡ハウ 柏ハク 芒ボウ	拍ハク 品ヒン	波ハ 柏ハク	秒ビヤウ 眇ビヤウ	便ベン	風フウ
10	納ダフ ナフ 衲ダフ ナフ	做ハウ 倍ハイ 俳ハイ 旁ハウ 畔ハン 畠ハタケ 砲ハウ 破ハ 被ハ 肺ハイ 般ハン 竝ヘイ 秣マツ 祓フツ 紡ボウ 紡ボウ 毫ハウ 肺ハイ 般ハン 芳ハウ 配ハイ 馬バ メ	祓フツ 秘ヒ 俵ハウ	秘ヒ 肥ヒ 豹ヘウ		俯フ	剖ボウ 峰ホウ フ
11		培ハイ 婆ハ 徘ハイ 敗ハイ 晩ハン 望バウ 梅ハイ 班ハン 背ハイ 胚ハイ 袢ハン 胞ハウ 茅ハウ 麥バク キヨク 訪ハウ 舶ハク 胖ハン 范ハン 販ハン	彪ヒウ 畝ヒン 斌ヒン 棍ヒン 瓶ヘイ 毘ヒン ヒウ 苹ヘイ 苗ベウ ヒウ メウ			副フク 冨フ	務ブツ ム
12	能ノウ	博ハク 報ホウ 媒バイ 堡ホウ 斑ハン 帽ボウ 棒ホウ 棚ハウ 猛ボウ 番バン 発ハツ 茫ボウ 迫ハク 阪ヒク 筏バツ	媚ビ 弼ヒツ 妻ヒ 評ヒン 扉ヒ 賁ヒ 閔ビン 迫ハク			富フウ 傅フ	復フク フウ
13	迺ダイ 農ノウ	洋ヤウ 煤バイ 琶ハ 稗ハイ 莫バク 苺バイ 飯ハン チ 鉢ハツ	微ビ 渺ビウ 琵ビ 碑ヒ 猫ベウ			楓フウ	附フ ホウ
14		搏ハク 搬ハン 箔ハク 網バウ 莽バウ 貌バウ 髣ハウ 閥バツ 鞐ハン 飽ハウ シ	鼻ビ 賓ヒン 蜜ミツ 脾ヒ 翡ヒ 緋ヒ 瑟ヒツ			搏ハク	箙フク
15	腦ノウ	劈ヘキ 暴ボウ 漫マン 瑪バ 盤バン 磐ハン 範ハン 罰バツ 賣バイ 裸ハウ 萬バン 蠕ハン 靠ハイ 靄ハイ 魄ハク	辟ヘキ 劈ヘキ 廟ベウ 標ヘウ 媚ビ			敷フ	蝠フク
16		播ハ 撲ハク 喃バン 罷ハイ 縛ハク 罵バ	瓢ヘウ 罷ビ			奮フン 噴ホン 憮ブン	
17	濃ノウ	繁ハン	彌ビ 標ヘウ 錨ベウ			暼ヘツ 膚フ	
18		繙ホン 蕃ハン	繙ハン 蹕ヒツ 鄙ヒ			豐ホウ 覆フク	馥フク
19		攀ハン 寶ハウ 簸ハ 瀑ボウ バク	濱ヒン 躄ヒ			簿ホ	霧ムフ ブ
20		寶ハウ 攀ハン バン	微ビ				
21		霸ハ 飜ハン ホン	罷ビ 飄ヘウ				
22		鰻バン マン					
23							
24							
25		蠻バン					
26							
27							

首	ふ	ぶ	へ	べ	ほ	ぼ	ま
1	：	：	：	ノ	：	：	：
2	：	：	：	：	卜	：	：
3	：	：	：	：	凡 亡		亡 万
4	夫	父 文	卞	反	勿 夫 方 毛 父 木		： ：
5	：	：	包 丙	弁 平 皿	北 卯 布 母 戊 本 予 目		： 末
6	：	：	米 糸	： ：	牟 庄		： 米
7	甫	：	兵 兎 別	：	忙 忘 歩 甫 体		忙 忘 毎
8	斧	服 武 物 阜	並 坪	： ：	冒 奉 房 扶 放 朋 牧 沐 盲		妹 孟 枚 盲
9	：	： ： ：	便 勉 柄 炳	砂 秒 表	保 勃 品 圀 拇 姥 抱 法 泡 芒 冒		味 枉
10	祓 紋 紛 芙 蚊 釜		倍 俵 冥 竝 袂	豹	俸 剖 圃 峰 峯 旁 畝 砲 秣 紡 竝 老 舫 芳 釜		埋
11	問 婦 捕 浮 符		晩 瓶 苹 秤 苗	閉	捕 浦 望 烽 眸 胞 芋 訪		梅 望 麻
12	普 賁		評		報 堡 帽 捧 棚 棒 普 猛 發 貿 茫		媒 猛
13	： ： ：		猫 渺 鵈		莫 睦 補 蜂 附		： ： ：
14	舞 輔		暝 碧 綿		夢 僕 網 莽 葬 輔 貌 鉾 髣 逢 鳳		綱 葬
15	複 賦 部		僻 劈 幣 廟 弊 篇 標 編 暝 蝙		墨 慕 暴 莽 舗 裸 部 鋒		摩 漫 萬
16	撫 蒲		壁 瓢 辨		噴 撲 穆 蒲 默		磨 蹣
17			晢 漂 繁 錨 併		蓬 蓬 縫 裏		：
18			鞭 ：		濛 翻 豐 ：		麿
19			： ：		寶 瀑 簿 鵬		：
20			礬 辮		寶 艨		邁
21			辯		黼		：
22			邊				鰻
23			變				
24			：				
25			鼈				
26							
27							

首	ふ	ぶ
1	：	：
2	：	：
3	：	：
4	夫	不 分 勿
5	：	布 弗
6	：	： 伏
7	甫	佛 巫 歩
8	斧	奉 府 扶
9	：	便 風 飛 美
10	祓	紋 紛 芙 蚊 釜	倍 俵 冥 竝 袂 豹	剖 俯 峰
11	問	婦 捕 浮 符	晩 瓶 苹 秤 苗 閉	副 冨 務
12	普	賁	評	富 傅 復
13	： ： ：		猫 渺 鵈	附 楓
14	舞	輔	暝 碧 綿	福 搏 箙 迫
15	複	賦 部	僻 劈 幣 廟 弊 篇 標 編 暝 蝙	腹 敷 蝠
16	撫	蒲	壁 瓢 辨	噴 奮 憮
17			晢 漂 繁 錨 併	膚 晢
18			鞭 ：	覆 豐 覆
19			： ：	簿 霧
20			礬 辮	
21			辯	
22			邊	
23			變	
24			：	
25			鼈	
26				
27				

畫	よ	ゆ	や	も	め	む	み
1							
2							
3			也	亡			
4	与 予			木 毛 文			
5	用 央 幼	由 幼	央	目 戊 母		予	民 未
6	羊 伊	有	羊		名	牟	名
7	谷 余	佑	冶	忘 忙	妙		妙
8	沃 於	攸 邑 酉 侑	易 夜 八	門 盲 物 沐 牧 孟	明 命	武	盲 明 晏 命 味
9	要	勇 俞 幽 柚 油	耶 約 映	籾 拇 姥 冒	面 秒 眇		美 眉 秒 眇
10	窈 恙 容	容 袖	益 洋 恙	耗 老 紋	馬 眠 冥		眠
11	翊 涌 欲 浴 庸	悠	野 斜 埜	茂 望	苗	眸 務	苗 罠 敏
12		雄 琇 遊 喩		猛 帽	棉	無	閔
13	頌 猶 楊 佛 揚	裕 帑 猶 猷 楡 游 楢 愈 愉 揖	爺 楊 揚 椰		酩 猪 盟		猫 盟 微
14	銚 與 溶 搖	維 熊		莽 網	鳴 銘 暝	鉾 舞 夢	蜜
15	葉 窯 瑤 漾 様	郵 遊	養 漾 様	墨	賣 瞑 瑪 廟		廟
16	餘 豫 蓉 燁	遊 諭 融 燁		默 穆		憮	
17	遙	優	陽 霙				彌
18	燿 翼 曜 陽			濛			
19	膺		繹 櫟			霧	
20	耀		譯	艨			
21	譽		躍 藥				
22							
23							
24	鷹						
25			鑰				
26							
27							

音／節	よ	ら	り	る	れ
1					
2			了力ヨク		了
3					
4	与予				
5	用央幼		立令		令
6	羊伊	老	吏六		礼列劣
7	谷余	良	里李良呂利冷		冷伶
8	沃於	來	林兩		例列
9	要		冷柳律侶亮		冷怜
10	窈恙容	玲洛	留竜流派栗旅料倫	流	玲烈冽料
11	谷欲浴庸	狼浪朗徠	聊笠狸略率梁梨		蛤聊
12	翌翊涌	絡勞嵐	量留理涼琉黎喨	留琉	黎
13	雍預頌猶楊佛揚	雷狼廊	裏稜粮琳勠		豊鈴煉廉
14	銚與溶搖	郎萊椰	菱綾綸僚	領	連領僚
15	養腰葉窯瑤漾様	落落磊摺	輪諒葎論瑠慮寮劉履	瑠	輦練寮
16	餘豫蓉燁	賴	龍霖陵陸燐盧璃燎歷櫪隣	櫪	燎歷暦隣
17	遙	隷蝶擂偏	隆蓼瞭臨嶺		隷錬蓼聯蓮瞭嶺斂勵
18	煜襲曜陽	糧禮	鯉糧獵		鎌禮獵
19	膺	類蕾	鄰麗遼廬	類鏤	麗遼獵籠櫟
20	耀	藍羅			礫瀝
21	譽	鐳蠟欄儷			儷
22		覽	籠麟		
23		蘭			戀
24	鷹		隴		靈
25			籬		
26		邏			
27		鑼纜			

裕 愉 猶 歟 楡

調／音	ろ	わ
1	：	：
2	：	：
3	：	：
4	：	王ワウ
5	：	：
6	六ロク 老ラウ	：
7	呂リヨ 弄ロウ 良リヤウ 角カク ロウ	：
8	肋ロク ： ： ：	和クワ 或ワク 往ワウ 旺ワウ 汪ワウ
9	侶ロ ： ： ：	皇クワウ ワウ ： ：
10	旅ヨ 玲レイ 竜リヤウ ロウ ：	倭ヰ ワ ： ：
11	朗ラウ 浪ラウ 狼ラウ 鹿ロク	鳳ホウ 貫クワン ワン ： ：
12	喨リヤウ 勞ラウ 廊ロウ ：	椀ワン 黄クワウ ワウ ： ：
13	祿ロク 粮リヤウ 稜ロウ 路ロ ヨウ	矮ワイ 碗ワン 話クワ ワ
14	榔ラウ 郎ラウ ： ：	窪ワ 腕ワン
15	慮リヨ 摺ヒロフク 樓ロウ 瑯ラウ 論ロン	：
16	盧ロ 陸リヨク リロク 龍リユウ ロウ ： ：	横クワウ ワウ
17	： ： ： ： ：	隈ワイ
18	獵レウ 糧リヤウ ラウ ： ： ：	謳ワウ
19	廬リヨ 櫓ロ 獵レウ 鏤ロウ 麓ロク	：
20	朧ロ 籃ラン 露ロン	：
21	艪ロ 臘ロウ 蠟ラウ	：
22	艫ロ 蘆ロ 籠ロウ ヨウ	：
23	： ：	：
24	鑪ロ 鷺ロ	：
25		：
26		灣ワン
27		

注意　一般に本字の右側には漢音を左側には呉音を示しておきましたが、まま然らざるところもありますから御注意下さい。尚片假名で付けたものは國字であり、俗は俗字、略は略字、國は國字の略であります。

變卦一覽表

大東愛知編

此表は易盤で三回目に倒れた棒が示した變爻を本文によつて御覽になるときに、其爻が陽であれば陰に、陰であれば陽に變じて變卦した場合の卦を一覽視うる樣にしたものです。
易の解釋には裏(反)がありますから、判斷をする場合に本文の解釋によると共に變卦の意味を本文の裏に充分に含めて考へなければいけません。

變卦一覽表

大東愛知

變卦(之卦)	一爻變	二爻變	三爻變	四爻變	五爻變	六爻變

變卦一覽表

大東愛知

本卦	變卦(之卦)	一爻變	二爻變	三爻變	四爻變	五爻變	六爻變
乾爲天	天風姤	天風姤	天火同人	天澤履	風天小畜	火天大有	澤天夬
坤爲地	地雷復	地雷復	地水師	地山謙	雷地豫	水地比	山地剝
水雷屯	水地比	水地比	水澤節	水火既濟	澤雷隨	地雷復	風雷益
山水蒙	山澤損	山地剝	山風蠱	火水未濟	風水渙	地水師	地火明夷
水天需	水風井	水火既濟	水澤節	水澤節	澤天夬	地天泰	風天小畜
天水訟	天澤履	天地否	天風姤	風水渙	火水未濟	澤水困	澤地萃
地水師	地澤臨	坤爲地	地風升	地雷復	雷水解	坎爲水	山水蒙
水地比	水雷屯	坎爲水	水山蹇	澤地萃	坤爲地	風地觀	風地觀
風天小畜	巽爲風	風火家人	風澤中孚	乾爲天	山天大畜	水天需	火澤睽
天澤履	天水訟	天雷无妄	乾爲天	風澤中孚	火澤睽	兌爲澤	澤地萃
地天泰	地風升	地火明夷	地澤臨	雷天大壯	水天需	山天大畜	火地晉
天地否	天雷无妄	天水訟	天山遯	風地觀	火地晉	澤地萃	澤雷隨

本卦	變卦(之卦)	一爻變	二爻變	三爻變	四爻變	五爻變	六爻變
天火同人	天山遯	乾爲天	天雷无妄	風火家人	離爲火	澤火革	天雷无妄
火天大有	火風鼎	離爲火	火澤睽	山天大畜	乾爲天	雷天大壯	火雷噬嗑
地山謙	地火明夷	地風升	坤爲地	雷山小過	水山蹇	艮爲山	山地剝
雷地豫	雷水解	雷山小過	坤爲地	澤地萃	火地晉	風火家人	地雷復
澤雷隨	澤地萃	兌爲澤	澤火革	水雷屯	震爲雷	天雷无妄	地火明夷
山風蠱	山天大畜	艮爲山	山水蒙	火風鼎	巽爲風	地風升	地澤臨
地澤臨	地水師	地雷復	地天泰	雷澤歸妹	水澤節	山澤損	風地觀
風地觀	風雷益	風水渙	風山漸	天地否	山地剝	水地比	火雷噬嗑
火雷噬嗑	火地晉	火澤睽	離爲火	山雷頤	天雷无妄	震爲雷	澤雷隨
山地剝	山雷頤	山水蒙	艮爲山	火地晉	風火家人	坤爲地	山雷頤
山火賁	艮爲山	山天大畜	山雷頤	離爲火	風雷益	火雷噬嗑	天地否
地雷復	坤爲地	地澤臨	地火明夷	震爲雷	水雷屯	風地觀	坤爲地
天雷无妄	天地否	天澤履	天火同人	風雷益	火雷噬嗑	澤雷隨	天地否

本卦＼變卦(之卦)	一爻變	二爻變	三爻變	四爻變	五爻變	六爻變
山天大畜	山風蠱	山火賁	山澤損	火天大有	風天小畜	地天泰
山雷頤	山地剝	山澤損	山火賁	火雷噬嗑	風雷益	地雷復
澤風大過	澤天夬	澤山咸	澤水困	水風井	雷風恒	天風姤
坎爲水	水澤節	水地比	水風井	澤水困	地水師	風水渙
離爲火	火山旅	火天大有	火雷噬嗑	山火賁	天火同人	雷火豐
澤山咸	澤火革	澤風大過	澤地萃	水山蹇	雷山小過	天山遯
雷風恒	雷天大壯	雷山小過	雷水解	地風升	澤風大過	火風鼎
天山遯	天火同人	天風姤	天地否	風山漸	火山旅	澤山咸
雷天大壯	雷風恒	雷火豐	雷澤歸妹	地天泰	澤天夬	火天大有
火地晉	火雷噬嗑	火水未濟	火山旅	山地剝	天地否	雷地豫
地火明夷	地山謙	地天泰	地雷復	雷火豐	水火既濟	山火賁
風火家人	風山漸	風天小畜	風雷益	天火同人	山火賁	水火既濟
火澤睽	火水未濟	火雷噬嗑	火天大有	山澤損	天澤履	雷澤歸妹

本卦＼變卦(之卦)	一爻變	二爻變	三爻變	四爻變	五爻變	六爻變
水山蹇	水火既濟	水風井	水地比	澤山咸	地山謙	風山漸
雷水解	雷澤歸妹	雷地豫	雷風恒	地水師	澤水困	火水未濟
山澤損	山水蒙	山雷頤	山天大畜	火澤睽	風澤中孚	地澤臨
風雷益	風地觀	風澤中孚	風火家人	天雷无妄	山雷頤	水雷屯
澤天夬	澤風大過	澤火革	澤爲澤	水天需	雷天大壯	乾爲天
天風姤	乾爲天	天山遯	天水訟	巽爲風	火風鼎	澤風大過
澤地萃	澤雷隨	澤水困	澤山咸	水地比	雷地豫	天地否
地風升	地天泰	地山謙	地水師	雷風恒	水風井	山風蠱
澤水困	兌爲澤	澤地萃	澤風大過	坎爲水	雷水解	天水訟
水風井	水天需	水山蹇	坎爲水	澤風大過	地風井	巽爲風
澤火革	澤山咸	澤天夬	澤雷隨	水火既濟	雷火豐	天火同人
火風鼎	火天大有	火山旅	火水未濟	山風蠱	天風姤	雷風恒
震爲雷	雷地豫	雷澤歸妹	雷火豐	地雷復	澤雷隨	火雷噬嗑

本卦＼變卦(之卦)	一爻變	二爻變	三爻變	四爻變	五爻變	六爻變
艮爲山	山火賁	山風蠱	山地剝	火山旅	風山漸	地山謙
風山漸	風火家人	巽爲風	風地觀	天山遯	艮爲山	水山蹇

變卦(之卦) / 本卦	一爻變	二爻變	三爻變	四爻變	五爻變	六爻變
艮爲山	山火賁	山風蠱	山地剝	火山旅	風山漸	地山謙
風山漸	風火家人	巽爲風	風地觀	天山遯	艮爲山	水山蹇
雷澤歸妹	雷水解	震爲雷	雷天大壯	地澤臨	兌爲澤	火澤睽
雷火豐	雷山小過	雷天大壯	震爲雷	地火明夷	澤火革	離爲火
火山旅	離爲火	火風鼎	火地晉	艮爲山	天山遯	雷山小過
巽爲風	風天小畜	風山漸	風水渙	天風姤	山風蠱	水風井
兌爲澤	澤水困	澤雷隨	澤天夬	水澤節	雷澤歸妹	天澤履
風水渙	風澤中孚	風地觀	巽爲風	天水訟	山水蒙	坎爲水
水澤節	坎爲水	水雷屯	水天需	兌爲澤	地澤臨	風澤中孚
風澤中孚	風水渙	風雷益	風天小畜	天澤履	山澤損	水澤節
雷山小過	雷火豐	雷風恒	雷地豫	地山謙	澤山咸	火山旅
水火既濟	水山蹇	水天需	水雷屯	澤火革	地火明夷	風火家人
火水未濟	火澤睽	火地晉	火風鼎	山水蒙	天水訟	雷水解

變卦(之卦) / 本卦	一爻變	二爻變	三爻變	四爻變	五爻變	六爻變
火風鼎	火天大有	火山旅	火水未濟	山風蠱	天風姤	雷風恒
震爲雷	雷地豫	雷澤歸妹	雷火豐	地雷復	澤雷隨	火雷噬嗑

終